



東北大学教養教育院年報
(平成二十六年度)

東北大学教養教育院年報

(平成 26 年度)

東北大学教養教育院

東北大学教養教育院
高度教養教育・学生支援機構

Institute of Liberal Arts and Sciences, Tohoku University

目 次

教養教育院長の挨拶	1
1. 本学における教養教育実施の経緯	2
2. 教養教育の理念	2
3. 「井上プラン」における教養教育院設置と、「里見ビジョン」における教養教育改革	3
4. 初年次教育の重要性	4
5. 教養教育院の位置づけと任務	4
6. 東北大学教養教育院の構成	6
(1) 教養教育院院長	6
(2) 総長特命教授	6
(3) 教養教育特任教員	8
7. 授業担当科目（平成 26 年度）	11
8. 授業の取り組み・狙い・実施状況	18
(1) 森田 康夫	18
(2) 工藤 昭彦	21
(3) 野家 啓一	29
(4) 海野 道郎	34
(5) 吉野 博	43
(6) 浅川 照夫	51
(7) 藤本 敏彦	55
(8) 志柿 光浩	59
(9) 杉浦 謙介	62
(10) 永富 良一	65
9. 『読書の年輪』の発行	69
10. 教養教育特別セミナーと総長特命教授合同講義の実施	70

11. 会議の実施状況	73
(1) 総長との懇談会	73
(2) 教養教育院懇談会	73
(3) 教養教育院総長特命教授定例会.....	74
12. 教養教育院活動（平成 26 年度）の自己評価と今後の課題	81
おわりに	86

参考資料

講義「自然と環境：住いと人と環境」レポートより	
吉野 博 大学のキャンパス・教室などの環境に対する 1 年生の評価	88
東北大学全学教育広報「曙光」からの転載	
花輪 公雄 新しい教養教育の構築と学生支援の充実に向けて —「高度教養教育・学生支援機構」の設置—	92
浅川 照夫 二項対立的な外国語教育観を超えて (平成 25 年度総長教育賞・全学教育貢献賞受賞)	95
海野 道郎 基礎ゼミを通して教養教育を考える	97

教養教育院長の挨拶

本学は、教養教育充実の方策の一つとして、平成 20 年 4 月に教養教育院を設置した。本院は、総長特命教授と特任教員（教養教育）で構成されている。総長特命教授は、在職中教育・研究において優れた業績を有し、また教育に対し強い情熱を持ち、学生諸君に多大な知的刺激を与える能力を有する、本学を定年により退職した名誉教授である。平成 26 年度は 5 名の先生方が任命されている。一方、特任教員は、教養教育に対する強い情熱と優れた教育能力を有する教員で、教養教育を中心とする教育と研究を行い、学生の学習意欲を高め、研究大学にふさわしい魅力的な教養教育を創出することを任務とする教員である。今年度も、5 名の先生方が任命されている。

さて、1990 年代初めのいわゆる「バブル崩壊」以来、我が国は長引く経済不況に陥り、閉塞した状態が続いている。この状態から脱却し、我が国が再び世界に羽ばたくには、資源をもたない状況の中で優れた人材の育成こそが要であるとし、大学教育への期待が声高に叫ばれている。中でも、専門分野での知識伝授型の教育に偏重していた従来型の教育から、物事を俯瞰する力、他者を理解し協働できる力、自分を表現する力、英語を始めとする語学力の向上など、広い意味での新たな教養教育の必要性が謳われている。

本院所属の教員は、現在の我が国が抱える大学教育の課題を真摯に正面から捉えて日々活動している。中でも、昨年 4 月 7 日に行った第 4 回教養教育特別セミナーは、「東北大学のチャレンジ～グローバル時代の教養教育改革」をテーマに、7 月 15 日に行った第 6 回総長特命教授合同講義は、「環境と人間」をテーマに、それぞれ開催した。そこで議論された内容は、これからの中の本学の教養教育を展開する上で礎となる重要なものであった。また、本学の初年次教育の目玉でもある少人数教育「基礎ゼミ」や、昨年度第 2 セメスターから開講した「展開ゼミ」においても、本院所属の教員は率先して体験型・課題解決型（PBL）あるいは課題設定型（IBL）の授業を実践している。

本院は平成 20 年度の設置であるが、本院の活動を自己評価の意味を込めて整理総括し、今後の活動に反映させることを目的として、毎年年報を作成している。本冊子は設置から 7 年目となる平成 26 年度の活動報告書である。これまでと同様、全学の多くの方々にご覧いただき、教養教育院の今後のいっそうの発展に向けて忌憚のないご意見を頂ければ幸いである。

平成 27 年 3 月

教養教育院院長

理事（教育・学生支援・教育国際交流担当）

高度教養教育・学生支援機構長

花 輪 公 雄

1. 本学における教養教育実施の経緯

平成 3 年の大学設置基準の大綱化を受け、本学では平成 5 年から学部一貫教育の理念の下に教養部を廃止し、教養教育を改革した形での全学教育を開始した。しかし、全学教育を運営・統括する組織の確立が不十分であり、また、情報化やグローバル化、少子化などの時代の流れに対応したものとはならなかった（全学教育改革委員会報告、平成 12 年 4 月）。

平成 12 年 4 月 18 日、評議会において全学教育改革検討委員会報告が了承され、委員会報告に即して平成 14 年 4 月より新しい全学体制で全学教育が開始された。その結果、特色ある大学教育支援プログラム（特色 GP）に、全学教育の取り組みである平成 17 年度の「融合型理科実験」と平成 18 年度の「基礎ゼミ」が 2 年連続で採択された。

平成 19 年 3 月の「井上プラン 2007」の発表を契機に、東北大独自の教養教育カリキュラムの再構築、教養教育の実施体制の充実などの教養教育充実化の方策が実施された。これを引き継いで平成 25 年 8 月に公表された「里見ビジョン」では VISION 1 に教育が取り上げられ、その趣旨を受け、平成 26 年 4 月に高度教養教育・学生支援機構が設置された。

2. 教養教育の理念

「知識基盤社会」といわれる 21 世紀において、人々の知的活動・想像力が最大の資源であるわが国にとって、優れた人材の育成と科学技術の振興が不可欠であり、大学教育は技能や知識の習得のみを目的とするのではなく、全人格的な発展の礎を築くものである（中央教育審議会、平成 17 年 2 月 1 日）。

21 世紀の国際社会において、政治・経済面はもとより人類の未来にはかかる地球環境問題など地球規模の諸問題解決への貢献、人類共通の知的資産の創造、新たな文化や価値観の創造などの面において、国際社会で知的リーダーシップを發揮できる人材の養成が必須である（大学審議会、平成 10 年 10 月 26 日）。

平成 20 年 3 月の中央教育審議会大学分科会の「学士課程教育の構築に向けて」において、「大学は教育の質を高め、成績評価の厳格化を図り、卒業生の質を保証することや、大学は社会人としての基礎的能力と専門的能力を備えた卒業生を送り出すこと」が指摘されている。

社会の高度化・複雑化が進む中で、「主体的に変化に対応し、自ら将来の課題を探求し、その課題に対して幅広い視野からの柔軟かつ総合的な判断を下すことのできる力」（課題探求能力）の育成が重要であるとの視点に立ち、「学問のすそ野を広げ、さまざまな角度から物事を見ることができる能力や、自主的・総合的に考え、的確に判断する能力、豊かな人間性を養い、自分の知識や人生を社会の関係で位置づけることのできる人材を育てるのが、教養教育の理念・目標である（大学審議会、平成 10 年 10 月 26 日）。

「井上プラン」とそれを引き継いだ「里見ビジョン」では、「教養教育は、学生にとって人間力を高め、世界に向けて視野を広げ、専門教育の基盤を確立するために必要不可欠であり、異

分野融合研究を創造していくためにも重要であり、もって『知の創造体』を担う高度な教養、専門的な知識および国際的な視野を備えた指導的人材を育成する」と謳われている。

3. 「井上プラン」による教養教育院設置と、「里見ビジョン」における教養教育改革

本学が名実ともに「世界リーディング・ユニバーシティ」であるためには、知の継承体としての「教育」が重要であり、その継承者を広く社会に輩出することが主要な社会貢献の一つである。

このような理念の下に、「井上プラン」では、①東北大学独自の教養教育カリキュラムの再構築、②教養教育の実施体制の充実、を提示し、世界へ飛翔するための英語能力を強化し国際的感覚を身に付けること、さらには独創的研究や異分野融合の研究の創造に不可欠な大学院生対象の教養教育を創出することなどを目標とした（総長井上明久、「曙光」平成 20 年 4 月号）。

「井上プラン」では、「教養部の廃止以降、高等教育開発推進センターを中心に教養教育を推進し、実績を上げてきたが、より高度な教養を身につけた学生の育成には、教養教育の実施体制の更なる整備が必要である。また、国際コミュニケーション能力をはじめとする教養教育を担える幅広い知識と経験のある教員を確保し、学部から大学院へつながる研究の面白さを理解させる講義の充実が急務となっている。このような実施体制の充実の一環として、平成 20 年度から総長特命教授（教養教育）の発令を行い、その所属組織である教養教育院を創設した」と教養教育を重視する方向性を明らかにしている。

教養教育重視の具体的なプランとして、①教員の資質の一層の向上を図るとともに、教養教育に対し意欲的に取り組む教員を積極的に確保する。あわせて、当該教員に対するインセンティブおよび評価方法について検討する。②教養教育に取り組む教員を「教養教育特任教員」として教養教育院に兼務する制度を導入する。③教養教育を総合的に統括し、科目設定、教員人事、学生支援等に責任を持つ組織体制を整備する。④学生の教養教育の理解を深めるため、スチューデントアドバイザーリー制度（仮称）を導入し、助教や TA、RA とも連携した効果的な教育体制の確保を図る。以上の 4 点を提議した。

これらを具体的に遂行するための一つとして、「幅広い知識と深い研究経験のある退職教授を総長特命教授（教養教育）として配置し、研究中心大学として、初年次学生ばかりでなく大学院生も対象として教養教育を担う」制度として教養教育院が新設され（平成 20 年度）、さらに、「教養教育に取り組む教員を教養教育特任教員として教養教育院に兼務する」制度が設けられた（平成 22 年度）。

平成 24 年 4 月に井上総長を引き継いだ里見進総長は、東北大学を「人が集い、学び、創造する、世界に開かれた知の共同体」としてとらえ、学生・教員・職員など一人ひとりの能力を存分に發揮できる環境を整えることを目指して、平成 25 年 8 月に里見ビジョンを明らかにし、「ワールドクラスへの飛躍」と「復興・新生の先導」という 2 つの目標の達成を目指した。

「里見ビジョン」は、VISION 1 から VISION 7 まで 7 つからなるが、そのうちの VISION 1 が教育に関するものであり、「学生が国際社会で力強く活躍できる人材へと成長していく場を創出」することを明らかにし、重点政策①として「グローバルリーダーを育成するための教養教育の充実を核とする教育改革」を、重点政策②として「グローバルな修学環境の整備」を、重点政策③として「学生支援の充実・強化」を取り上げ、東北大学の教育の刷新を目指している。

里見ビジョンを実現するため、東北大学は、2014 年 4 月、高等教育開発推進センター、国際交流センター、国際教育院、グローバルラーニングセンター、教養教育院、高度イノベーション博士人財育成センターを統合し、新たに高度教養教育・学生支援機構を設置した。この機構は、高度教養教育、学生支援に関する調査研究、開発、企画、提言、および実施を一体的に行い、本学の教育の質的向上に寄与するための学内共同教育研究施設と位置づけられ、国内外を見ても他に例のない革新的でチャレンジングな組織として設計されており、高大接続と入学試験、全学教育の開発と推進、高等教育国際化の推進、学生相談と学生支援、保健管理と健康指導、高等教育の研究と開発を行い、これらの成果を評価分析し、質的向上を図る各種の専門性開発活動を行う総合的な役割を果たすことを目的としている。高等教育のモデル構築の核心は、卓越性と多様性の追求であり、教育における卓越性の柱として、高度教養教育の開発と提供、多様性の柱として多様な学生のニーズに応える学生支援の開発と実施を目指している。

4. 初年次教育の重要性

平成 20 年 3 月の中央教育審議会大学分科会の「学士課程教育の構築に向けて」において学士課程教育における初年時教育の重要性が指摘され、「初年次教育は高等学校や他大学からの円滑な移行をはかり、学習および人格的な成長に向け、大学での学問的・社会的な諸経験を成功させるべく、おもに新入生を対象に総合的に作られた教育プログラム」と位置づけられている。これを受け、大学として「学びの動機付けや習慣形成に向けて、初年次教育の導入・充実を図り、学士課程全体の中で適切に位置づける」ことが今後の改革の方策として述べられている。

さらに、「大学生活への適応、当該大学への適応（自分の居場所作り、自校の歴史の学習等）、大学で必要な学習方法・技術の会得、自己分析、ライフプラン、キャリアプランづくりの導入などの要素を体系化する（例：フレッシュマンゼミ、基礎ゼミなど）。また、きめ細かな学習アセスメントを実施し、学生の現状や変化の客観的な把握に努める」ことが示されている。

5. 教養教育院の位置づけと任務

これまで、教養教育の改革として、学部の枠にとらわれない少人数教育としての「基礎ゼミ」、文科系の学生を対象にした自然科学総合実験の創出、英語教育の充実などが実施してきた。さらに、高い能力を持つ本学学生が学ぶことへのモチベーションを高め、大学入学当初から学生の

学習への興味を引き出すことが必要であるとされた。

本学の「教養教育プロジェクト・チーム報告書」(平成 19 年 9 月 28 日)において、「特命教授」は「研究の基本姿勢やその魅力と醍醐味などを直接学生に伝えることによって、本学の新入生にたいして大学という学びの場における新たな知的刺激をあたえ、学習意欲や研究意欲の更なる向上を図ることに貢献する」と答申され、「特任教員」制度については、「教養教育に対する強い情熱と優れた教育能力を有する本学の教員を、本学の教養教育を専ら担当する「(教養教育) 特任教員」として総長の直接の任命により任用する」制度とされている。

「特命教授」は、同報告書「(教養教育) 特務教授」(仮称) 制度(案)の概要」の「1. 位置づけと任務」の項目の中で、次のように規定されている。

- (1)在職中に教育・研究で優れた実績を有し、教育に対して情熱を持つ、本学の退職教授を定年退職後に本学の教養科目を担当する教員として再雇用する制度
- (2)総長より特別に教養教育を主な任務として任せられた教員
- (3)学生の学習意欲を高め、研究の真髄と面白さを伝えるなど、研究大学にふさわしい魅力的な教養教育を創出する教員

「特任教員」は、同報告書「(教養教育) 特任教員」(仮称) 制度(案)の概要」の「1. 位置づけと任務」の項目の中で、次のように規定されている。

- (1)教養教育に対する強い情熱と優れた教育能力を有する本学の教員で、教養教育を中心とする教育・研究を行うことを任務とする教員制度
- (2)総長により特別に教養教育を主な任務として任せられた教員
- (3)学生の学習意欲を高め、研究大学にふさわしい魅力的な教養教育を創出する教員

6. 東北大学教養教育院の構成

教養教育院は、平成 26 年 4 月 1 日現在、以下のように構成されている。

(1) 教養教育院院長

花輪 公雄 (はなわ きみお)

東北大学理事（教育・学生支援・教育国際交流担当）、高度教養教育・学生支援機構長

(2) 総長特命教授

・森田 康夫 (もりた やすお)

北海道大学助教授、東北大学助教授、東北大学教授、東北大学評議員、東北大学総長特別補佐（交通）、平成 21 年 3 月定年退職

現 在：総長特命教授（教養教育院）、東北大学名誉教授、日本学術会議第三部会員
研究領域：数学（整数論）、数学教育、入学試験

教育実績：全学教育科目：基礎ゼミ、基幹科目（現代学問論、自然論）、展開科目（総合科目）、数学（線形代数学、数理統計学、解析学 D）

東北大学理学部及び理学研究科における授業と研究指導

北海道大学における授業と研究指導

宮城大学における数学概論

東北学院大学における線形代数学

北海道大学、岩手大学、埼玉大学、東京大学、都立大学、名古屋大学、金沢大学、京都大学、大阪大学、広島大学、九州大学、プロンペイ王立大学等における集中講義

主な受賞：作行会奨学生

学会活動：日本数学会（元理事長、監事）、日本数学協会、日本数学教育学会、国際教育学会（顧問）

・工藤 昭彦 (くどう あきひこ)

東北大学助教授、教授、農学研究科長 平成 22 年 3 月定年退職

現 在：総長特命教授（教養教育院）、東北大学名誉教授

研究領域：農業経済学

教育実績：農学部および農学研究科における授業と研究指導

岩手大学、北里大学における集中講義

学会活動：現在、東北農業経済学会会員

・野家 啓一（のえ けいいち）

南山大学助手、同専任講師、東北大学助教授、同教授、同評議員、同文学研究科長・文学部長、同総長補佐、同副学長、同附属図書館長、同理事、平成25年3月定年退職
現 在：総長特命教授（教養教育院）、東北大学名誉教授、日本学術会議連携会員、

人間文化研究機構教育研究評議員、総合地球環境研究所運営委員

研究領域：哲学、科学基礎論

教育実績：東北大学文学部及び文学研究科における授業と研究指導

教養教育科目における哲学、論理学、総合科目、全学教育科目における基礎ゼミ、基幹科目（思想と倫理の世界）、人文科学（哲学・倫理学）、総合科目（カレントトピックス・展開ゼミ）

放送大学における「科学の哲学」の教材執筆、講義及び面接授業

東京大学、京都大学、大阪大学、名古屋大学、九州大学、東京都立大学、金沢大学、神戸大学、千葉大学、熊本大学、新潟大学、岩手大学、山形大学、弘前大学、宮城教育大学、大阪市立大学、南山大学、関西大学等における集中講義

仙台大学、尚絅女子大学等における非常勤講師

主な受賞：第20回山崎賞（1994年11月）、フルブライト海外派遣研究者（1979年9月）

学会活動：日本哲学会（元会長、理事・評議員）、科学基礎論学会（理事・評議員）、日本科学哲学会（理事・評議員）、日本現象学会（元事務局長、委員）、日本生命倫理学会（評議員）、日本ホワイトヘッド・プロセス学会（理事）、西田哲学会（理事）、総合人間学会（顧問）、科学技術社会論学会、東北哲学会（会長）、東北アメリカ学会（監事）、Husserl Studies (editorial board)、Journal of Japanese Philosophy (advisory board)

・海野 道郎（うみの みちお）

東京工業大学助手、関西学院大学助教授、東北大学助教授、教授、評議員 平成20年3月定年退職

東北大学総長特命教授（教養教育院）、宮城学院女子大学学長

現 在：総長特命教授（教養教育院）、東北大学名誉教授

研究領域：理論社会学、環境社会学、社会意識論

教育実績：東北大学文学部および文学研究科における授業と研究指導

東北大学全学教育における基礎ゼミ、現代学問論

文部省統計数理研究所併任教授

北海道大学、弘前大学、岩手大学、茨城大学、東京大学、東京都立大学、明治学院大学、信州大学、名古屋大学、三重大学、大阪大学、関西学院大学、松山大学等における集中講義

宮城学院女子大学、尚絅女学院短期大学等における非常勤講師
主な受賞：社会科学国際フェロー（通称：新渡戸フェロー。事務局：（財）国際文化会館（1978年7月～1980年7月）
福武直賞（1991年7月、共同）、作行会奨学生
学会活動：日本社会学会（データベース担当理事、元財務理事、元理事・機関紙『社会学評論』編集委員長）、数理社会学会（元会長、元理事・機関紙『理論と方法』編集委員長、元研究担当理事）、環境社会学会（元会長、元機関紙『環境社会学研究』編集委員長、元事務局長）、東北社会学会（元会長、元研究担当理事）、日本行動計量学会（元理事、元編集委員、元運営委員）

・吉野 博（よしの ひろし）

東京大学助手、東北大学助教授、教授、ディスティングイッシュト・プロフェッサー、平成24年3月定年退職

現 在：総長特命教授（教養教育院）、東北大学名誉教授、日本学術会議第三部会員、秋田県立大学客員教授、前橋工科大学客員教授、同済大学兼任教授

研究領域：建築環境工学

教育実績：全学教育科目：基幹科目（自然論 自然と環境）、共通科目（基礎ゼミ）、展開科目（展開ゼミ）

東北大学工学部及び大学院工学研究科における授業と研究指導

宮城学院女子大学、宮城教育大学、埼玉大学、東北学院大学で非常勤講師
九州大学、山口大学、足利工業大学、ハルビン工科大学、上海交通大学、河南理工大学等における集中講義

主な受賞：空気調和・衛生工学会 学術論文部門 論文賞、日本建築学会賞、日本建築学会東北支部東北建築賞（業績賞）、空気調和・衛生工学会（功績賞）、空気調和・衛生工学会 井上宇市記念賞、Contributing to the award of the Nobel Peace Prize for 2007 to the IPCC

学会活動：日本建築学会（会長）、空気調和・衛生工学会（元理事、元東北支部長）、日本臨床環境医学会（副理事長）、人間一生活環境系学会（評議員）、日本雪工学会（元会長）、他

（3）教養教育特任教員

・浅川 照夫（あさかわ てるお）

北見工業大学講師、助教授、金沢大学助教授、東北大学助教授、教授、国際文化研究科長
現 在：東北大学高度教養教育・学生支援機構教授、教養教育特任教員（教養教育院）

研究領域：英語学、英語教育

教育実績：全学教育科目：英語A1、英語A2、英語B1、英語B2、英語C1、英語C2

国際文化研究科における研究指導

教育実績：全学教育科目：英語 A1、英語 A2、英語 B1、英語 B2、英語 C1、英語 C2

学会活動：日本英文学会、日本英語学会、Linguistic Society of America

・藤本 敏彦（ふじもと としひこ）

東北大学助手、Turku大学（フィンランド）・日本学術振興会 特定国派遣研究員、東北大学講師、東京都老人総合研究所・協力研究員

現 在：東北大学高度教養教育・学生支援機構准教授、教養教育特任教員（教養教育院）、医学系研究科・障害科学専攻・機能医科学講座・運動学准教授（兼任）、創生応用医学研究センター・スポーツ医科学コアセンター・プロジェクト長（兼務）、大学教育支援センター・研究開発委員

研究領域：スポーツ科学、運動学、生理学

教育実績：全学教育および医学系研究科・障害科学専攻における授業と研究指導

全学教育「基礎ゼミ」「展開ゼミ」「スポーツA」「スポーツB」「体と健康」「生命と自然」担当

医学系研究科「大学院後期課程の博士論文指導」担当

講 演：日本理学療法士協会 講演型研修会「運動に伴う脳機能の変化」

社会活動：仙台市スポーツ推進審議会委員、仙台市市民局指定管理者選対委員会委員、柔道整復師会学術委員

主な受賞：European College of Sports Science Young Investigators Award, Copenhagen, Denmark, -1997、第60回日本体力医学会奨励賞, 岡山-2005、東北大学全学教育貢献賞, 仙台-2014

学位：博士（医学）

学会活動：日本体力医学会（評議員）、European College of Sports Science、日本体育学会（東北地域理事）、日本運動生理学会

・志柿 光浩（しがき みつひろ）

ペルトリコ大学講師、長崎大学講師、常葉学園大学助教授、東北大学助教授、教授

現 在：東北大学大学院国際文化研究科教授、教養教育特任教員（教養教育院）

研究領域：言語教育学、スペイン語教育学、アメリカ研究（ペルトリコ研究・ラティノ研究）

教育実績：全学教育科目：基礎スペイン語 I、基礎スペイン語 II、展開スペイン語 I、展開スペイン語 II

大学院：言語教育体系論特論 A、言語教育体系論特論 B、言語教育体系論総合演習 A、言語教育体系論総合演習 B、言語教育体系論特別研究 A、言語教育体系論特別研究 B、言語教育体系論特別演習 A、言語教育体系論特別演習 B、言語教育学概論、研究指導

主な受賞：平成 22 年 1 月東北大学第七回全学教育貢献賞、平成 22 年 3 月東北大学総長教育賞（共にスペイン語教科部会として）

・杉浦 謙介（すぎうら けんすけ）

東北大学講師、助教授、教授

現 在：東北大学大学院国際文化研究科教授、教養教育特任教員（教養教育院）

研究領域：ドイツ語教育

教育実績：全学教育科目：基礎ドイツ語 I (4 コマ)、基礎ドイツ語 II (4 コマ)、展開ドイツ語 I、展開ドイツ語 II

大学院：言語応用論特論 A、言語応用論特論 B、言語応用論総合演習 A、言語応用論総合演習 B、言語応用論特別研究 A、言語応用論特別研究 B、言語応用論特別演習 A、言語応用論特別演習 B、言語芸術形象論、研究指導

主な受賞：情報文化学会・学会賞

学会活動：e-Learning 教育学会（理事・事務局長）、日本ドイツ語情報処理学会（役員・編集委員長）、外国語教育メディア学会

・永富 良一（ながとみ りょういち）

東北大学教授、医学系研究科教授、医工学研究科教授、医工学研究科副研究科長

現 在：医工学研究科教授、医工学研究科副研究科長、医学系研究科附属創生応用医学研究センター・スポーツ医科学コアセンター長、教養教育特任教員（教養教育院）、学友会体育部長

研究領域：体力科学、健康科学、スポーツ科学

教育実績：医工学研究科、医学部及び医学系研究科障害科学専攻における授業と研究指導、全学教育における保健体育科目「スポーツ A・B (サッカー)」、「体と健康 (身体の文化と科学)」担当、宮城学院大学における講義、東北管区警察学校における非常勤講師（体育実技）

主な受賞：東北大学総長教育賞（H21）

学位：博士（医学）

学会活動：日本体力医学会（理事）、日本臨床スポーツ医学会（代議員）、日本老年医学会（評議員）、International Society of Exercise & Immunology（理事、元会長）、European College of Sports Science（Fellow）、American College of Sports Medicine、日本疫学会、日本運動疫学会、日本運動免疫研究会（前会長）

その他：宮城県スポーツドクター連絡協議会会長、宮城県スポーツ医学懇話会会长、仙台市スポーツ推進審議会副委員長、宮城県スポーツ推進審議会副委員長、日本学術会議連携会員

7. 授業担当科目（平成 26 年度）

(1) 森 田 康 夫

(第 1 セメスター)

- ・基幹科目（自然論） 「科学と情報」 数学と人間—数学を俯瞰する
火曜日 1 時限 対象：医・保・歯・薬・工 受講学生数 109 名
- ・展開科目（総合科学（総合科目）） 「教育と科学技術」
火曜日 5 時限 対象：全学部 受講学生数 12 名
- ・共通科目（転換・少人数科目） 「基礎ゼミ」 学校教育の在り方と入学試験の功罪を考える
月曜日 3 時限 対象：全学部 受講学生数 22 名
- ・共通科目（転換・少人数科目） 「基礎ゼミ」 学校教育の在り方と入学試験の功罪を考える
月曜日 4 時限 対象：全学部 受講学生数 21 名

(第 2 セメスター)

- ・基幹科目（自然論） 「科学と情報」 数学と人間—数学を俯瞰する
月曜日 3 時限 対象：文系・工 受講学生数 181 名
- ・基幹科目（自然論） 「科学と情報」 数学と人間—数学を俯瞰する
火曜日 1 時限 対象：文系・理・医・農 受講学生数 194 名
- ・展開科目（総合科学（総合科目）） 「教育と科学技術」
月曜日 5 時限 対象：全学部 受講学生数 72 名
- ・展開科目（総合科学（総合科目）） 「教育と科学技術」
火曜日 5 時限 対象：全学部 受講学生数 31 名

(2) 工 藤 昭 彦

(第 1 セメスター)

- ・共通科目（転換少人数科目） 「基礎ゼミ」 「農」的世界の可能性—ポスト工業化社会の展望
月曜日 3 時限 対象：全学部 受講学生数：21 名
- ・共通科目（転換少人数科目） 「基礎ゼミ」 現代世界の「食」—飽食と飢餓の構造—
木曜日 5 時限 対象：全学部 受講学生数：22 名
- ・展開科目（総合科学（総合科目）） 時代の文脈からみた「食」と「農」
火曜日 5 時限 対象：全学部 受講学生数：145 名
- ・展開科目（総合科学（総合科目）） 時代の文脈からみた「食」と「農」
金曜日 5 時限 対象：全学部 受講学生数：46 名
- ・基幹科目（社会論） 「経済と社会」 資本主義と農業—世界恐慌・ファシズム体制・

農業問題一

- 火曜日 1 時限 対象：医・保・歯・薬・工 受講学生数：211名
(第2セメスター)
- ・基幹科目（社会論） 「経済と社会」 資本主義と農業—世界恐慌・ファシズム体制・農業問題一
- 火曜日 1 時限 対象：文系・理・農 受講学生数：117名
- ・基幹科目（社会論） 「経済と社会」 環境と経済・社会の調和に関する多様なアプローチ
- 月曜日 3 時限 対象：文系 受講学生数：65名
- ・基幹科目（社会論） 「経済と社会」 環境と経済・社会の調和に関する多様なアプローチ
- 月曜日 4 時限 対象：文系理農 受講学生数：32名

(3) 野 家 啓 一

(第1セメスター)

- ・基幹科目（人間論） 「思想と倫理の世界」 現代哲学への招待
- 木曜日 2 時限 対象：文系・理・薬・農 受講学生数：261名
- ・共通科目（転換・少人数科目） 「基礎ゼミ」 英吾で読む『奥の細道』
- 月曜日 5 時限 対象：全学部 受講学生数：23名
- ・共通科目（転換・少人数科目） 「基礎ゼミ」 哲学・ゼロからの出発
- 木曜日 5 時限 対象：全学部 受講学生数：22名

(第2セメスター)

- ・基幹科目（人間論） 「哲学と倫理の世界」 現代哲学への招待
- 月曜日 3 時限 対象：文系 受講学生数：163名
- ・基幹科目（人間論） 「哲学と倫理の世界」 現代哲学への招待
- 木曜日 3 時限 対象：文・教・法・保 受講学生数：95名
- ・展開科目（人文科学） 「哲学・倫理学」 科学技術の哲学と倫理
- 月曜日 2 時限 対象：文系・医・保・歯 受講学生数：110名
- ・展開科目（総合科学（カレントトピックス）） 「展開ゼミ」 哲学入門・第一歩
- 木曜日 5 時限 対象：全学部 受講学生数：9名

(第3セメスター)

- ・展開科目（人文科学） 「哲学・倫理学」 科学技術の哲学と倫理
- 水曜日 2 時限 対象：理・保（看）・薬・工・農 受講学生数：122名

(4) 海 野 道 郎

(第1セメスター)

- ・基幹科目（社会論） 「社会の構造」 社会の生成メカニズム：ミクロからの出発
水曜日 1 時限 対象：文・教・法・経・理・農 受講学生数：61名
- ・基幹科目（社会論） 「社会の構造」 社会の生成メカニズム：ミクロからの出発
水曜日 3 時限 対象：医・歯・薬・工 受講学生数：140名
- ・共通科目（転換・少人数科目） 「基礎ゼミ」 文学作品に見る「社会と思想」
月曜日 3 時限 対象：全学部 受講学生数：21名
- ・共通科目（転換・少人数科目） 「基礎ゼミ」 人に会う：生きる意味と世の中の仕組み
月曜日 4・5 時限（隔週） 対象：全学部 受講学生数：21名
- ・展開科目（総合科学（総合科目）） 「東日本大震災に学ぶ：社会科学の可能性」
火曜日 5 時限 対象：全学部 受講学生数：7名

(第2セメスター)

- ・基幹科目（社会論） 「社会の構造」 社会的決定のメカニズム
月曜日 4 時限 対象：文・教・法・経・理・農 受講学生数：44名
- ・基幹科目（社会論） 「社会の構造」 社会的決定のメカニズム
水曜日 3 時限 対象：理・医・歯・薬・工 受講学生数：39名
- ・展開科目（総合科学（総合科目）） 「社会的ジレンマ：環境問題の基本メカニズム」
火曜日 5 時限 対象：全学部 受講学生数：5名
- ・展開科目（総合科学（カレントトピックス）） 「復興の社会学」
集中（土曜日午後） 対象：学都仙台コンソーシアム加盟機関の学生 受講学生数：29名

(5) 吉野 博

(第1セメスター)

- ・基幹科目（自然論） 「自然と環境」 住いと人と環境
水曜日 1 時限 対象：文系・理・農 受講学生数：20名
- ・基幹科目（自然論） 「自然と環境」 住いと人と環境
水曜日 3 時限 対象：医・歯・薬・工 受講学生数：77名
- ・共通科目（転換・少人数科目） 「基礎ゼミ」 住いのエネルギー消費構造を理解して
温暖化防止策を探る
月曜日 4 時限 対象：全学部 受講学生数：19名

(第2セメスター)

- ・基幹科目（自然論） 「自然と環境」 住いと人と環境
木曜日 2 時限 対象：経・保・歯・薬・工・農 受講学生数：14名
- ・基幹科目（自然論） 「自然と環境」 住いと人と環境
木曜日 3 時限 対象：文・教・法・保 受講学生数：50名
- ・展開科目（総合科学（カレントトピックス）） 「展開ゼミ」 環境とエネルギー問題
月曜日 5 時限 対象：全学部 受講学生数：4名（高校生1名を含む）

- ・展開科目（総合科学（カレントトピックス））「展開ゼミ」 環境とエネルギー問題
木曜日 5 時限 対象：全学部 受講学生数：4名（高校生 2名を含む）

(6) 浅川照夫

(第1セメスター)

- ・共通科目（外国語（英語）） 「英語 A1」
金曜日 4 時限 対象：経 受講学生数：38名
- ・共通科目（外国語（英語）） 「英語 B1」
月曜日 1 時限 対象：経 受講学生数：87名
水曜日 1 時限 対象：医・歯・薬 受講学生数：83名
木曜日 3 時限 対象：工 受講学生数：43名
金曜日 1 時限 対象：理 受講学生数：76名

(第2セメスター)

- ・共通科目（外国語（英語）） 「英語 A2」
木曜日 1 時限 対象：歯・薬 受講学生数：34名
- ・共通科目（外国語（英語）） 「英語 B2」
月曜日 1 時限 対象：経 受講学生数：68名
木曜日 3 時限 対象：工 受講学生数：46名
金曜日 1 時限 対象：文・教 受講学生数：65名

(第3セメスター)

- ・共通科目（外国語（英語）） 「英語 C1」
木曜日 1 時限 対象：法 受講学生数：48名
- ・共通科目（外国語（英語）） 「英語 C2」
月曜日 3 時限 対象：文・教 受講学生数：67名
水曜日 1 時限 対象：医・保 受講学生数：24名

(7) 藤本敏彦

(第1セメスター)

- ・共通科目（保健体育） 「スポーツ A」 ソフトボール
水曜日 2 時限 対象：医・歯・薬 受講学生数：54名
- ・共通科目（転換・少人数科目） 「基礎ゼミ」 運動とこころ
月曜日 3 時限 対象：全学部 受講学生数：20名
- ・基幹科目（自然論） 「生命と自然」 身体運動の仕組み
火曜日 1 時限 対象 全学部 受講学生数：362名
- ・基幹科目（自然論） 「生命と自然」 ヒト・人を知る（一部担当）
水曜日 1 限目 対象：全学部 受講学生数：153名

(第2セメスター)

- ・共通科目（保健体育） 「スポーツA」 ソフトボール
 - 火曜日 3 時限 対象：農 受講学生数：66名
 - 木曜日 2 時限 対象：法 受講学生数：28名
 - 金曜日 3 時限 対象：理 受講学生数：46名
- ・展開科目（総合科学（カレントトピックス）） 「展開ゼミ」 こころと体の健康をつなぐ
 - 金曜日 5 時限 対象：全学部 受講学生数：54名
- ・共通科目（保健体育） 「体と健康」 身体の文化と科学（一部担当）
 - 月曜日 4 時限 対象：全学部 受講学生数：72名

(第3セメスター)

- ・共通科目（保健体育） 「スポーツA」 ソフトボール
 - 火曜日 2 時限 対象：工A 受講学生数：66名
 - 火曜日 4 時限 対象：工B 受講学生数：57名
 - 水曜日 4 時限 対象：工C 受講学生数：45名
- ・共通科目（保健体育） 「スポーツB」 ソフトボール
 - 水曜日 3 時限 対象：全学部 受講学生数：22名
- ・共通科目（保健体育） 「スポーツB」 ソフトボール
 - 金曜日 2 時限 対象：全学部 受講学生数：26名
- ・共通科目（保健体育） 「スポーツB」 武道「留学生と学ぶ合気道」
 - 木曜日 3 時限 対象：全学部 受講学生数：29名
- ・共通科目（保健体育） 「フィジカル・トレーニング」
 - 火曜日 5 時限 対象：全学部 受講学生数：5名

(第4セメスター)

- ・共通科目（保健体育） 「スポーツB」 武道「留学生と学ぶ空手」
 - 水曜日 3 時限 対象：全学部 受講学生数：21名
- ・共通科目（保健体育） 「フィジカル・トレーニング」
 - 火曜日 4 時限 対象：全学部 受講学生数：1名（非受講登録者 15名）

(8) 志 柿 光 浩

(第1セメスター)

- ・共通科目（外国語（初修語（スペイン語））） 「基礎スペイン語I」
 - 火曜日 2 時限 対象：理・農 受講学生数：39名
 - 火曜日 3 時限 対象：医・歯・薬 受講学生数：40名
 - 木曜日 1 時限 対象：理・農 受講学生数：39名
 - 金曜日 3 時限 対象：医・歯・薬 受講学生数：40名

(第2セメスター)

- ・共通科目（外国語（初修語（スペイン語））） 「基礎スペイン語II」

火曜日 2 時限 対象：理・農 受講学生数：39名

火曜日 3 時限 対象：医・歯・薬 受講学生数：40名

木曜日 1 時限 対象：理・農 受講学生数：39名

金曜日 3 時限 対象：医・歯・薬 受講学生数：40名

(第3セメスター)

- ・共通科目（外国語（初修語（スペイン語））） 「展開スペイン語I」

火曜日 5 時限 対象：全学部 受講学生数：16名

(第4セメスター)

- ・共通科目（外国語（初修語（スペイン語））） 「展開スペイン語II」

火曜日 5 時限 対象：全学部 受講学生数：10名

(9) 杉 浦 謙 介

(第1セメスター)

- ・共通科目（外国語（初修語（ドイツ語））） 「基礎ドイツ語I」

火曜日 4 時限 対象：工 受講学生数：43名

火曜日 3 時限 対象：医・歯・薬 受講学生数：43名

木曜日 1 時限 対象：工 受講学生数：43名

金曜日 3 時限 対象：医・歯・薬 受講学生数：43名

(第2セメスター)

- ・共通科目（外国語（初修語（ドイツ語））） 「基礎ドイツ語II」

火曜日 4 時限 対象：工 受講学生数：40名

火曜日 3 時限 対象：医・歯・薬 受講学生数：43名

木曜日 1 時限 対象：工 受講学生数：40名

金曜日 3 時限 対象：医・歯・薬 受講学生数：43名

(第3セメスター)

- ・共通科目（外国語（初修語（ドイツ語））） 「展開ドイツ語I」

木曜日 5 時限 対象：全学部 受講学生数：36名

(第4セメスター)

- ・共通科目（外国語（初修語（ドイツ語））） 「展開ドイツ語II」

木曜日 5 時限 対象：全学部 受講学生数：36名

(10) 永 富 良 一

(第1セメスター)

- ・共通科目（保健体育） 「スポーツA」 サッカー

水曜日 2 時限 対象：医・歯・薬 受講学生数：58名（うち女子13名）

(第2セメスター)

- ・共通科目（保健体育） 「スポーツ A」 サッカー
木曜日 3 時限 対象：経 受講学生数：42 名
- ・共通科目（保健体育） Health Science (G30)
木曜日 4 時限 対象：G30 全学部（理・工・農） 受講学生数：27 名
- ・共通科目（保健体育） 「体と健康」 身体の文化と科学（一部担当）
月曜日 5 時限 対象：全学部

(第3セメスター)

- ・共通科目（保健体育） 「スポーツ A」 サッカー
木曜日 4 時限 対象：工 D 受講学生数：18 名

(第4セメスター)

- ・共通科目（保健体育） 「スポーツ B」 サッカー
火曜日 3 時限 対象：全学部 受講学生数：13 名

(第1、2、3セメスター共通)

- ・共通科目（保健体育） 「スポーツ A」 セルフケア
全スポーツ A 開講曜日・時限 対象：全学部 受講学生数：9 名

8. 授業の取り組み・狙い・実施状況

(1) 森 田 康 夫

a. 教養教育院教授としての授業の狙いと取り組み

(第 1 セメスター)

①基幹科目（自然論） 「科学と情報」 数学と人間—数学を俯瞰する

文明の成立と共に数学（算数）が成立し、ギリシャで数学の学問体系が確立した。その後デカルトやニュートンの研究により「科学を語る言葉」としての数学の役割が確定し、さらに最近は、画像診断や通信などで数学の新しい応用が行われている。この様な数学発展の歴史と最近の数学の問題を紹介し、数学や科学は長い時間をかけて発展し、その結果私たちの豊かな生活があることを示すことを目標とした。

また、数学史と関連して出てきた地球温暖化、力による問題解決、複数の人による発見、女性の活用などの問題について考えさせ、その結果をミニッツペーパーに書かせた。さらに、レポートの書き方を教え、その上で自分が興味を持っている学問などについてレポートを書かせた。

成績は、授業中に書かせたミニッツペーパー、学期末に提出させたレポート、出席の 3 つを合わせて付けている。

②展開科目（総合科学（総合科目）） 「教育と科学技術」

震災と原発事故を受け、「地震」についての解説を 2 回、「原発事故」についての解説を 2 回行った他、今の世界に科学技術がどのように役立っているか、それを支える人材を育成する日本の教育はどうなっているかなどを学生と一緒に考えることとし、ディベートを行うなど対話型の授業を行った。

途中 1 回分の授業を、「教養」をテーマとして教養教育院総長特命教授全員で合同授業を行った。充実した授業となったと考えている。

③共通科目（転換・少人数科目）2 コマ 「基礎ゼミ」 学校教育の在り方と入学試験の功罪を考える

入学試験を受けて入学したばかりの学生に、自分たちが受けた高校学校教育を振り返って貰い、これからの大學生教育を受けるための基礎認識として貰うことを目指した。また、自分を囲む環境を客観的に見て、自分の意見を説得力を持って発言する訓練を目指した。

(第 2 セメスター)

①基幹科目（自然論）2 コマ 「科学と情報」 数学と人間—数学を俯瞰する

第 1 セメスターの「科学と情報」とほぼ同じ内容である。

②展開科目（総合科学（総合科目）） 「教育と科学技術」

第1セメスターの「教育と科学技術」とほぼ同じ内容である。

b. 各授業の実施状況

(第1セメスター)

①基幹科目（自然論） 「科学と情報」 数学と人間—数学を俯瞰する

文明の誕生と数学の成立から始め、ポアンカレー予想の解決まで、ほぼ現在の数学全体について解説し、数学の特徴と数学の役割について話した。履修者は109名で適当な受講者数だった。

②展開科目（総合科学（総合科目）） 「教育と科学技術」

受講者数が12名と私の期待した数より少なかったが、その代わりに参加者と議論などを行うことができた。

宮城教育大学からの受講者は、教育実習のために出席できない日が多くかった。

③共通科目（転換・少人数科目）「基礎ゼミ」2コマ 学校教育の在り方と入学試験の功罪を考える

自分たちが受けてきたばかりの入学試験という分かりやすいテーマだったので、自分の経験を交えて発表するなど、活発な授業が行われた。

3講時と4講時に90分の授業を行ったが、最終回は合同の授業とし、討論を行った。

4講目は非常に熱心な人が何人かいたので、充実したセミナーとなり、基礎ゼミ発表会にも参加した。

(第2セメスター)

①基幹科目（自然論） 「科学と情報」 数学と人間—数学を俯瞰する

月曜日3講目と火曜日1講目に授業を行ったが、月曜日の授業では受講希望者が300名を超えたので、先着順に181名を受け入れたが、全員が正常に履修を終えた。火曜日の授業でも教室サイズを超える学生が来たので、少し大きな教室に移し、194名を受け入れたが、こちらは途中で履修を放棄した人が30名弱出た。

②展開科目（総合科学（総合科目）） 「教育と科学技術」

月曜日と火曜日の5講目に行ったが、月曜日は72名、火曜日は31名が受講した。

c. 学生授業評価とその評価に基づく改善

(第1セメスター)

①基幹科目（自然論） 「科学と情報」 数学と人間—数学を俯瞰する

学生の評価は、概ね好評であった。

少しづつ、講義の趣旨を理解している人が増えているように思う。

学生の意見：最終レポートの書き方が分かりづらかった。

回答：レポート問題を出題する少し前に、レポートの書き方を配付資料として配っている。

学生の意見：1つのスライドに情報を詰め込みすぎているので、スライド数を2枚にすれば良いと思った。

回答：一回に20枚から30枚位のスライドを使うので、枚数が2倍になれば、読む暇がなくなる。大切なことをスライドにして、毎回配付資料として配っている。

意見：レポートを書くのが楽しかった。

回答：そう感じる人が多くなるよう、毎回問題を推敲している。

②展開科目（総合科学（総合科目）） 「教育と科学技術」

学生の評価は、概ね好評であった。

学生の意見はとくになかったが、授業の最後に書かせたミニッツペーパーによると、満足している人が多かった。

③共通科目（転換・少人数科目） 「基礎ゼミ」 学校教育の在り方と入学試験の功罪を考える

大半の学生は満足していた様に思う。

（第2セメスター）

①基幹科目（自然論） 「科学と情報」 数学と人間—数学を俯瞰する

月曜日 3講目

受講希望者数が300名を超えて、第1回の授業で座席に座れる人200名弱に受講者を限定した。適切な受講者数をどうして実現するかを教務課で考えて欲しい。

意見：数学者の歴史について知らなかつたので楽しかった。

意見：とても素晴らしい授業でした。

意見：学生に意見を書かせるのは良いが、もう少し分かりやすい内容が良い。

回答：でも出席者の大半は、ミニッツペーパーを短時間で提出して退室しますよね。社会に出る正解のない問題を考えなければならないので、その準備として難しい問題を出しています。

意見：「数学を俯瞰する」については分かりませんでした。逆にレポート問題や論述問題はためになりました。文系的な講座の開設を強く希望します。

回答：私は来年春で退職するので、新しい授業を開設する機会がないが、今決まっている授業の中で努力します。

②基幹科目（自然論） 「科学と情報」 数学と人間—数学を俯瞰する

火曜日 1 講目

意見：数学は社会の役に立つので、レポートに数学の問題を出して欲しかった。

回答：この授業は基幹科目なので、数学の歴史と関連する問題を取り上げ、正解のない問題を考えたり、レポートを作成する技術を身につけたりすることを目的としています。

意見：数学的な説明が難しかった。数学史の流れの説明に代えたら良いのではないか？

回答：最先端の数学がどの様なものかまで解説しているので、どうしても説明が難しくなります。数学者がどの様なことをしているかを、雰囲気を知って貰えることを目指しています。ご意見を参考にして、来年度の授業を少し変えます。

③展開科目（総合科学（総合科目）） 「教育と科学技術」

月曜日 5 講目

総合科目は受講者が少ないので普通だが、参加者数が 70 名位おり、留学生を含む多様な学生が参加して、充実した討論などができた。

意見：討論はもっとあって良かった。

意見：2 回目の討論が面白かった。1 回目の討論は、震災色が強くて辛かった。震災のことをあれだけ取り上げるなら、シラバスにその様に書いて欲しい。

回答：震災に関する部分は、減らしつつあります。しかし、震災から学ぶべきことは多くありますから、努力をして欲しい。シラバスには、震災のことをかなり書いてあります。

意見：講義での討論の内容に、はとても考えさせられるものがありました。自分の意見や思いを素直に伝える活動はとても充実していました。ただ、スライドの授業はもう少し整理して分かりやすくして欲しかった。

回答：最後 2 回の授業は、直前に予定を変更したので、少し分かり難くなかったかと反省しています。来年度は、討論の時間を増やし、内容を精選したいと思っています。

④展開科目（総合科学（総合科目）） 「教育と科学技術」

火曜日 5 講目

参加者数が 30 人弱と適度な数だったので、個別の対応ができた。

意見はとくになかったが、授業の最後に書かせたミニッツペーパーによると、満足している人が多かった。

（2）工 藤 昭 彦

a. 教養教育院教授としての授業の狙いと取り組み

教養教育院の目的である「想像力豊かで高い問題解決能力と有力な指導的人材の養成」に資することを狙いとして、次の諸点に留意しながら授業に取り組んだ。

留意点 1. 一方的に講義するだけの授業ではなしに、参加型授業になるよう配慮・工夫した。

- 留意点 2. 具体事例、関連するビデオ映像、内外のフィールド調査体験談等を豊富に交えながら、現実感覚を養うよう心掛けた。
- 留意点 3. 新聞記事、ネット情報など、講義に関連する直近の話題を紹介し、現実的問題解決能力の向上に資するよう工夫した。
- 留意点 4. 教科書、手作りの最新データ集、講義内容の全体像をまとめたパワーポイント、受講生による教科書の音読等を交えながら、講義への興味を繋ぎ留める工夫をした。
- 留意点 5. 全ての科目で試験を行わず、出欠状況、中間レポート、ゼミでの報告内容、最終レポート等に対する評価点等を加味し、総合評価をした。レポートの評価にあたっては、読解力、文章力、論理的展開力、説明力、発想力などを重視する旨、あらかじめ受講生に伝達し、各自の努力を促すようにした。

b. 各授業の実施状況

①展開科目（総合科学（総合科目）） 時代の文脈からみた「食」と「農」

授業は、戦後日本における「食」と「農」が激変したメカニズムを検証し、世界の食糧需給動向を見据えながら「食」と「農」の再編シナリオについて講義した。

授業の目標は、「食」と「農」の激変がもたらす我が国特有の問題に対する理解を深め、これまでの「食」と「農」のあり方を通してグローバル化時代に私たちの暮らしを設計するヒントを得ることに置いた。

講義内容は、第1回オリエンテーション、第2回「講義全体の概要」、第3回「日本農業の国際比較」、第4回「日本農業の戦後過程1」、第5回「日本農業の戦後過程2」、第6回「現代世界と日本の農業問題」、第7回「現代世界の貧困・食料問題」、第8回「現代世界の農業環境問題」、第9回「中間試験—全面的兼業の理由について」、第10回「戦後農政の枠組と農業基本法」、第11回「転換期農政のシナリオ、新基本法、新農地法」、第12回「戸別所得補償制度と担い手政策」、第13回「農業問題処理の限界と解決の展望」、第14回「参加型農業・農村改革による震災復興の回路」、第15回レポート提出と、ほぼシラバス通り実施した。

授業は「教科書」、手作りの「最新日本農業データブック」のほか、関連資料、新聞記事等を隨時提供し、農業や食料に関する現実感覚を養成するよう工夫をした。

評価は、出席状況、中間レポート、最終レポートの評価を総合して行った。出欠や授業態度は特に問題はないが、レポートの文章力・記述内容の水準は、学生間の開きが大きかった。

②基幹科目「経済と社会」 資本主義と農業—世界恐慌・ファシズム体制・農業問題—

資本主義に馴染み難い農業に起因して発生する社会問題、政治問題は農業問題と呼ばれてきた。講義では主として1929年恐慌以降の農業問題の処理が、奇怪な日本ファシズムの形成・成熟運動と連動して行われ、破綻していく過程を学び、今日の世界同時不況下

における農業問題を解決する社会経済体制のあり方について講義した。

授業の目標は、農業問題の処理という切り口から、ファシズム体制の形成・成熟といった社会経済体制の激変過程を解き明かし、今日多様な形で展開されている「もうひとつの世界づくり」運動に対する指針を見出すことに置いた。

講義内容は、第1回オリエンテーション、第2回「農業問題発生の歴史過程」、第3回「世界恐慌・満州事変・満蒙開拓」、第4回「準戦時体制下の政治的問題処理」、第5回「準戦時体制下の経済的問題処理」、第6回「農業問題処理の限界」、第7回「2.26事件の勃発と総力戦体制」、第8回「総力戦体制とファシズム」、第9回「戦時体制下の政治的問題処理」、第10回「戦時体制下の経済的問題処理」、第11回「ファシズム的農業問題処理の総括」、第12回「戦後体制下の問題処理」、第13回「農業問題解決の新たな取り図」、第14回「震災復興と農業・農村再建」、第15回レポート提出と、ほぼシラバス通りに実施した。

授業は、教科書、パワーポイント、当時の関連ビデオ映像、新聞記事等関連資料を提供し、歴史過程に対する実感を養うよう配慮した。また、直近の金融危機や欧州の経済不況等との関連についても、考える素材となるような情報を提供した。

評価は出欠状況、レポート内容等で総合評価した。ビデオの感想文、レポートの中には、1年生とは思われないほど高い水準の内容のものもあった。ただ例年と比べて力作が少なかった。

③共通科目（転換・少人数科目）「基礎ゼミ」 現代世界の「食」—飽食と飢餓の構造
現代世界は先進国の飽食と途上国の飢餓が共存するという不幸な現実が続いている。こうした問題に、ゼミと体験学習を通して理解を深めた。

授業の目標は、「変貌する日本人の食生活や食料自給率低下問題」や、「グローバルな視点で食料不足や飢餓の現状」等について理解を深め、「食」を通して現代社会のあり方を受講生各自が考える能力を養うことに重点を置いた。

ゼミの内容は、第1回オリエンテーション、第2回「ゼミ班の編成とゼミ課題の解説」、第3回「世界市場における穀物価格—近年高騰した原因としてどんなことが考えられるか」、第4回「穀物価格高騰の影響—先進国、途上国にそれぞれどんな影響を及ぼすか」、第5回「食料自給率—わが国食料自給率急落の原因は何か。また、自給率向上の可能性はあるか」、第6回「農産物輸出入—国際的な農産物貿易の推移から見た問題は何か」、第7回「アフリカ開発—農業・農村開発が核だといわれる根拠は何か」、第8回「環境と農業—農業が環境や生物多様性に与えるプラス・マイナスの影響は何か」、第9回「飢餓と飽食—世界にはどうして「飽食」と「飢餓」が共存するのか。また、その解決のために何が必要か」、第10回「食の安全と放射能—放射性物質の食品基準について、今、何が問題になっているか」、第11回「時代の文脈から「食」と「農」について考える」、第12&13回 視察研修「農産物直売所」（レポート）、第14&15回研修「食」の安全確保—食の放射能汚染と対策、レポート提出など、資料や統計を活用したグループ討議、現地研修など

を行い、理解を深めた。

評価は、出席状況、レポート及び報告内容に基づいて最終評価した。

少人数教育は、昨年度同様①欠席者が少ないと、②授業への参加意識を高められ易いこと、③思考・プレゼン能力を相互研鑽できること、④現地調査等により現実感覚を身に付ける機会を提供できることなど、多くの利点があることを再認識した。

④共通科目（転換・少人数科目）「基礎ゼミ」 「農」の世界の可能性—ポスト工業化社会の展望

人と物と金と情報のグローバル化が止まるところを知らない中、あえてグローバル化に対抗する「もうひとつの世界づくり」に対する挑戦が、世界各地で試みられるようになった。生身の人間が幸せに生きるために、改めて「暮らしの拠点」を創造しなければならない—そう考える人々が増えているからだろう。その過程で、「農」の世界に対しては、これまで以上に熱い視線が注がれるようになった。この授業では、「農」の世界の可能性やその意味について、ゼミと体験学習を通して理解を深めた。

授業の目標は、「農の世界から生命圈復元のシナリオを透視する」、「農村の現状と農業が直面する問題を理解する」、「グローバルな視点で農業問題と飢餓や環境問題の関連を理解する」ことなどに置いた。

ゼミの内容は、第1回オリエンテーション、第2回「ゼミ班の編成とゼミ課題の解説」、第3回「TPPと農業1—TPPでどんなことが問題になっているか」、第4回「TPPと農業2—日本はTPPに参加すべきか、すべきでないか」、第5回「WTOと農業—WTO交渉が10年以上揉めているのはどうしてか」、第6回「日本農業の現状—農業は衰退したのかそうでないのか、またそう考える根拠は」、第7回「食料自給率—自給率向上は必要か必要でないか、またそう考える根拠は」、第8回「「農」の世界の可能性—「農」の世界に対する期待があるとすれば、どんなことか」、第9回「「農」の世界の可能性2—人口増加に食料供給は両立しうるか。両立するにはどうしたらいいか」、第10回「農業と環境—環境に対する農業のプラス効果、マイナス効果は、それぞれどんなことが考えられるか」、第11回予備日、第12回「震災復興と「農」再生のビジネスモデル」、第13&14回「農」業を「食」業に転換した事例視察・研修、第15回レポート提出である。視察研究のレポートを相手先に提供したところ、「おもしろい」、「参考になる」などの意見が寄せられた。

評価は、出席状況、レポート及び報告内容に基づいて行った。少人数教育は、既述通り、多くの利点があることを再認識した。

⑤基幹科目「経済と社会」 環境と経済・社会の調和に関する多様なアプローチ

授業は、参加型・討論型の授業をして欲しいという学生からの提案もあり、月曜の3、4校時とも基礎ゼミ方式で行った。

授業の目標は、①環境問題を考える多様な思想や倫理についての理解を深め、②豊富な

知識と研究課題を身につけることを目標とした。

初回の授業オリエンテーションで、下記のような講義内容をあらかじめ受講生に提示し、ほぼこれに沿ってゼミ形式で授業を行った。

第1回オリエンテーション（講義内容及び日程について）、第2回「環境問題への多様なアプローチについてⅠ」、第3回「環境問題への多様なアプローチについてⅡ」、第4回「環境と経済・社会の調和（持続可能な発展）」、第5回「環境倫理学とは何か（倫理学等は何をどのように問題にしてきたか）」、第6回「経済と環境—経済理論—（経済学は環境をどのように扱ってきたのか）」、第7回「佐和隆光『グリーン資本主義』を読むⅠ（環境と経済・社会の調和は可能か）」、第8回「京都議定書（成果と課題）」、第9回「地球環境問題連関図」、第10回「環境時代に人々が考え始めたこと（環境倫理や環境思想への橋渡し）」、第11回休講、第12回「加藤尚武『新環境倫理学のすすめ』を読むⅠ（倫理的規範の成熟と効力）」、第13回「加藤尚武『新環境倫理学のすすめ』を読むⅡ（倫理的規範の成熟と効力）」、第14回「わが国の環境法の体系（拡大生産者責任の扱いは）」、第15回「佐和隆光『グリーン資本主義』を読むⅡ（環境と経済・社会の調和は可能か）」、レポート作成。

評価は、出席、中間レポート、最終レポートの評価を総合して行った。最終レポートでは「講義内容の中から、各自興味があるテーマを取り上げ、自由に論じなさい。但し、講義資料以外に参考にした文献名を記載の上、末尾に講義についての感想を述べること」というテーマを課したが、力作が数点あり、昨年同様改めて本学学生の水準の高さを再認識した。

c. 学生授業評価とその評価に基づく改善

①基幹科目「経済と社会」　資本主義と農業—世界恐慌・ファシズム体制・農業問題—
〈授業科目の目標〉

1929年恐慌以降の農業問題の処理が奇怪な日本ファシズムの形成・成熟運動と連動して行われ、破綻していった過程を学び、今日の世界同時不況下における農業問題を解決する社会経済体制のあり方について考える。

〈授業実践の成果をあげるにあたって教育内容・方法等で工夫した点〉

- ①戦前の話が中心なので、ビデオ等で時代状況を理解してもらうようにした。
- ②特殊なキーワードについては、レポート等で学生自身に調べてもらうようにした。
- ③工藤執筆の教科書を活用し、講義内容以外についても学習してもらうようにした。
- ④講義内容をまとめたスライドを活用し、あらかじめ全体の枠組みを理解してもらうようとした。

⑤必要に応じて学生に音読してもらい、講義への集中力を切らさないようにした。

⑥ビデオの感想文やレポート内容をコンパクトに編集し、受講学生に紹介した。

〈学生による授業評価結果概要と分析ならびにそれに対する意見〉

前期は総合評価項目などいくつかの項目が平均をやや下回ったが、後期はいずれの項

目も平均をやや上回った。

〈授業実践の成果〉

最初から授業放棄し、出席のみといった学生が見受けられた反面、大変熱心に聴講し、素晴らしいレポートを書いてくれた学生もいた。

〈解決すべき課題や今後の改善策〉

聴講学生の多くが現代史の学習経験を有していないことから、内容の理解度が上がるよう説明の仕方等にさらなる工夫を凝らしてみたい。

②基幹科目 「経済と社会」 環境と経済・社会の調和に関する多様なアプローチ

〈授業科目的目標〉

環境と経済・社会の調和に関する多様なアプローチを解説し理解を深める。なお、受講人数によっては単なる講義からゼミ方式をとりいれた授業に切り替えた。

〈授業評価〉

2セメの月曜日 3校時、4校時の授業ともに評価結果の多くは平均もしくは平均を上回った。これは、参加・討論型授業に切り替えたことによるものと判断される。

〈授業実践の成果をあげるにあたって教育内容・方法等で工夫した点〉

①環境問題について、経済、法、倫理、思想など多様な側面からのアプローチを通して問題解決の方向や手法を学べるように、あらかじめ関連資料を配布した。

②授業にゼミ形式を取り入れ、学生相互に議論を深めることにより勉学意欲の向上を図れるような方法を講じた。

〈授業実践の成果〉

①ほぼ全員が毎回参加し、熱心に報告・討論を行った。

②参加型授業は、学生の意欲向上に効果的であることが改めて確認できた。

③成績評価は大半が AA と高い水準であった。

〈解決すべき課題や今後の改善策〉

次年度からは展開ゼミに切り替え充実を図っていきたい。

③展開科目 (総合科学 (総合科目)) 時代の文脈からみた「食」と「農」

〈授業科目的目標〉

戦後日本における「食」と「農」が激変したメカニズムを検証し、世界の食糧需給動向を見据えながら「食」と「農」の再編シナリオについて考える。

〈授業実践の成果をあげるにあたって教育内容・方法等で工夫した点〉

①工藤執筆の教科書を活用し、大事な内容についてはレポートを課して理解を深めようとした。

②教科書のデータが少し古いため、それを補うために最近の統計データを収録した 39 ページに及ぶ「日本農業データブック」を印刷・製本し、全員に提供した。

③統計データやグラフから、どのような結論が見出せるかを授業で問い合わせ、各自の思

考力を磨いてもらうよう心掛けた。

〈学生による授業評価結果概要と分析ならびにそれに対する意見〉

火曜日の授業は、評価の項目が概ね平均もしくは平均以下であったが、金曜日の授業は、大半の評価項目が平均を上回った。また多くの学生が興味深いコメントを書いていて、参考になった。

〈授業実践の成果〉

数名、最初から興味がなさそうな学生がいたが、他は概ね熱心に聴講してくれた。

〈解決すべき課題や今後の改善策など〉

「食」や「農」に対するキーワードを解説し（データ集の末尾に記載してあるが）、大部分が初めて触れる内容が多い講義への理解を深めるようにしたい。

④共通科目（転換・少人数科目）「基礎ゼミ」 「農」的世界の可能性—ポスト工業化社会の展望

〈授業科目の目標〉

このゼミでは、農業生産の弱体化、食糧自給率の低下、輸入食品汚染や食の偽装など、食の安全性に対する不安、世界的な食糧価格の高騰等の問題について、資料や統計を活用したグループ報告、生産現場の見学などを通して理解を深める。

〈授業実践の成果をあげるにあたって教育内容・方法等で工夫した点〉

①理解を深めるために基礎的資料を配布し、初めてこのテーマに触れる学生が理解しやすいように配慮した。

②相当高度な専門的論文や詳細な解説資料を提供し、興味のある学生はより突っ込んで考察するよう促した。

③5班のグループに分け、グループ単位に疑問点、討論点をまとめて報告し、それを踏まえて全員で討論するようにした。

④学生達の自主的議論を尊重しながら、様子をみて軌道修正したり、解説を加えたりするようにした。

⑤JA仙台の直売所を訪問し、食の安全・安心に対する消費者の反応等について担当者との質疑応答を通して理解を深めた。

〈学生による授業評価結果概要と分析ならびにそれに対する意見〉

授業評価をみると、大半の項目が平均を上回っており、興味を持って取り組んでくれたように思われる。

〈授業実践の成果〉

①ほぼ全員が毎回出席し、熱心に報告・討論を行ってくれた。

②学生の学習態度は良好であり、今後とも基礎ゼミを充実・強化していくことが必要であると感じられた。

③成績評価は出席、報告、レポート内容を総合して行ったが、レポートの水準が高くA若しくはAAが大半であった。

〈解決すべき課題や今後の改善策〉

特になし

⑤共通科目（転換・少人数科目）「基礎ゼミ」 現代世界の「食」—飽食と飢餓の構造

〈授業科目的目標〉

グローバル化に対応する「もうひとつの世界づくり」に対する挑戦が、世界各地で試みられている。生身の人間が幸せに生きるために、改めて「暮らしの拠点」を創造しなければならない—そう考える人々が増えているからだ。その過程で、「農」の世界に対しては、これまで以上に熱い視線が注がれるようになった。本ゼミでは「農」の世界から見えるものやその意味について理解を深める。

〈授業実践の成果をあげるにあたって教育内容・方法等で工夫した点〉

①理解を深める為に基礎的資料を配布し、初めてこのテーマに触れる学生が理解し易いように配慮した。

②相当高度な専門的論文や詳細な解説資料を提供し、興味ある学生がより突っ込んで考察するよう促した。

③5班のグループに分け、グループ単位に疑問点、討論点をまとめて報告し、それを踏まえて全員で討論するようにした。

④学生達の自主的議論を尊重しながら、様子をみて軌道修正したり、解説を加えたりするようにした。

⑤アグリビジネスに取り組んでいる先進的事例として伊豆沼農産を訪問し、社長自らの説明を受けた後、全員が質問し、活発な議論を行った。

〈学生による授業評価結果概要と分析ならびにそれに対する意見〉

授業評価結果をみると、全項目とも平均を相当程度上回っており、興味を持って取り組んでくれたように思われる。

〈授業実践の成果〉

①ほぼ全員が毎回出席し、熱心に報告・討論を行ってくれた。

②学生の学習態度は良好であり、今後とも基礎ゼミを充実・強化していくことが必要であると感じられた。

③有意義な議論が多く、楽しいゼミであった。

④成績評価は出席、報告、レポート内容を総合して行ったが、レポートの水準が高くA若しくはAAが大半であった。

〈解決すべき課題や今後の改善策など〉

現地研修にバスが使用できることなど、対応が行き届いており、現状のままでも特に問題ないと思われた。

(3) 野 家 啓 一

a. 教養教育院特任教員としての授業の狙いと取り組み

教養教育院の総長特命教授として 2 年目の年に当たり、何よりも初年次学生の知的好奇心を刺激するような授業をすることを心がけた。担当した科目は「基幹科目：人間論」「展開科目：人文科学」「共通科目：基礎ゼミ」などであったが、今年度は初めて「総合科目：展開ゼミ」を開講した。授業を進めるに当たって留意したのは以下のような事項である。

- ① 受講者の多かった講義形式の科目では、毎時間プリントを配布し、予習・復習に役立てるとともに、とくに授業中に言及・引用した哲学者や科学者のオリジナルの文章（翻訳）に触れさせるよう配慮した。
- ② 授業では学生に問い合わせを投げかけて答えさせ、あるいは選択肢を示して挙手をさせるなど、学生が積極的に授業に関われるよう工夫を試みた。
- ③ 授業内容に関連する参考書を、古典的著作を中心にできるだけ多く挙げて学生が主体的に学ぶきっかけを作り、併せて図書館を積極的に利用することを促した。
- ④ 基礎ゼミ「哲学・ゼロからの出発」では、各テーマに 2 回の授業を割り当て、1 回目はレポーターに論点を要約させて疑問点や不明な点をただし、2 回目は全員にミニットペーパーを提出させて、それを基にディスカッションを展開する形で進めた。
- ⑤ 基礎ゼミ「英語で読む『奥の細道』」では、原文・英文を声に出して読み、さらに英文を現代日本語に訳すことによって、翻訳という作業に伴う難しさと楽しさを実感できるよう促した。また英訳された俳句を基に、それを日本語の俳句に再翻訳させることによって、英語と日本語との季節感の違いなどを実体験させることを試みた。

b. 各授業の実施状況

① 基幹科目（人間論） 「思想と倫理の世界」 現代哲学への招待

第 1 セメスターは木曜日 2 講時、第 2 セメスターは月曜日 3 講時及び木曜日 3 謲時に開講したが、第 1 セメスターの授業は受講者が 261 名に達したので教室を変更した。また第 2 セメスターの受講者には、第 1 セメスターの「基礎ゼミ」の参加者の顔が何名か見られたが、これは基礎ゼミでの議論が刺激になったものと思われる。

これまで哲学という学間に触れたことのない新入生を対象に、最終的には 20 世紀を代表する 2 冊の哲学書、ハイデガーの『存在と時間』及びヴィトゲンシュタインの『論理哲学論考』の入口まで受講者を導くことを目標にした。第 1 回は「哲学とは何か」をテーマに科学と哲学の違いについて「未知の探究」と「既知の探究」の対比という観点から話し、第 2 回は「20 世紀の思想状況」についてニーチェを中心に、「神の死」と「ニヒリズム」をキーワードにして論じた。これによって哲学に対する学生の関心を喚起することに、ある程度の手ごたえを感じることができた。そこから現象学・解釈学を中心とするヨーロッパ大陸の哲学と論理分析や言語分析を方法とする英米圏の分析哲学という 20 世紀哲学の二大潮流に話を移し、前者の到達点をハイデガーの『存在と時間』に、後者のそれ

をヴィトゲンシュタインの『論理哲学論考』に見定めて授業を進めたが、どうしても前半部に時間をとられ、後半部はやや駆け足にならざるをえなかつた。

授業では、できるだけ学生の積極的参加を促すため、こちらから問いかけて答えを求めるなどを試みたが、いずれも 100 名を超える受講者からなる大教室であったため、どうしても前の方の座席に座っている学生に問いかける形になり、全体を巻き込んでのディスカッションに発展することは困難であった。ただし、毎回授業終了後に熱心に質問に来る学生が何人かおり、ポイントを衝いた質問については、次の時間に紹介して論点を全体が共有できるよう配慮した。

成績評価は出席点（受講者名簿を回覧して署名させる方式をとった）と筆記試験（課題をあらかじめ提示し、自筆ノートは持ち込み可とした）とを合わせて総合的に判断した。筆記試験は、あらかじめ課題を与えて自分の頭で考えたり調べてきたことを時間内に答案用紙に書くという半ばレポート形式で行ったこともあり、一部の学生は図書館などを利用して準備を重ね、こちらが感心するような優れた答案も見られた。

②展開科目（人文科学） 「哲学・倫理学」 科学技術の哲学と倫理

第 2 セメスターは月曜日 2 講時、第 3 セメスターは水曜日 2 講時に開講したが、いずれも受講者は 100 名を超え、質疑応答を含めた双方向のコミュニケーションを実現するという観点からはやや多めであった。

理系の学生が多かったこともあり、「科学的思考はどのように成立したか」、「科学的方法とはいかなるものか」及び「科学と社会の関係はいかにあるべきか」という科学史・科学哲学・科学社会学に関わるテーマを中心に授業を展開した。科学史分野では 17 世紀の「科学革命」に焦点を合わせ、アリストテレス的自然観の崩壊とガリレオによる「自然の数学化」及びデカルトによる「物心二元論」の提起を通じて近代科学が成立するプロセスを歴史的に解明した。科学哲学分野では科学的方法の基盤となる「演繹法」と「帰納法」の長所と短所、およびそれらを総合した「仮説演繹法」の構造について説明し、さらに 20 世紀におけるポパーの「反証主義」とクーンの「パラダイム論」との間の論争を検討しながら、現代における科学像の変貌について論じた。科学社会学分野では、まず前半部で科学が単なる「知の制度化」にとどまらず、「社会的制度化」へと進んだ 19 世紀中葉の第二次科学革命を中心に、科学研究の職業化（「科学者」の出現）、科学の専門分化、専門学会の成立、高等教育機関の創設、などの動きを歴史的に確認した。後半部では第二次世界大戦後の、「アカデミズム科学」から「産業化科学」への変貌過程を追い、さらに 3. 11 の東日本大震災と原発事故を契機に反省を迫られた科学技術と社会との関係について、「トランス・サイエンス」と「リスク社会」という二つのキーワードを軸に今後のあり方を展望した。

総じて学生は興味をもって聞いてくれたようだが、大教室での大人数の講義であったこともあり、こちらから質問をすると、挙手して答えてくれるのは前の方の座席に座っている一部の学生に限られていた。3. 11 以後の科学技術のあり方については、学生自身の関

心も高く、真剣に聴いてくれて質問も出たが、それを全体的な議論にまで結びつけることが出来なかつたことは、私自身の工夫が足りなかつたと言わざるをえない。

成績評価は出席点（受講者名簿を回覧して署名をさせた）と筆記試験の点数とを合わせて総合的に判断した。筆記試験はあらかじめ課題を提示して図書館などで調べることを奨励し、さらに自筆ノートを持ち込み可としたこともあり、おおむね良好な成績であった。

③共通科目（転換・少人数科目） 「基礎ゼミ」 哲学・ゼロからの出発

テキストには野矢茂樹（編）『子どもの難問』（中央公論新社、2013）を用いた。これは「勉強しなくちゃいけないの？」や「自分らしいってどういうことだろう？」など子どもが抱く素朴な疑問に、私を含む現代日本の学者たちが 2 名ずつ組になって答えたユニークなアンソロジーである。ゼミではまず私自身が関わった「過去はどこに行っちゃつたの？」と「えらい人とえらくない人がいるの？」という問い合わせを取り上げ、あとは受講者たちの希望によって「なぜ生きてるんだろう？」「死んだらどうなるの？」「悪いことってなに？」「神様っているのかなあ？」などのテーマを選んだ。一つのテーマに 2 回の授業時間を割り当て、1 回目はレポーターが内容を要約して疑問点を提起し、2 回目には全員にミニットペーパーの提出を求め、それを基にディスカッションを行った。テーマにもよるが、受講生たちは積極的に議論に参加してくれ、その中で哲学的に考えるとはどのようなことかを体得してくれたようである。ゼミの学生が哲学という学問に興味をもってくれたことは、参加者のうちの何人かが私の第 2 セメスターの講義「現代哲学への招待」を受講してくれていることからも知られる。

成績評価は出席点（ほとんど全員が毎回出席した）と毎回のミニットペーパー、および期末レポートの点数を合わせて総合的に判断した。期末レポートの課題は、テキストの中から授業で取り上げなかつたテーマを選び、自由に論じさせることとした。レポートの内容は哲学的議論のポイントを衝いたものが多く、成績はおおむね良好であった。

④共通科目（転換・少人数科目） 「基礎ゼミ」 英語で読む『奥の細道』

松尾芭蕉の紀行文『奥の細道』をドナルド・キーンの英訳 “The Narrow Road to Oku” で読みながら、日本と西洋の自然観や季節感の違い、翻訳にまつわる難しさと面白さを体験してもらうことを目標とした。授業では、まず芭蕉の原文とキーンによるその英訳をそれぞれ音読し、次いでその英文を現代日本語に訳すことによって、翻訳に現れる文化や風土の違いに着目して議論を進めた。今年度は福島、宮城、岩手の東北三県に重点を置き、途中の幾つかの節は省略しながら読み進めたが、昨年と同様に背景的知識（芭蕉の活躍した時代、俳句の約束事、踏まえられている和歌など）の説明に時間をとられ、また議論に熱が入ることもあるって、15 回の授業では立石寺までたどり着くので精一杯であった。ただ、松島や平泉など芭蕉が目指した「みちのく」の主な歌枕は取り上げることができたので、これで満足すべきであろう。また授業中には、芭蕉の俳句の英訳を基に、それをもう一度日本語の俳句に翻訳させることを試みた。これは学生たちも楽しんだようであり、私

自身も感心するような名句（？）が生れることがあった。最終回には一人 3 句ずつ俳句を作ってもらい、実際に句会を体験してもらうこととした。

補講期間（7月 28 日）にはフィールドワークとして半日のバス旅行を企画した。旅行には、学部の試験日程が重なった 2 名と当日発熱した 1 名を除く 20 名が参加した。当日は幸いにも天気に恵まれ、川内南キャンパス・ロータリー付近に集合して 13 時に出発、国道 286 号線および 39 号線を経由してまず名取の藤原実方の墳墓と道祖神社を見学した。そこから岩沼の二木の松史跡公園を訪ね、芭蕉の句碑のある竹駒神社にお参りし、その茶屋で小休憩をとった。後半は国道 4 号線から 45 号線を多賀城へ向い、末の松山、沖の石、壺の碑、多賀城政庁跡、野田の玉川などの旧跡を見て回った。末の松山は周りにマンションが林立し、芭蕉が描いた物寂しい風景とは大違いで、学生たちも驚いた様子であった。そこから仙台へ戻って国分寺薬師堂、榴ヶ岡天満宮、妙心院（芭蕉の蓑塚がある）を見学したが、市内の交通渋滞に巻き込まれ、川内キャンパスへ戻ったのは、予定を一時間ほど超過した 19 時で、あたりはすでに薄暗くなっていた。徒歩ではなくバスではあったが、芭蕉と曾良が実際に歩いた道のりをたどることにより、今でも歌枕や史跡が大切に保存されていること、江戸時代と現代の風景の違いなど、参加者それぞれに『奥の細道』の理解を深める貴重な機会となった。

成績評価は出席点（ほとんど全員が毎回出席した）と期末レポートの点数を合わせて総合的に判断した。期末レポートでは、（1）フィールドワークを通じた実体験と原文を比較して自由に論じること、または（2）授業で読めなかった『奥の細道』の後半部から一段を選び、英訳文を現代日本語に訳した上で、原文・英訳・現代日本語を比較対照して論じること、のいずれかの課題を選択することを求めた。（1）を選んだ学生が率直な感想を述べることに終始したのにたいし、（2）を選んだ学生はゼミの成果を踏まえてかなり立ち入った考察を展開する者もあり、こちらが感心させられるほどであった。

⑤展開科目（総合科学（カレントトピックス）） 「展開ゼミ」 哲学入門・第一歩

今年度から第 2 セメスターに「展開ゼミ」を担当することとしたが、テキストには大森莊蔵『流れとよどみ』（産業図書、1981）を用いた。受講生は 9 名（うち 1 名は途中で離脱したので実質は 8 名）と少なかったが、ゼミで討論するには適切なサイズであった。学生の専攻も文系・理系がほぼ半々であり、中国からの留学生 2 名も加わっていた。授業ではテキストに収録されている大森の哲学エッセイ「ロボットが人間になるとき」「<論理的>ということ」「真実の百面相」「時を刻み切り取る」「確率と人生」などを取り上げ、哲学的に考えるとはどのようなことかを議論を通じて体得してもらうことを目標とした。一つのエッセイに 2 回分の授業を当て、一回目はレポーターに論点を要約してもらい、疑問点や不明の点を指摘し、自分なりの考察を展開することを求めた。二回目はそこで浮き彫りにされた問題点について、全員にミニットペーパーを提出させ、それを論点ごとに分類して提示し、フリーディスカッションを通じて問題を深めることを目指した。参加した受講生はいずれも議論好きの学生だったので、毎回時間が足りなくなるのが常で

あった。また議論の過程で、複数の学生が「人工妊娠中絶 (Abortion)」をめぐる倫理問題に興味を抱いていることがわかったので、最終回はこのテーマについて法学部の学生にレポーターをお願いし、それぞれの立場から白熱した議論を行った。また、最終回終了後は街に出て打ち上げ会を行ったが、そこでは授業中には聞かれない率直な感想や意見を耳にることができ、私にとっては収穫であった。

成績評価は出席点、平常点（毎回のミニットペーパーと討論への参加）、期末レポートの点数を総合して評価を行った。受講生はみな積極的に討論に参加してくれ、レポートもおおむね好成績であった。

c. 学生授業評価とその評価に基づく改善

①基幹科目（人間論） 「思想と倫理の世界」 現代哲学への招待

<今後の改善点>

- ・「関連学習」については、ほとんどの学生が低いレベルにとどまっているので、自発的な学習を促すよう何らかの工夫を試みたい。
- ・板書については平均よりも低い評価なので、わかりやすい文字（特に外国語）を書くように気をつけたい。
- ・自由記述欄は「苦手だった実存主義、分析哲学への足がかりを、とても分かり易くできました。ありがとうございます！」などおおむね肯定的評価であった。ただ、「もっと、論理哲学論考について知りたかった」という希望があり、これは授業の進度が、前半部（大陸哲学）はややゆっくりと、後半部（分析哲学）は駆け足になったためと思われるでの、全体としてバランスが取れるよう努めたい。

②展開科目（人文科学） 「哲学・倫理学」 科学技術の哲学と倫理

<今後の改善点>

- ・「関連学習」については、ほとんどの学生が低いレベルにとどまっているので、自発的な学習を促すよう何らかの工夫を試みたい。
- ・自由記述欄では「生徒が質問しやすいようにミニットペーパーを配っていたのがよかったです」（第3セメスター）、「講義開始後に前回を復習してくださったのがとても助かりました」（第2セメスター）、「現代までの科学についての流れが良く分かった。また様々な論文や、本の紹介もあって良かった」等おおむね肯定的評価が多かった。
- ・ただし「板書で英語？を使うことが多いように感じましたが、哲学や倫理学では英語をよく使うのですか？」という質問があったが、これは基本概念をギリシア語やラテン語の語源にまで遡って説明したことに対する感想と思われる。

③共通科目（転換・少人数科目） 「基礎ゼミ」 哲学・ゼロからの出発

<今後の改善点>

- ・自由記述欄には「先生の知識が豊富で、また熟練の哲学者ということもあり信用のおけ

るものであった。プリントを音読する時間はいらなかつたと思った。もう少し待てばたぶん質問する人もでてくると思った。でも全般的にはとてもよかつた」という感想があった。「プリントを音読する時間」とは配布した参考資料と思われるが、「もう少し待てば質問する人もでてくる」という指摘も含めて今後の授業運営の参考としたい。

④共通科目（転換・少人数科目） 「基礎ゼミ」 英語で読む『奥の細道』

＜今後の改善点＞

- ・今年度は仙台周辺にある『奥の細道』の旧跡や句碑を見学するフィールドワークを企画したが、少々見学先が多すぎ、予定時間を一時間ほどオーバーした。暑かったせいもあり、参加者も多少疲れ気味であった。来年度に企画するときは、もう少し訪問先を精選し、余裕のあるスケジュールを組むことにしたい。

⑤展開科目（総合科学（カレントトピックス）） 「展開ゼミ」 哲学入門・第一歩

＜今後の改善点＞

- ・自由記述欄には「様々な討論をできてとても勉強になりました」という感想があったが、この展開ゼミは受講生が熱心だったこともあり、私自身も討論を楽しむことができた。

(4) 海野道郎

a. 教養教育院教授としての授業の狙いと取り組み

定年退職後3年間、総長特命教授として教養教育の一端を担った後、宮城学院女子大学で3年間を過ごした。「研究大学」というべき東北大学とは対照的に、宮城学院女子大学は、いわば「教養大学」である。したがって、そこでの3年間は、教養教育とは何かを問い合わせ続ける3年間でもあった。

教養教育の目標は何か、という問い合わせに対しては、さまざまな答えが可能であろう。そして、それはそれぞれ、一定の意味があるに違いない。しかし、一人の人間にできることは限られている。私は、教養教育院に配属された今年度の総長特命教授5名の一人として、他の4名の専門分野等をも勘案し、担当授業全体に対して、次のような目標を設定した。

（付記）ちなみに、本年度の総長特命教授とは、それぞれ、次のような関係がある。森田教授とは、学生時代に同時期に同じキャンパスで学び、同じ学問的雰囲気の中で育った。小生は、森田教授のような基礎数学者ではないが、若い時代に、応用数学の部門で同じ支援（作行会奨学金）を受けている。工藤教授とは、社会科学者として問題関心の多くを共有する。私が畏敬し翻訳書も出しているJon Elsterは、工藤教授が基盤とする理論と同じ出発点を持つ。野家教授とは、長年、東北大学文学部・文学研究科で過ごし働きを共にし、大いにお世話になった。理系の勉強から出発した文系研究者として、センスを共有するところが多い。建築環境学者の吉野教授と環境社会学を研究の領域に持つ小生は、

「環境」に対する関心を共有している。さらに、建築学科の隣接分野である「社会工学」を学んだ人間として、建築学には関心と尊敬を抱き続けてきた。

- ①私自身が定年退職まで所属した文学研究科だけでなく、他の（いわゆる）文科系学部の学問領域をも念頭において授業を行う。すなわち、社会の中で生きる意味と個々人の行動の集積によって存在する社会のメカニズムに対する関心を喚起する。教養教育院所属の他の総長特命教授との棲み分けを考慮し、主に行動科学（社会学・社会心理学）の観点からの授業を行う。
- ②応用化学から社会工学を経て社会学に専門分野を移動した、という私自身の経験を積極的に利用し、全学部の学生に対して、専門分野を超えた知的活動の共通性を伝える。
(この問題意識を踏まえたエッセイについては、たとえば、海野「いかなる道を歩もうとも一学部時代の過ごし方ー」『全学教育広報（曙光）』第26号、2008年10月刊を参照)
- ③学生の発達段階を考慮し、高校教育まで培った考えを対象化し、自らの力で新たな世界を切り拓くための、刺激や手がかりを与える。

授業に関しては、次のような工夫を行った。

- ①講義科目においては、パワーポイントを用いるとともに、資料を配布し、学生が講義内容の筆記に神経を使うことなく、「考える訓練」ができるように心がけた。
- ②演壇からの講義は最小に留め、学生の机の間を歩きながら講義の中でも頻繁に問い合わせを発し、学生とのインタラクションを心がけた。後期の基幹科目においては、前期の授業に対する学生の希望も踏まえて、集団討議を取り入れた。また、大教室の授業でも、学期中に複数回のレポート提出を学生に課し、一人一人にコメントを付けて返却した。また、優秀レポートについては作成者自身に報告させ、フロアの学生との質疑応答をすることによって、学生全体のレベル向上をめざした（詳しくは後述）。
- ③基礎ゼミにおいては、知的活動を自ら企画し実行する訓練を施すとともに、学生同士の交流や学生個々人と教員との人格的交流を心がけた。また、受講生自らの手で成果を冊子にまとめて、全メンバーに配布した。（なお、以前の総長特命教授時代（2008年度～2010年度）は、授業の場ではTAを前面に出し、学生とTAとの直接的相互作用を通して、上記の目標を達成しようとした。しかし、今年度は、以前から力量を熟知している気心の知れた大学院生がいなかったので、TAなしで運営した）。
- ④総合科目においても、（受講者数が少なかったので）ワークショップ形式を取り入れ、受講生が情報収集から整理・分析・報告に至る一連の知的生産過程を受講生に体験させるよう心がけた。

b. 各授業の実施状況

- ①基幹科目 「社会の構造」 社会の生成メカニズム：ミクロからの出発
1セメに2コマ実施した標記の授業は、基本的に同じ内容の講義を行った。ただし、例

示の題材などは、受講生の学部をも考慮して適宜選択した。

この講義は、基本的に、「それぞれが意思を持った存在である人間が複数集まつた時にどのようなことが起こるだろうか」という基本的問いに基づき、(1) 地球温暖化を起こしたい人は（おそらく）誰もいないのに、なぜ、それが進行しているのか、(2) なぜ、多くの人が、金と時間を使って東日本大震災後のボランティアを行っているのか、(3)自分が投票しても結果は変わらないのに、なぜ多くの人が投票するのか（一方で低投票率が問題になっているが、半数前後ものが投票しているとも言える）、など、われわれの日常生活の中で生じる疑問を出発点に、まず社会科学の基本的性質について検討したのち、社会の構成要素である人間行動から出発し、その相互作用によって生じる社会の生成メカニズムについて検討した。具体的進行は、次のようなものである。

〔初めに〕 (1 a) 「社会科学の考え方—モデル・スペキュレーション—」 理論的思考と実証との関係を、社会科学の古典であるデュルケーム『自殺論』を題材に解説した。

(1 b) 「社会科学は科学か？：自然科学と社会科学」 この二種類の「科学」については、「自然現象は繰り返すが、社会現象は一回限りである」（再現性）、「自然科学は普遍的法則の定立を目指すが、社会科学の課題は個性記述と説明である」（科学の課題）、等々、多くの「違い」が一般に言われている。その区別の真偽について学生に考えさせ、共通性と差異性を認識させる。

〔第1部：人間行動〕 (2) 行為の構造：欲求と機会、(3) 合理的選択の構造、(4) 合理性が破綻するとき—合理的選択理論の境界条件—、(5) 多属性効用理論：確定状況下の意思決定に関する規範理論、(6) 期待効用理論：リスク下の意思決定に関する規範理論 (7) プロスペクト理論：期待効用理論の実証的批判

〔第2部：社会の生成〕 (8) 意図せざる結果、(9) 成果主義は目的を達成できるか、(10) 就職活動の早期化はなぜ起こるのか—労働市場の社会的ジレンマ—

〔まとめ〕 合理的選択の記述理論

この科目的評価については、私にとっては新しい（しかし、一般的に言えば、極めて平凡な、むしろ古臭い）方法を採用した。すなわち、以前の総長特命教授期間においては、最終レポートおよび途中で行ったミニテストやミニットペーパー、中間レポートからの情報を総合して判断した。中間レポートと最終レポートについては、優秀作品の執筆者に自分のレポートを報告してもらう「報告会」を開催し、学生の努力に答えるとともに、刺戟を与えよう、というものであった。中間レポートを義務化し、それに対してコメントし、そのコメントを踏まえて水準の高いレポートを作成することを目指した。

しかし、今年度 1 セメでは、レポートを一律に課すことを止め、提出されたレポートに対しては丁寧にコメントを返し、「成績評価とは無関係に、受講生の能力向上の手段とする」とし、提出されたレポートは講評を添えて返却するとともに、オフィスアワーには詳しい説明をすることを伝えた。成績評価には、初めて、最終テスト（期末テスト：40%）を行った。

②基幹科目（社会論） 「社会の構造」 社会的決定のメカニズム

1セメスターの「社会の生成メカニズム」では「意志を持った個々人が集まった時にどのようなことが生じるのだろうか」という記述的問い合わせから出発したのに対して、2セメスターの「社会的決定のメカニズム」においては、「私たちが直面する種々の状況において、どのような社会的決定をすれば良いのか」という規範的問い合わせを基に授業を組み立てた。

1セメスターの授業において実施した授業内集団討議について非常に多くの学生が評価していることを踏まえて、後期の授業は、公式のシラバスから大幅に組み替えた（もちろん、この点については、第1回授業で印刷物を配布して丁寧に説明し、「公式のシラバスではなく授業で配布したシラバスに沿った授業である」ことを踏まえて履修登録して欲しい旨を伝えた）。

実際の運営は、基本的に、2コマの授業で一つのまとまりとした。具体的には、（初回の前半はオリエンテーションを行ったが）（a）奇数回（ $2n+1 : n=0,1,\dots,4$ ）の後半で、身近な社会的決定に関する問い合わせを提起に統いて学生による小集団討議を行い、（b）偶数回（ $2n+2$ ）には、冒頭で前週の小集団討議の内容を各半から報告してもらい、引き続いで、小集団討議に関連した理論的講義を行って、次週の授業日の朝までに中間レポートを提出し、（c）次の奇数回（ $2n+3$ ）では、中間レポートの講評と優秀レポートの発表とした。なお、中間レポートは、それ自体は評価の対象とはせず、良いレポートを書くための訓練機会と位置付けた。具体的には、提出されたレポートに対して私がコメントを記して返却し、そこで学んだことを最終レポートに反映させるように促した。また、中間レポートの提出は義務ではないが、2回以上提出することを奨励した。

第11回の後半以降は、特別講義や最終レポートのための質疑・相談などを行い、第14回授業では最終レポートの講評と優秀レポート作成者の氏名を公表し、最終回には報告会を行なった。この報告会においては、前週に発表した優秀レポート作成者がパワーポイントを用いて口頭報告を行い、受講者はそれを多面的に評価しコメントすることによって、優れたレポートはどのようなものかを学んだ。

この授業で提起した具体的問題と背景にある理論的課題は、以下のとおりである。

- (1) 集団で食事をした時、代金をどのように分担するか。〔社会的公正〕
- (2) 芋煮会をどこで開くか。〔集合的決定〕
- (3) 成果主義賃金は目的を達成できるか〔意図せざる結果〕
- (4) 環境を重視しつつも環境保全行動をしないのはなぜか〔社会的ジレンマ〕
- (5) 研究室（ゼミ）配属はどのようにすれば良いのか〔マッチング〕

③共通科目（転換・少人数科目）「基礎ゼミ」 文学作品に見る「社会と思想」

個々の人間は（もちろん私自身も含めて）限られた社会関係の中で生きている。巷には情報が溢れていると言われる一方で、われわれが見る社会の現実は、極めて限られた一面的なものである。その限界を突破する手がかりの一つに、文学作品（とくに小説）がある。

そこに描かれている事実の多くは、われわれに未知の世界の存在を気づかせてくれる。優れた文学作品を読むことにより、われわれ自身の視野を拡大し、人間や社会に対する理解を深めることができる。優れた文学作品は、一般に、平易な表現の内に深い思想を秘めている。

このような意図のもとに行ったゼミの運営は、以下の通りである。

- (1) 毎回、ゼミの冒頭で、(小生も含め) 全参加者が「1分スピーチ」を行った。これは、過去1週間に書物やマスコミ、ミニコミ、個人的な体験などで遭遇した知的驚きを簡潔に報告するものである。聞く者にとって知的刺激になり、発言者を理解する便(よすが)となることを期待するとともに、各ゼミ生の知的感度を高めることを期待している。
- (2) 図書館の利用や文献探索、論文作成などの書籍紹介を通して、知的生産技術への関心を喚起した。
- (3) 学生に要請する課題のモデルとして、木下順二『風浪』、井上ひさし『吉里吉里人』について、その作品の中に私自身がどのような「社会と思想」を読み取ったかを記した紹介文を配布した。
- (4) さらに、各自が作品を選ぶ手がかりとして、佐高信『文学で社会を読む』(岩波書店、2001) を紹介した。
- (5) 以上の準備の下に、各受講者がそれぞれ文学作品を選定し、ゼミの席上で経過報告を行って他の受講者から質問や意見を受け、それを繰り返すことによって「読み」を深め、最終的に二千五百字強の紹介文(評価文)を作成した。

ちなみに、受講生が選択した文学作品は、次の通りである(順不同)。山崎豊子『しぶちん』、ゴールディング『蠅の王』、伊坂幸太郎『魔王』と『モダンタイムス』、坂口安吾『夜長姫と耳男』、池澤夏樹『ヘルシンキ』、吉行淳之介『娼婦の部屋』、島崎藤村『破壊』、王小波『黄金時代』、坂口安吾『白痴』、城山三郎『官僚たちの夏』、フィッツジェラルド『グレート・ギャッピー』、ジョージ・オーウェル『一九八四年』、村上龍『コインロッカーベイビーズ』、長塚節『土』、レイ・ブラッドベリ『華氏451度』、フォークナー『八月の光』、遠藤周作『深い河』、有川浩『フリーター、家を買う』

この中には、私自身も読んだことのないものがあり、私自身の視野拡大ともなった。

- (6) このようにして作成した全員の最終報告(紹介文)は、受講生自らの手でシラバスや名簿などと共に印刷製本し、各自が大学生活の知的出発点の記念碑とした。

④共通科目(転換・少人数科目) 「基礎ゼミ」 人に会う—生きる意味と世の中の仕組み—

このゼミの活動は、三つの段階から成る。第一段階では、調査すべき人の探索から、予約の取り付け、実際の面接、礼状などの事後処理、報告書の作成に至る一連の過程における技術や作法について学んだ後、第二段階では海野が選定した3名の社会人をゼミ生全員で訪問する。第三段階では、各受講者が自らの関心にしたがって人選し、面会し聞き取

り調査を行った。以上の結果は報告書にまとめた。

第二段階で面会したのは、仙台市職員 OB（60歳代、男）、キリスト教会の牧師（40歳代、女）、NPO 法人の代表者（20歳代、男）の3名である。多くの候補者の中から、性別や年齢、仕事などのバランスを考慮しつつ、現代の社会状況をも考慮した。結果的に、以前の総長特命教授時代に開講した同趣旨のゼミで訪問した人とは重ならなかった。この訪問前には、被訪問者から提出された資料を踏まえて学生から質問を提出させて予め被訪問者に送付し当日はその質問をも踏まえて講義をお願いし、質疑応答を行った、さらに、訪問後には、その訪問によって学んだことを中心に感想を提出させ、まとめて被訪問者に送付した。

第3段階で受講生が選択した人は、実に多様であったが、学生は、未知の人を訪問してインタビューを行う、という経験を通して、貴重な経験をしたことがうかがえる。

ちなみに、学生が訪問したのは、次のような人たちであった（順不同）。葬儀社の営業担当者、演出家、イラストレーター、塾講師、ラーメン屋の店主、オンラインショップの経営者、看護師、心臓外科医、食品製造会社人事担当、高校教員、学生寮の寮母、企業を定年退職後に農業、外国人の大学教授、大手保険会社役員、老舗の染物屋、デコレーター。以上の人選を見ると、自分の進路選択に役立つと考えられる人と、このような機会でもないと会って話をすることがないと考えられる人に大別できるようである。

⑤展開科目（総合科目） 東日本大震災に学ぶ：社会科学の可能性

東日本大震災を契機に明らかになった現代日本社会が孕む問題の全体構造を把握すると共に、それぞれの問題についてわれわれが採りうる進路・採るべき進路について考察する、という基本目標を踏まえて授業を組み立てた。学習の到達目標は、以下の2点である。（1）現代日本社会が孕んでいる問題について把握することを通して、今後、各人が職業人として・市民として生きていく際に解決すべき課題（の一端）を明らかにする。（2）社会の進路を左右する問題（たとえば、原子力発電所の扱い）に関する異なった立場の主張を比較・分析することを通して、論理的な分析能力を身に着ける。

受講者数が少なかったので、あえて班分けはせず、全員で一つのワーキンググループを構成しワークショップ形式で授業を運営することとした。具体的には以下のように進めた。まず、（1）東日本大震災がもたらした影響について、情報を収集し、その全体像を把握することに努める。その過程で、情報探索法、KJ法など、知的仕事を援助する技法について学ぶ。次に、（2）上記の作業で明らかにした問題の全体構造の中から、受講生の問題関心と実行可能性を考慮して探求するテーマを選択する。（3）選択したテーマに沿って、情報を収集して事実を確認したのち、対立する複数の立場を構成する主体の社会的特徴、主張の内容とそれを支える論理と前提等、正当化のメカニズムを分析する。（3）以上を踏まえて、研究報告（口頭報告、論文）を行う。

学生は、上記の枠組みに従って、図書館やインターネットを活用しつつ情報収集を行い、それを踏まえた討議の中で、東日本大震災によって生じた影響や社会問題を挙げてカード

に記し、以下、(簡略化した) KJ 法を用いて問題の全体構造の把握に努めた。次に、その全体構造の中に位置づけられた多くの問題の中から、研究テーマとして「復興過程における住宅移転の可能性」を選択した。主な争点は「津波などで被災した現地で住宅を再建するのか、それとも、安全と思われる地域に集団移転するのか」、というものであり、それぞれの主張について上記の研究枠組みに沿って分析を行った。その結果、受講生たちは、「安全な地域に集団移転すべきだ」との結論に到達した。

⑥展開科目（総合科目）「社会的ジレンマ：環境問題の基本メカニズム」

環境問題の基本メカニズムである社会的ジレンマについて、授業担当者が執筆中の書籍原稿を配布し、テキストを手掛けたりして討論を行った。

その間、抽象的な議論と共に、家庭一般廃棄物（ごみ）排出問題を具体的問題として取り上げ、具体と抽象の往復する思考法に習熟することを念頭に訓練した。

⑦展開科目（カレントトピックス科目）「復興の社会学」

東日本大震災からの復興事業の一環として、学都仙台コンソーシアム（以下、「仙台コンソ」）では、「復興大学」プロジェクトを文部科学省に申請し採択された。この復興大学は 4 つのサブプロジェクトで構成されており、その一つである代表的事業が「復興人材育成コース」というヴァーチャルな大学である。

「復興人材育成コース」では、毎週土曜日の（主として）午後に、仙台駅近くの「アエル」ビルの 7 階フロアで開講している。年間を通しての提供科目は 6 科目であり、「復興の社会学」はその一つである。この科目は、形式的には東北大学が開設した全学教育の一部（カレントトピックス）となり、仙台コンソの単位互換科目として、東北大学以外の学生なども履修することができる。実際の受講生は東北大学の学生・院生が多いが、他大学の学生も少なくない。

私は企画段階からこのプロジェクトに関わるとともに、「復興の社会学」のコーディネーターを務めており、仙台コンソ加盟大学やその他の大学・機関から、講師を（時にゲストスピーカーをも）招いている。この科目の開講する 2 セメは、原則として毎週、講義の場において、14 人の（小生を含めれば 15 人の）講師による講義を関係付けるコメントを行っている。

c. 学生授業評価とその評価に基づく改善

①基幹科目 「社会の構造」 社会の生成メカニズム：ミクロからの出発

水 1、水 3 とも、おおむね、「全科目」、「委員会」よりも評価は低い。特に、水 3（医・歯・薬・工）の評価が低い。授業中に私語する学生はいなかつものの、（特に水 3 の授業は）履修学生の数も多く、学生の集中力を引き付けるのが困難だった。

評価の低い原因としては、次のような点が考えられる。

- (1) 学生はシラバスどおりの授業を基準とし、それに厳密に従うことを要求していた

ようである。それに対して教員は、シラバスはあくまでも一つの目安であって、学生の反応を踏まえながら臨機応変に変えるべきものと考えていた。(今でも考えている。この点は、学問の性質によっても異なるのではないだろうか。)

- (2) テキストの位置づけについても食い違いがあった。教員は学生に対してテキストを予習してくることを要求し、それを前提にして話を展開した。しかし、学生は、テキストの内容を教員が噛み砕いて説明することを期待していたようである。もchいたテキストは、アメリカの大学で社会科学の初級コースで用いられているもの(の翻訳)で、含蓄はあるものの、予備知識なしに読めるものである。そのテキストを予め読まずに来たために、授業がうまく理解できなかつたのかもしれない。
- (3) ちなみに、上に記した教員の考え方や方法は、定年退職前に文学部で行った2年生対象の授業においては、うまく機能していたものである。学年の効果なのか時代の効果なのか不明だが、他の教員の意見も聞いて対応を考えるべきかもしれない。

②基幹科目（社会論） 「社会の構造」 社会的決定のメカニズム

前期の授業に対する評価を踏まえて、シラバス提出当時に考えていた予定を大幅に変更した。しかし、全般的に「委員会」平均よりも評価が低く、医・歯・薬・工を対象とした授業ではさらに低い、という傾向は、前期科目に対する傾向と似ている。授業内容、授業方法が異なり、さらに前後期の重複履修者は少ないにも関わらず同じような傾向が表れたのは、どのような理由によるのか、同定できれば、今後の授業に役立てられるだろう。

なお、工学部生を含む授業の評価が全般的に低いことは前述の通りだが、優れた分析をするレポートの提出者はむしろ工学部生の中に多い、ということは注目すべきである。

③共通科目（転換・少人数科目）「基礎ゼミ」 文学作品に見る「社会と思想」

ほとんどすべての点で、「委員会平均」を上回った。授業中の報告や質疑、討論も活発であり、教員・学生共に満足すべきゼミであった、と評価できるかもしれない。しかし、他方、このゼミは、見方によっては、学生に新たな負荷をかけることの少ないゼミであった。この「好評」が、もし、コストが小さくベネフィットがそこそこ大きなものであったためであったなら、「好評」に安心してはならない。

④共通科目（転換・少人数科目）「基礎ゼミ」 人に会う：生きる意味と世の中の仕組み

こちらの基礎ゼミに対する評価は、上記の基礎ゼミとの比較だけでなく、同じ「委員会」の科目と比べても全体的に低くなっている。このゼミには、設計段階や事前準備に多大な労力をかけたにも関わらず、予想したほどの高評価は得られなかった。以前に行っていた同形式のゼミでは、上記の「教室内」活動タイプのゼミよりも高評価だったことを考慮すると、基本設計が誤っていたためかと思われる。すなわち、従来は毎週行っていたゼミを、今年度は隔週2コマ連続とした。これは、学生の負担軽減を考えてのことであった。しかし、隔週としたために、学生が顔をあわせて報告・意見交換をする機会が少なく、集団

の凝集性が低いままであった。また、従来、講師が紹介して訪問した人間は（年によって変わったが）4名で、それぞれ個性の強い人間だった。そのため、学生に対して強烈な印象を残す人物であった。今回の訪問対象者も、それなりに奮闘している人なのだが、いずれも優等生的であり、学生に対して強い印象を残さなかつたのかもしれない。しかし、学生の感受性が低下しているという側面があるようにも思える。そのためにか、各自が選択して訪問する課題においても、その選択が比較的身近な、アポを取りやすい人間になった傾向は否めない。これまでの同種のゼミでは、未知の人にアポを取って面会することによって、学生は大いに自信をつけた。今年度も、同様な報告をする学生は少なくないのだが、授業評価の反応を見る限り、その達成感が、十分には大きくなかったようである。

やはり、以前のように、学生の負担は大きくはなるが、毎週のゼミで学生同士が十分な相互理解に至るような工夫をするとともに、ゼミ生全体で訪問する人物としては、学生に強い印象を与える人物を慎重に選ぶべきであろう。

⑤展開科目（総合科目） 東日本大震災に学ぶ：社会科学の可能性

ほとんどの学生が、毎回、熱心に参加し、授業中に図書館に行き資料探索をしたり討議をしたりして、有効に授業時間を活用していた。しかし、学生の時間割の関係や部活動に熱心な学生が多く、ゼミ時間以外に集まって相談したりすることは、なかなか難しかったようである。少人数でもあり、授業自体は楽しい雰囲気だったので、この低評価は意外である。学生の研究活動に対して、放任の度が大きすぎたのかもしれない。

⑥展開科目（総合科目）「社会的ジレンマ：環境問題の基本メカニズム」

出席と進度以外のすべての評価項目で「委員会」科目よりも高い評価が得られた。学生が満足していることは、授業中の発言などからも察することができたが、じっくりとテキストを読むことが予想以上に好評だったことは、社会学者の一人として嬉しく思う。

⑦展開科目（カレントトピックス科目） 「復興の社会学」

中間レポート、最終レポートの二つのレポートを課した。両レポートとも、特定の講師（複数も可）による授業に触発された独自のテーマに基づいて執筆することを要求した。中間レポートに対しては、当該授業担当者とコーディネイターである私が、改善のためのコメントを記し、それを最終レポートの執筆に反映させることを期待した。提出されたレポートは一定の水準を上回っていたが、最終レポート提出に至らなかつた学生も少なからず存在した。

授業評価の「点数」は、他の社会科学（政治学、経済学）同様、委員会平均よりもやや低かった。他の科目とは受講生の母集団が違うので単純な比較は難しいが、「復興大学」の受講生は、「見えやすい」「すぐに役立つ」ものを期待していたためかとも思われる。

(5) 吉野 博

a. 教養教育院教授としての授業の狙いと取り組み

(第1セメスター)

①基幹科目（自然論） 「自然と環境」 住いと人と環境（水曜日の1時限に実施）

住まいは生活を包む器であり、人生の大半を過ごす場所である。従って、快適で健康に過ごせるように環境が整えられていなければならない。しかしながら、シックハウスという言葉があるように、必ずしも健康が維持できるとは限らない。また住宅の中で発生する事故死として、浴室の中での溺死が最も多いことが報告されている。

一方で地球温暖化防止の観点から、省エネルギーが社会的な要請として求められており、暖房や冷房の過度の使用は好ましくない。

授業では、快適・健康であるための環境条件は何か、また化石エネルギーをできる限り使わないで環境を実現するためにはどうすればよいかについて学び、持続可能社会の実現について理解を深めることを狙いとする。

②基幹科目（自然論） 「自然と環境」 住いと人と環境（水曜日の3時限に実施）

①と同じであり、省略する。

③共通科目（転換・少人数科目） 「基礎ゼミ」 住いのエネルギー消費構造を理解して温暖化防止策を探る

地球温暖化は人類の存亡に関わるともいえる深刻な問題となっている。温暖化の原因である二酸化炭素の排出量は我が国の場合には、1/3が建物の建設・運用・解体等に伴うものであり、私たちの生活と大きく関わる家庭（住宅）部門はそのうちの60%を占める。

本講義では、二酸化炭素の排出と直接関わりのあるエネルギー消費量に着目し、住生活に連するエネルギーの需要構造、建物のエネルギー消費が環境へ与える影響、環境に配慮した設計事例等について、自らテーマを設定して調査を行い、地球環境時代の都市や建築、並びに個人のライフスタイルの在り方等について議論することを狙いとする。

(第2セメスター)

①基幹科目（自然論） 「自然と環境」 住いと人と環境（木曜日の2時限に実施）

第1セメスターの①と同じであり、省略する。

②基幹科目（自然論） 「自然と環境」 住いと人と環境（木曜日の3時限に実施）

第1セメスターの①と同じであり、省略する。

③展開科目（総合科学（カレントトピックス）） 「展開ゼミ」 環境とエネルギー問題（月曜日5時限に実施）

第1セメスターの③と同じであり、省略する。

④展開科目（総合科学（カレントトピックス）） 「展開ゼミ」 環境とエネルギー問題（木曜日5時限に実施）

第1セメスターの③と同じであり、省略する。

b. 各授業の実施状況

(第1セメスター)

①基幹科目（自然論） 「自然と環境」 住いと人と環境（水曜日の1時限実施）

講義は11回実施した。講義を行うために使用するPPTのコピーをあらかじめ用意して配布した。講義の最後に小テストを実施し、講義の内容がどのくらい出来たのかを確認した。出席の確認も行った。次の講義に、その回答を示し、理解が不足している場合には再度説明した。毎回、レポートの宿題を課した。講義の冒頭に前回のレポートに対する簡単なコメントを行った。誰がどのようなレポートを書いたかについてもコメントした。前回の講義の復習を実施してから、次の講義に入った。寝ている学生が多くなってきたときは、休憩することも行った。

講義のテーマは以下の通りである。

- 1) 概論（住まいと人と環境の関係、持続可能社会）
- 2) 住まいで健康・快適に過ごすための条件
- 3) 寒さ暑さと病気
- 4) 建物を通しての熱の流れと暖房・冷房
- 5) 住いを断熱・気密にするということの意味
- 6) すまいの中の空気と健康
- 7) 空気を清浄に保つための空気の入れ替え
- 8) 湿気を調整する
- 9) エネルギーの使用実態と節約の可能性
- 10) 半地下住居の魅力
- 11) 住まいの環境の評価

熱心に聴いているような雰囲気はあったが、しばしば居眠りをしている学生がみられた。成績は、試験、出席率、レポートの提出と内容から評価している。試験は、持込み可であったこともあるが、全般的によく回答されていると評価できた。「住まいと人と環境」について、身の回りの問題を科学的に考える機会が増えたのではないかと考える。

②基幹科目（自然論） 「自然と環境」 住いと人と環境（水曜日の3時限実施）

講義は基本的には1講時目と同様である。ただし、同じ日の2回目の講義であることから、解説はよりわかりやすくできたと推察している。

講義を行うために使用するPPTのコピーをあらかじめ用意して配布した。講義の最後

に小テストを実施し、講義の内容がどのくらい出来たのかを確認した。出席の確認も行った。次の講義に、その回答を示し、理解が不足している場合には再度説明した。毎回、レポートの宿題を課した。講義の冒頭に前回のレポートに対する簡単なコメントを行った。誰がどのようなレポートを書いたかについてもコメントした。前回の講義の復習を実施してから、次の講義に入った。寝ている学生が多くなってきたときは、休憩することも行った。

講義のテーマは以下の通りである。

- 1) 概論（住まいと人と環境の関係、持続可能社会）
- 2) 住まいで健康・快適に過ごすための条件
- 3) 寒さ暑さと病気
- 4) 建物を通しての熱の流れと暖房・冷房
- 5) 住いを断熱・気密にするということの意味
- 6) すまいの中の空気と健康
- 7) 空気を清浄に保つための空気の入れ替え
- 8) 湿気を調整する
- 9) エネルギーの使用実態と節約の可能性
- 10) 半地下住居の魅力
- 11) まちづくりと景観
- 12) 住まいの環境の評価

熱心に聴いているような雰囲気はあったが、しばしば居眠りをしている学生がみられた。成績は、試験、出席率、レポートの提出と内容から評価している。試験は、持込み可であったこともあるが、全般的によく回答されていると評価できた。「住まいと人と環境」について、身の回りの問題を科学的に考える機会が増えたのではないかと考える。

③共通科目（転換・少人数科目）「基礎ゼミ」　住いのエネルギー消費構造を理解して温暖化防止策を探る

当初は二つの授業に分かれていたが、一方は受講者が 5 人だったので、学生の都合を確認したうえで、月曜日の授業に一つの講義としてまとめた。

最初の 2 回は、講義の科目に関連した内容に関して講義形式で、吉野が情報を提供した。3 回目は、TA の方から関連したテーマでの最終のまとめ方に参考となるように情報を提供した。

ゼミのテーマに関しては、こちらからいくつかのテーマを掲げ、3 回目に希望のテーマを提出させた。希望のテーマに従って、1 グループが 4-5 人となるように、5 つのグループにわけた。グループの中で議論ができるように、毎回、調べたことを発表し合って、次のステップに進めた。吉野、TA は適宜グループに加わって、学生からの進捗状況を聞き、アドバイスを与えた。最終の発表の前に、1 回、練習の機会を設けた。

最終的な発表では、1 年生にしてはよくできたのではないかと考えている。学生にも評

価させたが、発表の優劣は吉野、TA とも共通していた。よくできた発表のグループに、発表会への参加を促したが、最終的に日程が調整できないということで辞退した。

五つのグループに分かれて、それぞれ TA も交えてかなり議論がされていたようであり、成果があったと考える。

(第 2 セメスター)

①基幹科目（自然論） 「自然と環境」 住いと人と環境（木曜日の 2 時限に実施）

講義は 13 回実施した。講義を行うために使用する PPT のコピーをあらかじめ用意して配布した。講義の時間は 1 時間ぐらいになるように前期よりもコンパクトにした。講義の最後に質問を書かせた。質問が無いときは、こちらから質問をして答えさせた。時間があるときは、その質間に答えた。時間が足りないときは、次の講義の最初に答えるようにした。

また、毎回、レポートの宿題を課した。レポートに対するコメントは次の講義の冒頭に行つた。誰がどのようなレポートを書いたかについてもコメントした。前回の講義の簡単な復習を実施してから、次の講義に入った。

講義のテーマは以下の通りである。

- 1) 概論（住まいと人と環境の関係、持続可能社会）
- 2) 住まいで健康・快適に過ごすための条件
- 3) 住まいで健康・快適に過ごすための条件（続き）
- 4) 寒さ暑さと病気
- 5) 建物を通しての熱の流れと暖房・冷房
- 6) 住いを断熱・気密にするということの意味
- 7) すまいの中の空気と健康
- 8) 空気を清浄に保つための空気の入れ替え
- 9) 湿気を調整する
- 10) エネルギーを節約する
- 11) 半地下住居の魅力
- 12) 緑による都市・建築のエコロジカルデザイン
- 13) 住まいの環境の評価

熱心に聴いているような雰囲気はあったが、しばしば居眠りをしている学生がみられた。成績は、試験、出席率、レポートの提出と内容から評価している。試験は、持込み可であったこともあるが、全般的によく回答されていると評価できた。「住まいと人と環境」について、身の回りの問題を科学的に考える機会が増えたのではないかと考える。

②基幹科目（自然論） 「自然と環境」 住いと人と環境（木曜日の 3 時限に実施）

講義は 13 回実施した。講義を行うために使用する PPT のコピーをあらかじめ用意して配布した。講義の時間は 1 時間ぐらいになるように前期よりもコンパクトにした。講

義の最後に質問を書かせた。質問が無いときは、こちらから質問をして答えさせた。時間があるときは、その質問に答えた。時間が足りないときは、次の講義の最初に答えるようにした。

また、毎回、レポートの宿題を課した。レポートに対するコメントは次の講義の冒頭に行つた。誰がどのようなレポートを書いたかについてもコメントした。前回の講義の簡単な復習を実施してから、次の講義に入った。

講義のテーマは以下の通りである。

- 1) 概論（住まいと人と環境の関係、持続可能社会）
- 2) 住まいで健康・快適に過ごすための条件
- 3) 住まいで健康・快適に過ごすための条件（続き）
- 4) 寒さ暑さと病気
- 5) 建物を通しての熱の流れと暖房・冷房
- 6) 住いを断熱・気密にするということの意味
- 7) すまいの中の空気と健康
- 8) 空気を清浄に保つための空気の入れ替え
- 9) 湿気を調整する
- 10) エネルギーを節約する
- 11) 半地下住居の魅力
- 12) 緑による都市・建築のエコロジカルデザイン
- 13) 住まいの環境の評価

午前の講義に統いて二回目なのでスムーズにできた印象を持っており、熱心に聴いているような雰囲気はあったが、しばしば居眠りをしている学生がみられた。成績は、試験、出席率、レポートの提出と内容から評価している。試験は、持込み可であったこともあるが、全般的によく回答されていると評価できた。「住まいと人と環境」について、身の回りの問題を科学的に考える機会が増えたのではないかと考える。

③展開科目（総合科学（カレントトピックス）） 「展開ゼミ」 環境とエネルギー問題（月曜日 5 時限に実施）

受講生は高校生一人を含めて 4 人であった。講義の回数は、13 回。最初の 2 回は、講義の科目に関連した内容に関して講義形式で、吉野が情報を提供した。3 回目からは、こちらが提示したテーマについて興味を覚えたものに関連した事柄に関して、レポートを提出させ、学生から説明させて、その後、議論した。最後に、次に調べることに関してアドバイスした。その後、毎回、前回のアドバイスにもとづいて調査したことを報告させた。9 回目は、目次を作成させ、これまでの資料との関係を報告させた。10 回目は、PPT を使って、できている範囲で発表させた。11 回目は、TA の指示を受けながら PPT を改良した。12 回目は、発表の予行演習を行った。13 回目は、発表を行った。他のグループと合同で実施した。

最終的な発表では、1年生にしてはよくできたのではないかと考えている。高校生も途中の段階ではまとまるのかどうか心配であったが、最終的には良くまとめていた。発表の優劣は吉野、TAとも共通していた。少人数なりに、きめ細かい指導ができたので、授業評価が高かったのではないかと思われる。

④展開科目（総合科学（カレントトピックス）） 「展開ゼミ」 環境とエネルギー問題（木曜日 5 時限に実施）

受講生は高校生二人を含めて4人であった。講義の回数は、13回。最初の2回は、講義の科目に関連した内容について講義形式で、吉野が情報を提供した。3回目からは、こちらが提示したテーマについて興味を覚えたものに関連した事柄について、レポートを提出させ、学生から説明させて、その後、議論した。最後に、次に調べることについてアドバイスした。その後、毎回、前回のアドバイスにもとづいて調査したことを報告させた。9回目は、目次を作成させ、これまでの資料との関係を報告させた。10回目は、PPTを使って、できている範囲で発表させた。11回目は、TAの指示を受けながらPPTを改良した。12回目は、発表の予行演習をおこなった。13回目は、発表を行った。他のグループと合同で実施した。高校生に対しては、どのくらいの能力があるのかわからなかつたので、毎回、提出されるレポートの内容を確認しながら、その後の方向性についてアドバイスした。

最終的な発表では、1年生にしてはよくできたのではないかと考えている。高校生も途中の段階ではまとまるのかどうか心配であったが、最終的には良くまとめていた。発表の優劣は吉野、TAとも共通していた。少人数なりに、きめ細かい指導ができたので、授業評価が高かったのではないかと思われる。

c. 学生授業評価とその評価に基づく改善

(第1セメスター)

①基幹科目（自然論） 「自然と環境」 住いと人と環境（水曜日の1時限実施）

全般的に平均よりも低く評価されていた。平均と比較して評価に幅があることが平均を低くしている一つの理由である。評価の低い項目に着目すると、「授業の進度」はちょうど良いを中心としたプラスとマイナスが同じぐらいの割合になっている。「評価の方法」については、最初にきちんと説明したが、マイナスの評価も見られた。これに関しては、何度か説明する必要があろう。「シラバスを基本にして」についてもやや低くなっている。シラバスを基本にしているが、学生の評価が異なっていた。総合評価で「非常に良い」とは評価されていないので、対応する必要があろう。

解決すべき課題や今後の改善策としては、以下のとおりである。1)講義の内容が多すぎたような感じであったので、全体的に量を減らし、授業の後半の時間に質問の時間をとつて議論することにする。2)レポートの課題は、講義に直接関連した内容にする。3)成績の評価に関しては、何度か説明する。4)講義がシラバス全体のなかでどこに位置づけられる

のかについて説明する。5)物理量を測定する機器を実際に示して興味を持たせる。

②基幹科目（自然論） 「自然と環境」 住いと人と環境（水曜日の3時限実施）

全般的に平均よりも低く評価されていた。1講時目の講義に比べるとやや高く評価されている。「授業の進度」は、1講時目とは逆に高く評価された。ほとんど同じ進度であるが、なぜかは不明である。「評価の方法」については、最初にきちんと説明したが、マイナスの評価も見られた。これに関しては、何度か説明する必要があろう。「シラバスを基本にして」についてもやや低くなっている、学生の受け止め方は異なっていた。総合評価では、1講時目よりも高く評価されているが、平均値よりは低い。「関連学習」の評価が高いのは、レポートでやや幅広い課題を出したことが理由であろう。

解決すべき課題や今後の改善策としては、1)詰め込みのような感じであったので、量を減らし、後半の時間に質問の時間をとって、議論することにする。2)レポートの課題は、講義に直接関連した内容にする。3)成績の評価に関しては、何度か説明する。4)講義がシラバス全体のなかでどこに位置づけられるのかについて説明する。5)物理量を測定する機器を実際に示して興味を持たせる。

③共通科目（転換・少人数科目） 「基礎ゼミ」 住いのエネルギー消費構造を理解して温暖化防止策を探る

「関連学習」の評価が高いが、全学教育としてはやや専門的すぎたということか。「進度」の評価が高いのは、確認できてよかったと思う。「評価方法」については、十分に理解されていなかったようだ。「全学教育としての適切性」が低いのは、専門的だったからか。「総合評価」がやや低い。楽しそうにゼミを進めていたような印象とはやや異なるが、評価にばらつきがあるので、学生よってはやや不満もあったと考えるべきであろう。

解決すべき課題や今後の改善策としては、課題がやや専門すぎるところがあったかもしれない、学生の取り組みの状況を十分に考慮しつつテーマを決めることが必要であろう。

(第2セメスター)

①基幹科目（自然論） 「自然と環境」 住いと人と環境（木曜日の2時限に実施）

平均よりも高い評価と低い評価が見られた。高い評価は、「出席」、「取り組み」、「関連学習」、「授業内容」、「進度」、「板書」、低い評価は、「説明」、「評価方法」、「シラバス」、「総合」であった。「評価の方法」については、最初にきちんと説明したが、マイナスの評価も見られた。これに関しては、何度か説明する必要があろう。「シラバスを基本にして」についてもやや低くなっている。基本にしているが、学生の評価が異なっていた。総合評価で「非常に良い」と評価されていないので、対応する必要があろう。

解決すべき課題や今後の改善策は以下のとおりである。1)前期に比べると全体的に改善されているが、まだ講義の内容が多すぎたような感じであったので、さらに量を減らし、

授業の後半の時間に十分に質問の時間をとって議論することにする。2)レポートの課題は、あまり負担がかからないような課題とする。3)成績の評価に関しては、何度も説明する。4)講義がシラバス全体のなかでどこに位置づけられるのかについて説明する。毎回、確認する。5)物理量を測定する機器を実際に示して興味を持たせる。

②基幹科目（自然論） 「自然と環境」 住いと人と環境（木曜日の3時間に実施）

全般的に平均よりも高く評価された。しかしながら、総合は低くなっていた。2講時と殆ど同じであるが、こちらの方が高い評価となった。二度目で説明がうまくいったからか。質問の時間をとって解説したことがよかったのかもしれない。「評価の方法」「シラバス」についても、2講時と同様に説明したが、こちらの方は高く評価されている。総合評価で「非常に良い」とは評価されていないので、対応する必要があろう。

解決すべき課題や今後の改善策としては、次の通りである。1)前期に比べると全体的にかなり改善されているが、まだ講義の内容が多すぎたような感じであったので、さらに量を減らし、授業の後半の時間に十分に質問の時間をとって議論することにする。2)レポートの課題は、あまり負担がかからないような課題とする。3)成績の評価に関しては、何度も説明する。4)講義がシラバス全体のなかでどこに位置づけられるのかについて説明する。毎回、確認する。5)物理量を測定する機器を実際に示して興味を持たせる。

③展開科目（総合科学（カレントトピックス）） 「展開ゼミ」 環境とエネルギー問題（月曜日5時間に実施）

「関連学習」の評価が平均に比べて特に高い。毎回、宿題のようなことを課したためであろう。「進度」の評価がやや低い。少人数だったことから、個人の進捗の度合いに合わせて、指導したからであろう。「評価方法」については、十分に理解されていなかったようだ。「説明」「全学教育科目」「知識・技能」は評価点が5.0であった。総合評価も4.8と高かった。コメントには、以下のようなことが記されていた。

- ・今回は「環境問題とライフスタイル」というテーマで調査・プレゼンを行った。実際に調べていく中で、ライフスタイルを変えていくことの難しさや、環境問題を解決することの大変さを実感することができ、有意義なゼミになったと思う。また、今後プレゼンをする上でのノウハウも身に着けることができた。さらに、高校生と共にゼミをすることも刺激になった。
- ・毎週作業に追われてつらい場面もありましたが、「環境とエネルギー」という同じテーマの元でいろいろな考え方の方々の発表を聞け、貴重な経験になりました。プレゼンをするという経験もなかなかなかったため、今後活かしていくべきだと思います。先生やTAのお二人の説明や指導も丁寧で、より理解が深まりました。ありがとうございました。
- ・「大学の授業を受けられる」という機会を設定してくださり、本当にありがとうございます。技術面としては、スライドの作成やグラフの作成などたくさんのことを行つ

ることができました。知識面としては、上級生の発表を聞いたり、自分で調査することでたくさん身につきました。また、経験として、何物にもかえがたい貴重な体験をさせてもらいました。今後の高校生活や大学などでもぜひ生かしていきたいです。本当にありがとうございました。

④展開科目（総合科学（カレントトピックス）） 「展開ゼミ」 環境とエネルギー問題（木曜日 5 時限に実施）

「関連学習」の評価が平均に比べて特に高い。毎回、宿題のようなことを課したためであろう。「評価方法」については、十分に理解されていなかったようだ。「シラバス」「全学教育科目」「知識・技能」は評価点が 5.0 であった。コメントには以下のようなことが記されていた。

- ・高校生を含め、他学生が立派で良い刺激になった。

(6) 浅川 照夫

a. 教養教育院特任教員としての授業の狙いと取り組み
(第 1 セメスター)

①外国語英語 「英語 A1」

1 クラス担当。「多読」によって、英語を英語として読む習慣を身に付けることを目的とする。スムーズな英文理解とスピードある読解力、語彙の定着と拡充を目指すと同時に、豊かな読書体験を経験させる。

②外国語英語 「英語 B1」

4 クラス担当。CALL 教室を使って、英語の Listening 力の向上を目指している。テキストにはインターネット・マルチメディア教材 LincEnglish の Gold I(全レッスン 12 課)を利用し、毎週 170 問以上のリスニング、速読読解、語彙・文法のアサインメントを義務付ける。授業ではその復習を兼ねると同時に、文法・語彙問題、新しい音声教材を聞かせながら、英語の運用能力を高めるよう工夫する。

(第 2 セメスター)

①外国語英語 「英語 A2」

1 クラス担当。「多読」によって、英語を英語として読む習慣を身に付けることを目的とする。スムーズな英文理解とスピードある読解力、語彙の定着と拡充を目指すと同時に、豊かな読書体験を経験させる。

②外国語英語 「英語 B2」

3 クラス担当。後期はインターネット・マルチメディア教材 LincEnglish の Gold II(全レッスン 12 課)を利用して、基本的に前期と同じ授業を展開する。(i) 自然なスピード

の会話についていける自信をつけること、(ii) ある程度の分量の英語を耳で聞いて、要点をきちんと把握できること、(iii) 英語を聞いて英語の質問に書いて答えることの 3 点を学習目標とする。

(第 3 セメスター)

①外国語英語 「英語 C1」

1 クラス担当。CALL 教室を使って、英語の Listening 力および Reading 力の向上を目指している。Reading テキストには精読用として The Evolution Wars (Time, Aug.15, 2005), EQ Factor (Time, June24, 2001) を使用。さらに、同じテーマを扱ってはいるが別内容のリーディング教材とリスニング教材を用い、まずテーマの話題についてリーディング教材で知識を仕入れ、その上で、別内容の音声教材を聞いて、内容を十二分に把握していくという学習方法を採用。教材テーマとして Silk Road, British Imperial System, Brillat Savarin, Sandel 白熱授業 in Tohoku University, MetroRail, Mt. Everest を使用し、日常会話、講義、各種アナウンス等を利用して、やや高度な Listening 演習を行う。(i) 自然なスピードの会話についていける自信をつけること、(ii) ある程度の分量の英語を耳で聞いて、要点をきちんと把握できること、(iii) 英語を聞いて英語の質問に書いて答えること、(iv) 高度な内容の英語を読み解くことの 3 点を学習目標とする。

(第 4 セメスター)

①外国語英語 「英語 C2」

2 クラス担当。CALL 教室を使って、英語の Listening 力および Reading 力の向上を目指している。Reading テキストには精読用として The Evolution Wars (Time, Aug.15, 2005), EQ Factor (Time, June24, 2001) を使用。さらに、同じテーマを扱ってはいるが別内容のリーディング教材とリスニング教材を用い、まずテーマの話題についてリーディング教材で知識を仕入れ、その上で、別内容の音声教材を聞いて、内容を十二分に把握していくという学習方法を採用。教材テーマとして Silk Road, British Imperial System, Brillat Savarin, Mt. Everest, Boston Tea Party, Apes and Monkeys, Mary Celeste, Invention of Photography 使用し、日常会話、講義、各種アナウンス等を利用して、やや高度な Listening 演習を行う。(i) 自然なスピードの会話についていける自信をつけること、(ii) ある程度の分量の英語を耳で聞いて、要点をきちんと把握できること、(iii) 英語を聞いて英語の質問に書いて答えること、(iv) 高度な内容の英語を読み解くことの 3 点を学習目標とする。

b. 各授業の実施状況

①外国語英語 「英語 A1」

日本の伝統的な英語授業は、短文を読んで日本語に訳すという Grammar-Translation 方式が主流となっている。しかし、大学からの英語ではもはや、日本語に訳すという作業

は翻訳家を目指す者を除けば不必要なものである。「多読」は伝統的な英語授業から脱皮し、将来に志向した英語読解のため授業である。毎週、自身で読んだ語彙数を記録し、印象に残った本のストーリーをレポートさせる。とりあえず、最低 10 万語以上の英語を読むことで評価 C の合格点を与えるとし、徐々に語彙数が増えるのに応じて、上位の評価を与えるものとする。

多読の授業では Silent Reading の時間を設けたり、口頭での物語紹介の時間を含めたりするが、今回の授業では、多読に合わせて、1 週に 20 語程度のやや難しい語彙を例文とともに提示し、使い方や意味を説明した。

Timed Reading では、指定された文章を読むのに何分かかったかを測り、自分の読書スピードを判定させた。

②外国語英語 「英語 B1」および「英語 B2」

1 年生ではリスニングの訓練は絶対に欠かせないものである。毎年、基礎訓練としてインターネット教材 LincEnglish を使用し、本学 1 年生には 1 セメに Gold-I、2 セメに Gold-II を使用している。本教材は G-I, G-II, G-III へとレベルアップする学習システムになっており、難易度が徐々に高くなる。各レベルは、1 レッスンが描写問題 25 問、質疑応答問題 30 問、会話問題 30 問、説明文問題 10 問、速読問題 19 問、文法問題 65 問の計 179 問から成り立っている。学生に 1 週間 1 レッスンの予習を義務付け、授業では復習問題、新規の質疑応答で理解度を試した。インターネットにアクセスできる環境であればどこでもいつでも自由に学習できるので、ほぼ全員の学生が 12 レッスンの予習を欠かさず行っている。毎年、授業では予習した音声の中からいくつかピップアップして、新たな内容の質問を英語で聞き、英語で答える訓練をしている。口頭で答えさせることも試みているが、なかなか難しいようで、とてもスムースな質疑応答は出来ないでいる。学生たちはもともと授業で声を発するのに慣れていないので、前期 B1 の後半になると声がだんだんと聞こえなくなっていく。無理強いすることもできず、書いて答えさせるように変えたりしている。その場合、話されている英語を聞き取って、それをそのまま書こうとする癖がみられるので、できる限り、理解した内容を自分の英語で工夫して書くよう指導している。

③外国語英語 「英語 C1」および「英語 C2」

Reading 教材と Listening 教材を同時に使用する 2 年生クラスは、非常に難度の高いリスニングクラスとなる。トピックに関する知識が既に入っているといないとでは、リスニング理解度は格段に異なる。つまり、話題に関する知識があればある程、それだけ、英語を聞いて理解する度合いは高くなる。したがって、リーディング教材とリスニング教材の併用はリスニング能力をステップアップするための重要な学習方法である。授業では grammar, vocabulary, dictation, shadowing の基礎訓練のほかに、読んで要約すること、聞いて書くこと、聞いて要約すること、要求に対しどう応えどう書くかを重点的に行った。

一種類のテキストではほぼ決まった人物の声しか聴けないという不備があるので、それを回避するために、いろいろなタイプの声と発音の癖に慣れるよう、様々な音声ファイルを教材として提供した。その上で、読んで、聞いて、書くという訓練を集中して行った。一週間前に提供されるリーディング、リスニング教材を予習し、それに基づいて、さまざまなドリルを行った。内容に英語で質問し英語で答えること、Dictation、関連内容の新しい会話を聞いての作文等、豊富な課題を提示した。

c. 学生授業評価とその評価に基づく改善

①外国語英語 「英語 A1」

多読は、学生にとって初めての経験であった。中学 1 年レベルから読み進めることに違和感を持つこともなく、自身の英語読解力と適切な時間配分を取りながら、学生たちは積極的に多読に取り組んでいた。多読用教材は図書館に多数整備されているので、図書館との連携も非常にうまく機能していた。授業評価は良好であった。この種の授業では評価の方法に課題があると思われるが、評価 A 以上が約 3 割とほぼ英語教科部会で定められた水準となっていた。

②外国語英語 「英語 B1」 および「英語 B2」

毎年、LincEnglish を使用し、学生の聞く力の向上を目指している。昨年度もここで記したことであるが、CALL を活用した英語授業は 4 技能能力向上のために欠かせないと考えるので、再度、繰り返しておきたい。

LincEnglish の教材内容については、ほぼすべての学生が高い評価を下している。1 週間の予習時間が多いために不満を感じる学生も少なくないが、本学学生の英語スキル能力を考えると、週 1 回の CALL 授業時間で適当に時間をかけているだけでは、とても満足のいくレベルまで能力を高めることはできない。リスニングは学習時間に比例して能力が上がるので、英語 B クラスでは、学生にとってはやや大変かもしれないが、この教育法を貫いて英語の基礎訓練を継続することは欠かせないと考えている。

学生たちが高校で受けってきた英語授業を振り返ってみると、学習指導要領によって読解、総合、オーラル・コミュニケーションといった授業科目の履修が義務付けられており、一見したところ、英語 4 技能能力が満遍なく身に付くように計画はなされている。しかし、実際には、高校英語が読解のみに偏っていることは否定できない事実である。これは大学入試が高校教育を悪い意味でコントロールしているせいでもあるが、我が国の外国語教育が和訳中心主義の古い伝統からどうしても脱却できないという弊害も絡んでいる。読解力に関しては、決して満足のいくものではないが一定の水準にあると認めるにしても、それ以外のリスニング力、スピーキング力、ライティング力となると極めて低いと言わざるを得ない。残念ながら、これは長年実施してきた TOEIC、TOEFL で実証済みである。

大学教養教育には remedial 教育的一面がある。remedial 教育で対象となるのは、物理、生物などの未履修科目と、高校で履修していくながら能力の追いつかない基礎学力低下科目

である。本学では、前者のみが議論の対象になっているが、いわゆる偏差値上位大学として、後者の問題は存在しないという暗黙の了解があるのではないだろうか。しかし、英語能力がグローバル・スタンダードで評価されるようになると、たとえ上の 3 スキルが高校までに履修されていると仮定しても、その達成レベルでは、とても大学英語教育を受けるに値するレベルとは言えないである。さらに不幸なことに、オーラル・コミュニケーション等が英語授業科目として存在していても、実質的な教育がなされていないという現実がある。したがって、大学教養教育における英語教育は、ある一面で、remedial 教育の役割を担わざるを得ないのである。

その意味からも、leading university を目指す本学の学生たちには、単に単位取得のためではなく自らの英語能力開発のために常に能動的に英語を学習する姿勢を持ってもらいたいと考えている。週一回の英語 B の授業だけで、英語スキルの基礎となるリスニング力を挙げるには英語学習時間数があまりにも少なすぎる。半期の授業を通してこの種のオンライン教材の学習方法に慣れ、それを基に年間を通じて自主的に真剣にリスニングに取り組んでもらいたいのである。

③外国語英語 「英語 C1」 および「英語 C2」

2 年生は英語の授業が週 1 コマしかないので、読むこと、聞くことのスキル面に重点を置いた。聞くことでは、より自然な authentic な英語を聞かせる工夫をした。読むことの基本ができている、つまり語彙の面でのつまずきはないだろうという前提で、TIME や Internet からの記事を探ったが、難しすぎたようである。しかし、テキスト英語の学習で内容を把握したうえで、内容は異なるが同じテーマの英語内容を耳で聞くと、リスニングの度合いが格段に上がることに気付いてくれたことは幸いである。リーディング教材で語彙や内容が分かっているので、内容説明は必要なく、耳だけでリスニング教材の内容把握につなげていくことが英語能力の改善につながる。学生の興味をそそるようなトピックを選んだので、学生の取り組みは非常に良かったと思われる。

(7) 藤 本 敏 彦

a. 教養教育院特任教員としての授業の狙いと取り組み

大学は「知識基盤社会」においてこれまで以上に期待され、専門教育の水準も年々高度になっている。その傾向に比例する様に新しいストレスも増加し、大学生の生活基盤に無視できない影響を及ぼしている。「スポーツ実技」や「体と健康」では学生が健康的かつ円滑な生活基盤を維持する教育を行うため以下の項目を教育のねらいとした。

- ①生涯にわたる心身の健康を維持するための知識・技術を習得する。
- ②他者とのコミュニケーションを必然的に持たせる。
- ③リーダーシップを育成する。
- ④本学の「教養教育の理念」の重要性を「武道の理念」を通して学ぶ。

⑤日本古来の伝統を知ることで国際比較観点を持たせる。

b. 各授業の実施状況

①共通科目「スポーツ A」「スポーツ B」 ソフトボール

「スポーツ A・ソフトボール」は 1・3 セメスターに週 4 コマ開講し、2・4 セメスターには週 3 コマ開講した。この授業の目的は 1. 試合を中心にソフトボールに必要な基本技術を実習し、ソフトボールの楽しさを体験すること、2. 体力の向上とスポーツによる心身のリフレッシュを図ること、3. チーム内における役割、特にリーダーの役割を経験すること、4. スポーツを通じてコミュニケーションを図ることである。

基礎練習として発声を伴う集団ランニング、キャッチボールリレーを取り入れ集団行動の中での個人の役割を重視した。野球系のスポーツの練習は 1 つの野球場で 30 人程度が限界である。したがって東北大学ではソフトボールを 40~60 人の多人数クラスで行うため、基礎練習が十分に行えない。このため試合の中での技術習得を重視した。試合で技術を向上させるためには幾つかの要因が必要で、各チームに熟練者を均等に配置すること、および対戦相手チームとの実力を均衡にすることを心がけた。またチームメート間でのコミュニケーションを円滑に図るため、さらにはリーダーシップの育成のため、ポジションや打順の決定、相手チームとのルールの摺り合わせは週替わりのキャプテンが中心となり学生自身で行うよう促した。セメスター内でチーム編成を 2~3 回行いできるだけ多くの友人とチームを組めるように工夫した。教員は好プレーをした学生を大きな声で褒め、またエラーをした学生を安心させる声掛けをするよう心がけた。試合はリーグ戦で行い優勝チームを決定し、学生の意欲の維持に努めた。2 セメスターの「スポーツ A・ソフトボール」は冬季であるため、ソフトボール以外に、バスケットボール、フットサル、卓球などの球技を行った。

「スポーツ B・ソフトボール」は 3 セメスターに週 2 コマ開講した。基本的に授業の目的や方針はスポーツ A と同様であるが、スポーツ B ではやや高度な戦術（ダブルプレー や守備位置のシフトなど）の習得を試みた。スポーツ B の履修者は経験者の占める割合がスポーツ A よりも高く、高度な戦術を行うことができた。この際、初心者などへの心理的配慮（エラーをした時の対処）も経験者が行ってくれたため、学生の授業への満足度は高いものであった。ソフトボールの評価は出席日数と授業態度を評価の対象とし、AA・A・B・C・D の 5 段階評価を用いた。

②共通科目「スポーツ B」 武道

「スポーツ B・武道」は 3 および 4 セメスターに各 1 コマ開講した。本年度は授業の形式を留学生の履修単位となるよう一部変更した。この授業の目的は「日本の伝統文化」の一端を「武道」を通して経験し、その精神に触れることである。武道種目は 3 セメスターに合気道、4 セメスターに空手を行った。東北大学における武道は佐藤 明准教授が担当されている弓道が継続的に行われており高評価を受けている。しかしそれ以外の武道

種目は履修生が減少し 7 年前に非開講となっていた。履修生の減少の原因として「痛い」「他者との接触がいや」「臭い」などが挙げられる。ところが東北大学では世界各国からの留学生が増えつつあり、専門領域の学習と共に日本文化を学ぶ教養教育の機会が求められている。そこで以下のことを改善し武道教育を行っている。

- 1.目的が技術の習得ではなく、日本文化に触れることであることを周知した。
- 2.武道の理念の説明時間を比較的多くとる（礼儀の意味、思いやりの精神など）。
- 3.稽古など他者との接触は段階を踏んで導入することとした。

学生評価は概ね良好である。3 セメスターの合気道は「留学生と学ぶ合気道」と名称を変更（シラバスでは合気道）としたところ留学生 14 名、日本人学生 15 名の受講者があった。平成 25 年度に比べ倍増した。4 セメスターに行われた空手は留学生 12 名、日本人学生 9 名の受講者があった。平成 25 年度から飛躍的に受講者が増え、特筆すべきは留学生の履修と同時に日本人学生の履修者も増加したことである。成績評価は開講数の 2 / 3 以上の出席とし、技術評価も加味した。

③基幹科目「生命と自然」　身体運動のしくみ

火曜日の 1 時限に開講した。この授業の目的は身体を動かす基本的な仕組みを学ぶことである。ヒトは思考を具現化するとき、常に身体を動かす必要がある。私たちはこの身体の動きを「運動」と呼び、「思考」と同様に、有意義で健康的な人生を送る上で最も重要な要素になる。したがって身体を動かす能力が高い人（つまり行動力のある人）はそれだけ思考を実現させる可能性が高くなるともいえる。身体を鍛えることはこの運動能力を高めることにはかならない。生涯にわたり運動の機能を維持するためには、まず身体を動かす仕組みを知り、その知識を日々のトレーニングや時には治療に反映させることが重要になる。この授業では基本的な脳による身体運動の制御方法と神経の機能、個々の筋肉の作用およびトレーニング法について解説を行った。平成 26 年度は 362 名の受講があり好評であった。しかし多すぎる受講者数は授業運営、特に学生の集中力の把握が難しく、一定の人数に抑える必要性を感じている。

④共通科目「身体と健康」　身体の文化と科学

この授業はスポーツ担当教官がオムニバス形式で担当するものであり、藤本の担当は「運動と脳」および「疲労をコントロールする」の 2 コマであった。詳細は私が授業責任教員ではないため省略するが、この授業は体系的な授業では無く、医学的、社会学的な両側面からのスポーツに関する授業であることを履修者にガイダンスにおいて周知した。

⑤共通科目（転換・少人数科目）「基礎ゼミ」　運動とこころ

1 セメスター月曜日 4 限目に開講した。この授業の目的は科学の基礎を楽しみながら学ぶこと、プレゼンテーションの方法を学ぶこと、そして運動とココロの関係を学ぶことである。学生がいくつかの強度の異なる運動を行い、運動後の爽快感や疲労感などを経時的

に記録した。運動による感情の変化課題を科学的に捉え、調べる目的、仮説、論証の方法、結果、導き出される事実をプレゼンテーションした。第1週目にセメスター内での進度説明を行った。第2～8週目は測定を行い、第9～最終週目にデータ解析、発表資料作成、プレゼンテーションを行った。本事業は一応の能力向上には寄与したと思われるが、一方で学生の反応は平均的なものであり自主的に参加できるアイデアが必要と思われた。27年度は地域企業と協力し学生に社会との結びつきを実感させる授業に改革したいと考えている。

⑥展開科目「展開ゼミ」 こころと体の健康をつなぐ

運動をすると爽快感やリラックス感が増え、不安などが軽減することが知られている。このゼミでは一週間の授業が終わり疲れている（と予測される）こころと体への軽運動の効果を調べることを目的とした。授業で「ヨガ」を60分程度行い、前後の15分で体の健康状態と感情変化の測定・調査を行う。そのデータを授業時間外でまとめ最終週にレポートを提出する。またこのゼミのもう一つの目的は自分でこころと体の健康を維持する方法の一端を学ぶ事である。方法を知ることで卒業後も自分の時間の中で運動を継続できる当になることが最終目標である。この授業は初年度であり手探り状態で行われたが学生による授業評価は大変高いものであった。ただし一方でレポートの書き方やデータ処理方法などの指導が時間的に不十分であったと自認している。この点については次年度への大きな課題である。

c. 学生授業評価とその評価に基づく改善

①共通科目「スポーツA」「スポーツB」 ソフトボール

今年度は前期開催授業において学生授業評価は概ねどの評価項目においても良好であった。後期開催においては全学教育科目や委員会平均とほぼ同様であった。後期においては天候不順時の授業内容の乏しさが大きな原因であり学生の充実感が得られていない。そこで来年度は授業方針を大きく変更することとした。今一度全学教育の理念と体育実技の理念を確認し、その内容に応じた授業構成とする。具体的にはシラバスに記載するが、学生の体力把握、体力向上方法の教授をソフトボールの授業に組み込む。天候不良時などに空き施設を使い実施する。

②共通科目「スポーツB」 武道

学生授業評価は概ねどの評価項目においても良好であった。今年度は短期留学生プログラムに登録したため3セメスターの合気道、4セメスターの空手とも大幅に受講生が増加した。それに伴い日本人学生の履修者も増加した。今後は日本人と留学生の交流をさらに促す授業展開を開発したい。

③基幹科目「生命と自然」 身体運動のしくみ

学生評価は概ねどの評価項目においても良好であった。受講者数は 360 名であり、ほぼすべての学生が単位を修得した。しかし居眠りや携帯の作動など現代学生に見られる行動が少なからず見受けられた。この傾向は昨年度以来変わらず、注意による改善は見込めないと判断した。来年度は意欲ある学生に集まってもらうため、試験の難易度を上げ履修生の絞り込みを行う。授業評価の自由記述の内容を見ると高評価を得ているが、学生が自ら考え自主的に勉強を行う仕掛けが不足していると自認している。課題を与える必要がある。

④共通科目 「身体と健康」 身体の文化と科学

身体の文化と科学については学生授業評価の結果が手元にないため一般的な問題点を述べる。身体の文化と科学は各教官がオムニバス形式で授業を担当しているが、系統立てた授業ではない。本来であればオムニバスの授業は、「授業に系統性を持たせること」が必要である。しかし教員の構成が系統的でないため、視点を変えてこの授業が体系的な授業では無く医学的、社会学的な両側面からのスポーツに関する授業であることを履修者にガイダンスにおいて周知した。

⑤共通科目（転換・少人数科目）「基礎ゼミ」 運動とこころ

学生授業評価は概ねどの評価項目においても良好であった。グループ作業でレポートを作成した後、発表会を行った。一応の基礎ゼミとしての教育は行えたが学生の自主性を引き出すことはできなかった。そこで来年度は大きく方針を展開し、社会や企業との連携で授業を行うことを企画している。

⑥展開科目（カレントトピックス）「展開ゼミ」 こころと体の健康をつなぐ

平成 26 年度に初めて開講した新しい授業である。学生評価は大変高い値となった。ただし学生のレポート作成については指導時間を少なくしていたため十分な内容ではなかった。来年度はレポートに関する指導時間を効率よく設定したい。

（8）志 柿 光 浩

a. 教養教育院特任教員としての授業の狙いと取り組み

担当科目は「基礎スペイン語 I」「基礎スペイン語 II」「展開スペイン語 I」「展開スペイン語 II」に分かれているが、要するにスペイン語を初めて学ぶ受講生を対象とした基礎課程のうち、前二者がその一年目、後二者がその二年目に相当する。

基礎スペイン語科目は各回 90 分、週二回の授業であり、展開スペイン語科目は各回 90 分、週一回の授業である。授業の総時間数は一年目で年間 90 時間、二年目で年間 45 時間という計算になる。

昨今言われている「単位の実質化」を実現したとすると、基礎スペイン語科目は演習科目

なので、「大綱化」以前の「大学設置基準」の考え方に基づけば教室外での学習が授業時間と同じ 90 時間、合計で年間に 180 時間の学習を前提とした科目である。また展開スペイン語科目はカリキュラム上は講義科目なので、同じく「大綱化」以前の「大学設置基準」の考え方に基づけば教室外での学習が 135 時間、合計で年間に 180 時間の学習を前提とした科目である。

私が担当している基礎スペイン語科目的クラスは何れも理系学部対象であり、これらの学部の学生は二年目の展開スペイン語を履修する義務はない。ほとんどの学生が一年間の履修が終わるとスペイン語の学習をやめてしまう。一方、私が担当する展開スペイン語科目的クラスは、これら理系学部の学生で希望する者にも二年目の授業を開講しようということで平成 24 年度から開講したクラスである。一方、文系学部の学生は二年目までの履修が必修である。展開スペイン語の実際の履修者には理系学部所属で自主的に履修している学生と、文系学部所属で二年目の科目を再履修する学生が混在している。

何れにしても日本語母語話者の外国語習得に要すると言われている二千時間程度の必要学習時間数からみれば、そのほんの初期の部分のみをカバーする教育課程である。

このような条件の中で実施する授業の狙いとして、私は「スペイン語圏に行って何とかなるようにする」という目標を掲げている。明治期以降の日本の高等教育機関における外国語教育は欧米先進国の文芸、学問、技術の成果を文献を通して吸収することを目的としていた。しかし今は違う。学習者が世界の各地に赴いて、さまざまな背景を持つ人々と、面と向かってやりとりすることができるようになる環境を提供すること、これが外国語教育が果たすべき重要な役割となっている。従って、私の担当するスペイン語教育の場合には、学生たちがスペイン語圏に出かけ、スペイン語で人々とやりとりをすることができるよう道筋をつけることが任務となる。

しかし時間は限られている。

まず授業で取り組むのは、学生がスペイン語を勉強し続けようと思えるような状況を作ることである。スペイン語を学ぶことがおもしろい、楽しい、意味がある、と感じられるようになることを目指す。学生は大人である。ゲームをして楽しい、ワイワイ騒げて楽しい、といった次元とは異なる面白さ、楽しさでなければならない。自分は外国語を確かに身につけているという実感、これからも続けていけばスペイン語でのやりとりができるようになるという確かな予感、このような感覚とそれを現実のものとする実力との醸成を私の授業では目指している。

具体的な取り組みの内容については、以下の報告に記したので参照いただければ幸いであります。

志柿光浩「ある初修外国語授業の実践記録」

東北大学学務審議会評価改善委員会教員研修実施委員会

『ちょっとの工夫でこんなに変わる！！—全学教育実践事例集—』2011 年、60－64 頁

b. 各授業の実施状況

一年目の科目については上記の報告に記したものとほぼ同じ形で実施した。なおスペイン語教科部会では、週二回の授業がある基礎スペイン語科目については、できる限り同じ教師が同じクラスの週二回の授業を担当するようにしている。米国の大学の場合、外国語の授業は週 5 回毎日行われることが多いが、通常一人の教師が週 5 回の授業を全て受け持つ。授業の総合性、一体性を保つ上では有効である。私も基礎スペイン語科目は週二回ずつ二つのクラスを担当している。そのうちの一つのクラスについては平成 25 年度より、それまで多年にわたって担当していた工学部クラスから医学部・歯学部・薬学部クラスに変わった。長年の経験から言えることだが、学部によって学生の学習への取り組み方や授業での反応の傾向が異なる。平成 25 年度のこのクラスがどうなるか心配したが受講者数が 30 名と他のクラスより少なく、受講した学生たちも真面目に取り組んでくれて和やかな雰囲気で一年を終えることができた。これに対して平成 26 年度のこのクラスは受講者が 40 名となり、また私の授業運営のスタイルが学生に理解されるのに時間がかかり、かなり苦労する結果となつた。結局、私の教育理念と授業のスタイルに納得できないままに一年を終えた学生も多かつたようと思われる。また平成 26 年度は欠席が多く、当然その結果として学習成果が上がらなかつた学生が若干名みられ、前年度までに比べても不合格となる学生が増えてしまった。

二年目の科目については、試行錯誤が続いている。上述の通りこのクラスは、スペイン語の勉強をもっとやりたいという理系学部の学生と、何らかの理由で二年目の単位を落とした再履修の文系学部の学生が混ざる結果となっている。意欲も到達度も異なる学習者の集団を対象とした週一回の授業を、最適な形で続けていくことは容易ではない。できれば二年目終了までにヨーロッパ言語共通参照枠の A2 レベル上限程度までは能力を伸ばしたいという目標を持っているが、現状との差をどのように埋めていくかが課題である。

c. 学生授業評価とその評価に基づく改善

基礎スペイン語科目の学生授業評価は二つのクラスで大きく異なる結果となった。理学部・農学部対象クラスでは「進度」の項目を除き全般的に肯定的な評価が得られた。一方、医学部・歯学部・薬学部対象クラスでは「関連学習」の項目を除き、必ずしも肯定的とは言えない評価となった。前項でも触れたように当年度のこのクラスでは、私の教育理念と授業スタイルが十分に理解されなかつた嫌いがあり結果的に私もずいぶん苦労したし、受講学生たちも納得できない状況が続いたと思う。新年度は開講時により明確に私の教育理念と授業スタイルを受講希望者に伝え、納得のできる状態で受講が開始できるようにしたいと考えている。

展開スペイン語科目については試行錯誤が続いているが、概ね肯定的な評価を得た。特に文系学部の再履修者から「見捨てずに対応してくれて助かった」という内容のコメントがあったことが印象的である。少人数クラスでなければ個々の学生の置かれている状況に十分に対応することは難しいわけで、本学における外国語教育態勢について考えさせられた。

(9) 杉 浦 謙 介

a. 教養教育院特任教員としての授業の狙いと取り組み

(第1セメスター)

①共通科目（外国語（初修語（ドイツ語））） 「基礎ドイツ語Ⅰ」

工学部対象の1クラス（火曜日4時限・金曜日1時限に開講）と医学部・歯学部・薬学部対象の1クラス（火曜日3時限・金曜日3時限に開講）の計4コマを担当。教室での対面方式の授業とeラーニング方式の授業を組み合わせた「ブレンディッド・ラーニング方式」の授業によって、ドイツ語コミュニケーション能力をはじめ、総合的なドイツ語運用能力をつける。

(第2セメスター)

①共通科目（外国語（初修語（ドイツ語））） 「基礎ドイツ語Ⅱ」

工学部対象の1クラス（火曜日4時限・金曜日1時限に開講）と医学部・歯学部・薬学部対象の1クラス（火曜日3時限・金曜日3時限に開講）の計4コマを担当。教室での対面方式の授業とeラーニング方式の授業を組み合わせた「ブレンディッド・ラーニング方式」の授業によって、ドイツ語コミュニケーション能力をはじめ、総合的なドイツ語運用能力をつける。

(第3セメスター)

①共通科目（外国語（初修語（ドイツ語））） 「展開ドイツ語Ⅰ」

全学部対象の1クラス（木曜日5時限に開講）を担当。教室での対面方式の授業とeラーニング方式の授業を組み合わせた「ブレンディッド・ラーニング方式」の授業によって、初級から中級レベルのドイツ語の読む・聞く・書く・話す能力をつける。

(第4セメスター)

①共通科目（外国語（初修語（ドイツ語））） 「展開ドイツ語Ⅱ」

全学部対象の1クラス（木曜日5時限に開講）を担当。教室での対面方式の授業とeラーニング方式の授業を組み合わせた「ブレンディッド・ラーニング方式」の授業によって、中級レベルのドイツ語の読む・聞く・書く・話す能力をつける。

b. 各授業の実施状況

(第1セメスター)

①共通科目（外国語（初修語（ドイツ語））） 「基礎ドイツ語Ⅰ」

主教材として、国立七大学外国語CU委員会のプロジェクトで制作したドイツ語CALL教材『CALLドイツ語』（杉浦謙介も制作者の1人）を使用し、また、このプロジェクトで開発中のeラーニングシステムWebOCMで学習管理（学習履歴・テスト・掲示板など

を含む）した。21 ユニットの小テスト（音声つき Web テスト）をおこなった。また、毎回の授業で全員にドイツ語作文を e ラーニングシステムの掲示板経由で提出させた。一方、副教材として、ゲーム的要素ももった LAN 教材「Flash Cards」「Talk Now」（ともに Euro Talk 社製）も使用した。「Talk Now」には、ドイツ語音声で指定された体のパーツ画像を選び出して人造人間を作るゲームがあるが、このような基本語彙にかんしては、全員が聞いて分かるようになった。教材そして e ラーニングシステムとも Web 上にあるので、学生は教室外・講時外でも受講した。

(第 2 セメスター)

①共通科目（外国語（初修語（ドイツ語））） 「基礎ドイツ語 II」

主教材として、国立七大学外国語 CU 委員会のプロジェクトで制作したドイツ語 CALL 教材『CALL ドイツ語』（杉浦謙介も制作者の 1 人）を使用し、また、このプロジェクトで開発中の e ラーニングシステム WebOCM で学習管理（学習履歴・テスト・掲示板などを含む）した。15 ユニットの小テスト（音声つき Web テスト）をおこなった。また、毎回の授業で全員にドイツ語作文を e ラーニングシステムの掲示板経由で提出させた。一方、副教材として、ゲーム的要素ももった LAN 教材「Talk More」「World Talk」（ともに Euro Talk 社製）も使用した。「World Talk」には "Können Sie mir sagen, wie ich zum Flughafen komme? Geradeaus an den Verkehrsampeln vorbei. Beim Kreisverkehr biegen Sie dann nach links ab. Gehen Sie die Straße entlang. Die erste Abzweigung rechts. Da ist der Flughafen." 程度のドイツ語を通常のスピードで聞いて、目的地に行くゲームがあるが、この程度のドイツ語ならば、全員が聞いて反応できるようになった。教材そして e ラーニングシステムとも Web 上にあるので、学生は教室外・講時外でも受講した。

(第 3 セメスター)

①共通科目（外国語（初修語（ドイツ語））） 「展開ドイツ語 I」

東北大学の 2 年生レベルに合ったドイツ語のジョークを集めて PDF 教材を作った。テキストには MP3 音声ファイルをつけ、PDF 教材から音声ファイルを起動するようにリンクを設定した。テキストの解説は、すべて教材に記載した。学生は、授業中にノートを取りないで、ドイツ語のテキストや音声に集中できるようにした。テキストを日本語に訳させるのではなく、教員が用意した問題に答えることによって、テキストの内容についての理解が進むようにした（e ラーニングシステムの掲示板を利用）。テキストに出てくるドイツ語を応用してドイツ語作文させた（e ラーニングシステムの掲示板を利用）。次の時間の冒頭で、テキストの音読、および、音声を聞いての穴埋め問題（Web テスト）をさせた（学生は復習をしっかりやらなければならない）。一方、MP3 音声ファイルを独立して配布した。この音声ファイルには、メタデータとして文字テキストを付加し、iPod やスマートフォンで音声を聞きながらテキストを確認できるようにした。教材と学生の活

動はすべてデジタルベースである。

(第4セメスター)

①共通科目（外国語（初修語（ドイツ語））） 「展開ドイツ語Ⅱ」

ドイツ語圏の日常生活をテーマにした 100-120Words 程度のドイツ語文を集めて、東北大学の2年生レベルに合った PDF 教材を作った。テクストには MP3 音声ファイルをつけ、PDF 教材から音声ファイルを起動するようにリンクを設定した。テクストの解説は、すべて教材に記載した。学生は、授業中にノートを取らないで、ドイツ語のテクストや音声に集中できるようにした。テクストを読んだり聴いたりしながら、ドイツ語の文法形式や語形式に关心が向くように Focus on Form の教授法を取り入れ、テクストのリンクをクリックすると文法形式や語形式についての説明スライドショーが始まるように構成した。テクストを日本語に訳させるのではなく、教員が用意した問題に答えることによって、テクストの内容についての理解が進むようにした（e ラーニングシステムの掲示板を利用）。テクストに出てくるドイツ語を応用してドイツ語作文させた（e ラーニングシステムの掲示板を利用）。次の時間の冒頭で、テクストの音読、および、音声を聞いての穴埋め問題（Web テスト）をさせた（学生は復習をしっかりやらなければならない）。一方、MP3 音声ファイルを独立して配布した。この音声ファイルには、メタデータとして文字テクストを付加し、iPod やスマートフォンで音声を聞きながらテクストを確認できるようにした。教材と学生の活動はすべてデジタルベースである。

c. 学生授業評価とその評価に基づく改善

(第1セメスター)

①共通科目（外国語（初修語（ドイツ語））） 「基礎ドイツ語Ⅰ」

全体的に高い評価であった。自由記述欄では、授業は「分かりやすかった」や「楽しかった」という感想が多くあった。今後は、学生がドイツ語をよりいっそう理解するように授業を進める。CALL と e ラーニングを併用しているので学習量は非常に多い。理解できるように気をつけて授業を進める。

(第2セメスター)

①共通科目（外国語（初修語（ドイツ語））） 「基礎ドイツ語Ⅱ」

第1セメスターの「基礎ドイツ語Ⅰ」と同じように、全体的に高い評価であった。自由記述欄では、授業は「分かりやすかった」や「楽しかった」という感想が多くあった。今後は、学生がドイツ語をよりいっそう理解するように授業を進める。CALL と e ラーニングを併用しているので学習量は非常に多い。学生の負担にならないように気をつける。

(第3セメスター)

①共通科目（外国語（初修語（ドイツ語））） 「展開ドイツ語Ⅰ」

全体的にとても高い評価であった。自由記述欄でも「楽しかった」という感想が多かった。今後も、より充実した授業になるようにつとめる。デジタル教材とeラーニングを併用しているので学習量は非常に多い。学生の過度の負担にならないように気をつけて授業を進める。

(第4セメスター)

①共通科目（外国語（初修語（ドイツ語））） 「展開ドイツ語Ⅱ」

全体的にとても高い評価ではあった。自由記述欄でも「楽しかった」という感想が多かった。今後も、より充実した授業になるようにつとめる。

(10) 永富良一

a. 教養教育院特任教員としての授業の狙いと取り組み

体育実技は、保健体育科目の中で、スポーツや武道の実践を通じて、身体機能の効果的な活用、言語的情報の行動への変換、参加者同士の競争・協働・役割分担を体験するとともに、身体活動やスポーツに伴うリスクマネージメント体験および健康的な生活習慣の基本の一つとしての運動習慣形成につながる他の授業科目にはない重要な特徴を持つ。また失敗から学ぶことも重要な要素の一つである。

チームゲームの特長であるチームの勝利のための役割の分担とその理解に加えて、手以外の体の各部分を活用する身のこなしに瞬発力、持久力などの総合的な身体能力、状況の認知と予測に基づくすみやかな判断と意志決定を行う世界中でもっと多くの人を魅了している競技スポーツ、サッカーを教材に受講者が卒業後も生涯スポーツの一つとして選択できるような体験を提供している。

授業設計においては限られた時間の中で、受講者がチームの中での役割とその理解を深めることに主眼をおいている。必修クラスでは初心者と中上級者が混在するが、初心者と中上級者の違いは、果たすことができる役割の範囲と質の違いだけであり、基本的には初心者でも必ずチームにとってプラス要素になる。この点をガイダンスの時点から繰り返し強調し、全員が役割を果たした上でチームとしてのパフォーマンスを向上させていくことを目標とする。あわせて、研究領域における専門分野であるスポーツ科学に基づき、サッカーで要求される身体能力の向上にむけたトレーニングによる身体能力改善のメカニズムを体験学習の中で理解することも重要なポイントである。

b. 各授業の実施状況

①共通科目 「スポーツA」「スポーツB」 サッカー

スポーツAでは、授業開始時に初心者向けに6～7回にわたり毎回一つの基本技術・戦術に関する解説と練習を行う。中上級者には、自分の技術・戦術理解を確認する機会としレベルアップへのヒントを提供する。毎回基本技術・戦術練習後に第2回目の授業にお

いて編成したチームによるリーグ戦を実施する。スポーツ Bにおいては教職単位取得希望者向けに、技能練習の意図と組み立ておよびチームプレーへの動機付けなどについて理解を深める内容を加えている。またチームスポーツはサッカーのみならずコミュニケーションのゲームである。チーム結成時にはチームメートの名前を覚え、対戦相手には敬意を表することを習慣づける。

リーグ戦においては、1 チームの人数は、受講人数に応じて 7~12 名としている。後述する川内北キャンパスサッカー・ラグビー場では、いわゆるフルコートのサッカーコート（およそ 105×70m）は 1 面しか設定できないため、4 チーム以上になる時には 70m×40m を 2 面設定することにしている。6 チームのときには、上位・下位リーグを設定し、競技成績により上位と下位の入れ替えを行い、受講者の競技に対する意欲を喚起している。またチームへの貢献度が高い選手を優勝チームから毎回、互選・あるいは教員の判断で MVP として表彰し、さらに意欲を高める工夫をしている。ただし技量だけの判定では経験者に偏ってしまうので、チームへの貢献についての根拠を必ず解説することとしている。なおサッカー競技は 4 人以上の参加者がいれば、ルールや環境を調整することにより、ゲームを楽しむことができる。ルールや環境に制制約を設けることにより役割の理解や修得を促進させることが可能である。そこでリーグ戦のゲームについても意図を説明した上で制限をつけることがある。

実施場所は川内北キャンパスサッカー・ラグビー場および川内北キャンパスフットサルコートである。サッカー競技は、一般には落雷・熱中症など生命の危険さえなればどのような自然環境でも基本的には実施させるが、雨天あるいは冬季積雪時は安全性、および実技後の他の科目履修を考慮して、屋内（サブアリーナ棟剣道場など）で基礎体力づくりの身体トレーニング体験あるいはソフトバレーボールを使ったミニサッカーゲームを実施している。受講者人数はクラスによって開きがあるが、受講人数が少ない場合はフットサルコートにおいてフットサルあるいはそれに準じたミニサッカーゲームを実施している。また女子受講者が 6 名以上の場合は、男子とは別にプレーフィールドを準備し、ミニサッカーを実施している。女子は経験者が少ないとから、サッカーの「蹴る」・「止める」の基本技術の練習を加え、ゲームにおいてはサッカーのチームメートと連携しながら行う相手の裏をかく攻撃・守備の基本的考え方を進捗に応じ手 5~6 段階程度のプログラムで習熟を図っている。

②共通科目「身体と健康」　身体の文化と科学（オムニバス）

本授業の目的は「運動やスポーツ」を単に身体を動かす Physical Exercise として考えるのではなく、「運動やスポーツ」を取り巻く様々な心理・社会的要因、身体適応等を含めて理解することによって、「自己の身体」、「運動することの意味」、「スポーツの文化的意味」等への理解を高め、運動・スポーツの新たな側面に触れてもらうことである。複数の教官がそれぞれの専門の立場から、運動やスポーツに関する話題をとりあげ概説するオムニバス形式のコースである。永富の担当は「運動と栄養」「運動と健康」の 2 コマであ

り、スポーツにおける食事の基本的な役割を実例を交えて紹介し、学生スポーツにおいても有用な情報を提供している。また健康と運動の関連については、世界的に中高年の身体活動不足によるさまざまな障害や疾病を紹介し、健康的な生活習慣を考えるきっかけ作りを意図している。

③共通科目 Health Science (G30)

「体と健康」に相当する G30 の授業科目である。まず健康の概念を KJ 法を利用して整理を行い健康の現在の考え方を共有する。次に日本の医療制度・医療保険制度について簡単に解説を行い、受講者の出身国の医療制度との対比を行う。情報が無ければ、宿題として調査を行い、次の授業において比較検討を行い、それぞれの問題点、利点を議論する。以後は毎回、身近な健康問題、たとえば骨折・捻挫、火傷、皮膚外傷、口腔ケア、インフルエンザ、肥満症と動脈硬化、認知症、骨粗鬆症、ガン、健康障害と生活習慣（食事、身体活動、ストレスなど）をなど取り上げ、受講者のこれまでの考え方、理解を問い合わせながら、順次、病態、予防、治療について簡単な解説を行い、病態に基づいた予防や対処の仕方について実用的な内容を学習する。Discussion を主体とした授業である。知ってはいても考えたことがなかった自分の生活習慣について他者との比較における気づきを体験する。

④共通科目 「スポーツ A」セルフケア

必修科目であるスポーツ A を障害や外傷あるいは病気治療・療養などの身体的な理由により履修できない学生のために、課外の簡単な解説とともに、日常生活における食生活の調査・分析・評価をレポートすることを課題としている。食事分析は 3 日間で、公開されている食事分析 Web を紹介し、正しい食生活に関する栄養学の参考書を少なくとも一冊読んでもらった上で、総合評価する内容を実施している。学生にとっては自分の食生活を評価する貴重な機会となっている。

c. 学生授業評価とその評価に基づく改善

①共通科目 「スポーツ A」「スポーツ B」 サッカー

おおむね、楽しくかつ、回数が進行するとともに、体力的な向上を実感するコメントが多い。また初心者でも中上級者でも、レベルアップにつながるとともに、チームとしての成長を実感しているコメントを残しているので、授業の目標は完全ではないにしても達成できていると考えている。同じクラスの中で、「解説が長すぎる」と「もっと説明してほしい」というコメントが混在することがあり、バランスを保つ工夫をする必要があると考えている。TA を活用してできるだけ効率的に準備を進めるように努め、実習の時間をできるだけ長く確保できるよう努めている。スポーツは自分で準備して自分で片付けることも重要な要素であるが、時間確保との間のジレンマになっている。天候により、グランドが使用できないことがあり、それに対する不満が指摘されることがある。定期的にグランドの水はけをよくするための土壤改善を実施している。フットサルコートや屋内利用のメ

ニューについてさらに学生の受講意欲を高める工夫をしたい。

②共通科目「身体と健康」　身体の文化と科学

系統だっていないという批判を受けることがあるが、授業設計上、さまざまな専門分野の先生が、スポーツに関連する様々な話題を提供する授業であり、ガイダンス時にもその点を強調している。各担当教員が自らの位置付けを伝えるようにしている。

③共通科目「スポーツ A」セルフケア

受講者からは、自分の食生活を見直すことができるよい機会となったとのコメントが多い。カリキュラム編成および担当教員数から現在医療資格を有している永富が担当している。受講人数は少ないが、専任の医療有資格者を配置できれば、なおよいと考えている。

④共通科目 Health Science (G30)

受講人数が 30 名前後なので、interactive な授業形態をとっている。G30 受講生には「高校の延長のような one-way 授業」は歓迎されない。それぞれの考え方をお互い議論し、理解を深める授業方法は、担当教員にも常に新鮮である。毎回選択するトピックは、原則として教員が提案するが、学生からの提案もあり毎回刺激的である。学生のプレゼンテーション能力を磨く機会にもなる。

9. 『読書の年輪』の発行

教養教育への寄与の一環として、新入生が勉学を始める上で一つのガイドブック『読書の年輪－研究と講義への案内－』が、教養教育院から2010年4月に初めて刊行され入学時に新入生に配布された。それ以来、毎年版を重ね、2014年3月には第5版が刊行されるに至った。この小冊子は、教養教育院に属する総長特命教授が、各自の講義やゼミをめぐり、またそれらの背景にある研究生活の一端をも紹介するもので、それぞれが6冊の本を選んで紹介している。

2010年度版では、森田康夫、海老澤丕道、柳父匂近、秋葉征夫、海野道郎の5名が執筆した。2011年度版には、2010年4月から総長特命教授に就任した工藤昭彦教授が加わり、総勢6名によるものとなった（2011年3月には先の総長特命教授のうち3名が退職したが、以降のいずれの版にもこれら教授が旧版に執筆したものもそのまま掲載）。2011年度は、2011年3月11日の東日本大震災の発生により、新学期開始は例年より1ヶ月遅れの5月初めとなった。このことを考慮し、『読書の年輪』を入学前に入学者全員に送り届け、勉学意欲を高める一助とした。

2015年度版では、2014年4月から総長特命教授に新たに就任した吉野博教授が加わり、総勢11名の執筆者によるものとなった。2015年度も、入学前に『読書の年輪』を送り届けることとしたが、他の入学関係書類とまぎれたためか新入生の中には本冊子を知らない者もあり、配布方法については今後再検討を要するかもしれない。総ページ数は53頁となり、推薦書の総数は66冊に達した。

以下に2015年度版の目次項目を掲げておく。

刊行にあたって	花輪 公雄
教育・研究の舞台裏—私を支え・慰め・励ましてくれた本—	海野 道郎
読書の思い出	吉野 博
好之者不如樂之者	野家 啓一
乱読の履歴—そしてこれから推奨本—	工藤 昭彦
学問とは何か—大学は何を目指すべきか—	森田 康夫
自分の夢を社会の夢に—日本と世界の未来について考えよう—	福西 浩
すこし離れたところから眺めてみる	福地 肇
若い頃の洋書との出会い	前 忠彦
本との出会い—今、君たちだったら—	海老澤丕道
「大学時代でなくてもできること」ではなく	柳父 匂近
学ぶ本・議論する本・楽しむ本・鼻歌交じりの本…出会った本	秋葉 征夫
本誌の書籍紹介一覧	

10. 教養教育特別セミナーと総長特命教授合同講義の実施

教養教育院発足後しばらくの間、総長特命教授はそれぞれ独自の授業科目運営を行って、緊密な情報交換はするものの、協力する体制は作られなかつた。講演会あるいはシンポジウムの開催も検討したが、広く不特定の参加者を集めることも、学内外から協力を受けることも実現できる状況ではなく、時期を待っていた。その中で総長特命教授が協力して教養教育の充実に貢献できる催事を模索した結果、「合同講義」を行うこととなつた。平成 22 年のことである。

オムニバスで複数教員が講義する科目は全学教育では稀ではないが、1 回の授業時間内に専門分野の違う教員がひとつの大きなテーマで協力して講義を行うことはほとんどない。分野も違い感性も論法も全く異なる特命教授が、互いに補い合い、あるいは互いにぶつかり合う講義をするならば、学生諸君に対して大きな刺激をもたらす機会となろう。また、教員が互いの講義を聴くことにより、質疑応答を通じて新たに生まれるものが期待できよう。まず実現可能な形として、全員が講義を行っている総合科目の時間枠を使い、ある週に、3 人が短い講義を行い残りの 3 人が司会者あるいは討論者として参加して行うことを始めた。通常のシンポジウムのパネル討論と似ているが、フロアの学生からの質問や意見を促し、これにより大変興味深い学生と総長特命教授との対話が生まれたことは、大成功と言うべきである。教養科目の授業では双方向性を取り入れることが重要であり、このような形で実施できたことを高く評価したい。聴講する学生は基本的には、総長特命教授が担当する総合科目の履修者であるが、他の一般の学生や教員にも広く参加を呼びかけている。

さて、専門教育の重要性は新入生にとっても分かりやすいが、専門とは少し離れた教養教育の重要性は新入生にとっては分かり難く、後になって「あの時もっと勉強しておけば良かった」と後悔することが多いようである。そこで、平成 23 年度（2011 年度）は震災で開講時期が連休明けになったこともあり、高等教育開発推進センターと協力して、合同講義と概ね同じ態勢で、入学したばかりの新入生を対象にして「教養とは」をテーマとした「教養教育特別セミナー」を実施した。また後期には総合科目の時間に、総長特命教授全員が協力して、「震災」をテーマとした合同講義を 1 回実施し、この 2 つの講義の記録を「教養教育院セミナー報告」のタイトルで作成した。

平成 24 年度は、平成 23 年度に引き続き、教養教育特別セミナー「教養とは？東北大学生に考えて欲しいこと」と合同講義「3.11 からの出発～東北大学の教養教育が目指すもの」を行い、教養教育院セミナー報告を作成した。

平成 25 年度は前年度までの「教養教育特別セミナー」を継続発展させ、4 月 8 日（月）に萩ホールにおいて、「東北大学のチャレンジ～グローバル時代の教養教育」を実施した。また、10 月 22 日（火）にマルチメディア棟 M206 において総長特命教授合同講義「教養はなぜ必要か～就活に役立つ？」を行つた。

本年（平成 26 年）4 月には高等教育開発推進センター、教養教育院などが統合され高度教養教育・学生支援機構が設置されたが、教養教育特別セミナーは 4 月 7 日（月）13:30～15:30 に萩ホールにおいて、教養教育院と学務審議会及び高度教養教育・学生支援機構と協力して「東北大学

のチャレンジ～グローバル時代の教養改革」を実施した。また、7月15日（火）16:20～18:30にマルチメディア棟M206において総長特命教授合同講義「環境と人間」を行った。

本年度の教養教育特別セミナーと合同講義では、昨年度に続き討論の時間を長く取り、また出席した学生の意見や質問を回収・分類してその場で回答し、合同講義に参加した学生が総長特命教授の担当する総合科目の履修者であった場合には担当教授にレポートを提出させた。「平成26年度教養教育院セミナー報告」にアンケートの集計を記載したが、その内容から、学生諸君の感想ばかりではなく、どのように考えたかが分かる。広範な内容なので、合同講義のアンケートで出てきた質問・意見の一部を紹介すると、地球温暖化の原因は何か、住まい環境を改善するための工夫などに関する質問や意見が多く見られた。その他、環境などに関する社会的ジレンマに関するもの、原発と自然エネルギーに関するもの、自然と人間にに関するものなど様々であった。詳しいデータは平成26年度教養教育院セミナー報告に書いてあるので、興味のある方は参照されたい。

教養教育特別セミナーでの学生の意見のうち、教養教育とそこで身に付けるべき基礎的能力についての質問や意見は、多くの学生が、教養教育の重要性とどの様に努力をすべきかを自覚していないかった現れであり、当企画が有益であったことを示すものと考えられる。また、合同講義での環境に関する多様な質問からは、本学の学生の多くが地球環境について真剣に考え悩んでいることが分かる。

以下に、平成26年度教養教育院セミナー報告の目次を示す。

平成26年度 教養教育院セミナー報告

教養教育特別セミナー「東北大学のチャレンジ～グローバル時代の教養教育改革」 総長特命教授合同講義「環境と人間」

目 次

巻頭言（教養教育院長 花輪 公雄）

第Ⅰ部 教養教育特別セミナー「東北大学のチャレンジ～グローバル時代の教養教育改革」

1. 1. 教養教育特別セミナーの記録

- ・司会（高度教養教育・学生支援機構高等教育開発部門長 関内 隆）
- ・開会挨拶（東北大学総長 里見 進）
- ・セミナー
 - ・話題提供1「教養教育改革が目指すもの」 （花輪 公雄）
 - ・話題提供2「教養教育にのぞむもの—ジャーナリズムの現場から」（西川 善久）

- ・話題提供 3 「教養を哲学する」 (野家 啓一)
 - ・パネルディスカッション (森田康夫、工藤昭彦、話題提供者、参加者)
 - ・閉会挨拶 (農学研究科教授・前高等教育開発推進センター長 木島 明博)
1. 2. 特別セミナーに対する受講学生の評価

第Ⅱ部 総長特命教授合同講義「環境と人間」

- 2. 1. 総長特命教授合同講義事前配付資料
- 2. 2. 総長特命教授合同講義の記録
 - ・司会 (森田 康夫)
 - ・はじめに (高度教養教育・学生支援機構副機構長 羽田 貴史)
 - ・講義
 - ・「地球温暖化—それは人為的気候変化—」 (花輪 公雄)
 - ・「住いの環境と温暖化」 (吉野 博)
 - ・「環境問題の社会的ジレンマ」 (海野 道郎)
 - ・討論 (野家啓一、工藤昭彦、講義者、参加者)
 - ・おわりに (教養教育院長 花輪 公雄)
- 2. 3. 合同講義 受講生の質問・意見と教員からのコメント
- 2. 4. 合同講義に対する学生の評価

あとがき

資料

- 特別セミナー アンケートの主なコメント一覧
- 合同講義 受講生の質問・意見と教員からのコメント一覧

11. 会議の実施状況

教養教育院で定期的に開催される会議は、総長との懇談会（総長、院長、総長特命教授、教養教育特任教員が参加）、教養教育院懇談会（院長、総長特命教授、教養教育特任教員が参加）と教養教育院総長特命教授定例会（総長特命教授のみ）の3つである。以下、本年度のそれぞれの実施状況を記す。

(1) 総長との懇談会

第1回

日時：平成26年7月14日（月）10:00～11:00

場所：片平北門会館2階セリシール

懇談事項

- (1) クオーター制の導入等、学事歴について
- (2) 全学教育に係る授業内容・方法について

第2回

日時：平成27年3月9日（月）16:10～17:05

場所：本部第2会議室

懇談事項

- (1) 大学のキャンパス・教室などの環境に対する1年生の評価について
- (2) 東北大学学生のTOEFLスコアについて
- (3) 教養教育能力の評価と教養教育の充実について

(2) 教養教育院懇談会

第1回

日時：平成26年6月13日（金）14:00～15:00

場所：教育・学生支援部大会議室（管理棟3階）

懇談事項

- (1) 平成26年からの体制について
機構の規程の総長特命教授への適用について機構長より説明を受けた。

- (2) 総長との懇談について

日時：7月14日（月）10:00-11:00

場所：片平北門会館2階セリシール

で行われることが説明された。

- (3) その他

第2回

日時：平成26年9月29日（月）15：00～16：00

場所：教育・学生支援部大会議室（管理棟3階）

懇談事項

- (1) 総長との懇談について（報告）
- (2) その他

来年度の総長特命教授の雇用について説明を受けた。

第3回

日時：平成26年12月9日（火）14：58～16：15

場所：国際文化研究科会議室（国際文化研究科棟1階）

懇談事項

- (1) 総長との懇談会について
3月実施で日程調整中である
- (2) その他
 - ・全学教育科目に対する学生の授業態度について
 - ・次年度の教養教育院体制について
 - ・居室の移動について
 - ・機構編入による業務増加について
 - ・第4回の教養教育院懇談会は、議題がなければ省略する

(3) 教養教育院総長特命教授定例会

第1回

日時：平成26年4月8日（火）14：30～15：25

議題

- (1) 自己紹介
- (2) 前回（平成25年度第22回）定例会議事記録の確認
- (3) 教養教育特別セミナー（4月7日）の実施状況
- (4) 平成25年度「教養教育院セミナー報告」について
- (5) 平成25年度「教養教育院年報」について
- (6) 平成26年度の役割分担
- (7) 平成26年度合同講義について
- (8) その他

第 2 回

平成 26 年 4 月 22 日 (火) 13:30~14:20

議題

- (1) 第 1 回定例会議事記録の確認
- (2) 高度教養教育・学生支援機構と学際融合教育推進センターについて
- (3) 教養教育特別セミナーの報告書作成について
- (4) 平成 25 年度と平成 26 年度の『年報』について
- (5) 平成 26 年度合同講義について
- (6) 役割分担の確認
- (7) 懇親会について
- (8) その他

第 3 回

日時：平成 26 年 5 月 7 日 (水) 15:00~15:50

議題

- (1) 第 2 回定例会議事記録の確認
- (2) 教養教育特別セミナーのアンケート集計について
- (3) 平成 26 年度合同講義について
- (4) 懇親会について
- (5) 平成 27 年度教養教育特別セミナーについて
- (6) その他

第 4 回

日時：平成 26 年 5 月 21 日 (水) 15:00~16:05

議題

- (1) 第 3 回定例会議事記録の確認
- (2) 平成 26 年度『教養教育特別セミナー報告書』について
- (3) 平成 25 年度『教養教育特別セミナー報告書』のについて
- (4) 平成 26 年度総長特命教授合同講義について
- (5) 部門紹介 HP の執筆について
- (6) 『読書の年輪』在庫保管数について
- (7) 図書館共同購入雑誌の選定について
- (8) 学務審議会の報告
- (9) その他

第 5 回

日時：平成 26 年 6 月 3 日（火）11：58～12：58

議題

- (1) 第 4 回定例会議事記録の確認
- (2) 平成 26 年度『教養教育特別セミナー報告書』について
- (3) 平成 25 年度『教養教育特別セミナー報告書』の作成について
- (4) 平成 26 年度総長特命教授合同講義について
- (5) 第 1 回教養教育院懇談会について
- (6) HP における教員紹介
- (7) その他

第 6 回

日時：平成 26 年 6 月 27 日（金）13：30～14：45

議題

- (1) 第 5 回定例会議事記録の確認
- (2) 平成 26 年度『教養教育特別セミナー報告書』について
- (3) 平成 25 年度『教養教育特別セミナー報告書』の作成について
- (4) 第 1 回教養教育院懇談会の報告
- (5) 基幹科目担当教員会議（6 月 19 日（木））の報告
- (6) 高度教養教育・学生支援機構第 2 回学際融合教育推進センター会議の報告
- (7) 平成 26 年度総長特命教授合同講義について
- (8) 川北合同棟 1 階モニターで写す画像の提供について
- (9) 機構パンフレットの希望配付先について
- (10) HP 記載の教養教育特任教員の説明部分についての確認
- (11) 平成 26 年度学生による授業評価奇数セメスターの実施について
- (12) 第 1 回総長との懇談会について
- (13) 計画的年次有給休暇及び夏季休暇の取得について
- (14) その他

第 7 回

日時：平成 26 年 7 月 9 日（水）15：00～16：00

議題

- (1) 第 6 回定例会議事記録の確認
- (2) 平成 25 年度『教養教育特別セミナー報告書』について
- (3) 平成 26 年度『教養教育特別セミナー報告書』の作成について
- (4) 平成 26 年度総長特命教授合同講義について
- (5) 第 1 回総長との懇談会について

(6) 平成 26 年度『年報』の作成について

(7) その他

第 8 回

日時：平成 26 年 7 月 29 日（火）15：00～15：45

議題

(1) 第 7 回定例会議事記録の確認

(2) 平成 26 年度合同講義について

(3) 平成 26 年度『年報』について

(4) 2015 年『読書の年輪』について

(5) その他

第 9 回

日時：平成 26 年 10 月 7 日（火）12：00～13：28

議題

(1) 第 8 回定例会議事記録の確認

(2) 学務審議会委員の交代について

(3) 第 2 回教養教育院懇談会について

(4) 学務審議会（9 月 8 日開催）について

(5) 高度教養教育・学生支援機構教授会議（9 月 18 日開催）について

(6) 紀要編集委員会（9 月 26 日開催）について

(7) 平成 26 年度合同講義のまとめについて

(8) 平成 26 年度版『年報』について

(9) 2015 年度『読書の年輪』について

(10) その他

第 10 回

日時：平成 26 年 10 月 28 日（火）13：30～14：15

議題

(1) 第 9 回定例会議事記録の確認

(2) 2015 年版『読書の年輪』について

(3) 平成 26 年度版『年報』について

(4) 平成 26 年度合同講義のまとめについて

(5) 教養教育院ホームページについて

(6) その他

第 11 回

日時：平成 26 年 11 月 11 日（火）10：45～11：30

議題

- (1) 第 10 回定例会議事記録の確認
- (2) 2015 年版『読書の年輪』について
- (3) 平成 26 年度『年報』について
- (4) 平成 26 年度合同講義のまとめについて
- (5) 教養教育院ホームページについて
- (6) その他

第 12 回

日時：平成 26 年 11 月 25 日（火）12：00～13：30

議題

- (1) 第 11 回定例会議事記録の確認
- (2) 2015 年版『読書の年輪』について
- (3) 平成 26 年度版『年報』について
- (4) 平成 26 年度合同講義のまとめについて
- (5) 教養教育院ホームページについて
- (6) 第 3 回教養教育院懇談会について
- (7) 来年度の教養教育特別セミナーについて
- (8) キャンパスの環境に関する学生のレポート
- (9) 教授会議の報告
- (10) 忘年会について

第 13 回

日時：平成 26 年 12 月 9 日（火）13：30～14：15

議題

- (1) 第 12 回定例会議事記録の確認
- (2) 平成 27 年度教養教育特別セミナーについて
- (3) 2015 年版『読書の年輪』について
- (4) 平成 26 年度合同講義のまとめについて
- (5) 平成 26 年度『年報』について
- (6) 教養教育院懇談会について
- (7) その他

第 14 回

日時：平成 27 年 1 月 13 日（火）12：00～13：20

議題

- (1) 第 13 回総長特命教授定例会議事記録の確認
- (2) 平成 27 年度教養教育特別セミナーについて
- (3) 2015 年度版『読書の年輪』について
- (4) 平成 26 年度合同講義のまとめについて
- (5) 平成 26 年度『年報』について
- (6) 教授会議および基幹科目担当教員会議（1 月 22 日）について
- (7) 学生との懇談会（2 月 19 日）について
- (8) その他

第 15 回

日時：平成 27 年 1 月 28 日（水）10：28～11：20

議題

- (1) 第 14 回総長特命教授定例会議事記録の確認
- (2) 平成 27 年度教養教育特別セミナーについて
- (3) 『2015 年東北大学全学教育ガイド』について
- (4) 2015 年度版『読書の年輪』について
- (5) 平成 26 年度合同講義のまとめについて
- (6) 平成 26 年度『年報』について
- (7) 教授会議および基幹科目担当教員会議（1 月 22 日）について
- (8) 大学のキャンパス・教室などの環境に対する 1 年生の評価について
- (9) その他

第 16 回

日時：平成 27 年 2 月 10 日（火）12：00～13：00

議題

- (1) 第 15 回定例会議事記録の確認
- (2) 平成 27 年度「教養教育特別セミナー」について
- (3) 『2015 年 東北大学 全学教育ガイド』について
- (4) 2015 年版『読書の年輪』について
- (5) 平成 26 年度版『年報』について
- (6) 平成 26 年度合同講義のまとめについて
- (7) 科目ナンバリングについて基幹科目委員会委員長からの問い合わせ
- (8) 「大学のキャンパス・教室などの環境に対する 1 年生の評価」について
- (9) 紀要編集委員会からの報告

(10) その他

第 17 回

日時：平成 27 年 2 月 23 日（月）13：30～15：00

議題

- (1) 第 16 回定例会の議事記録の確認
- (2) 平成 27 年度教養教育特別セミナーについて
- (3) 平成 26 年度版『年報』について
- (4) 平成 26 年度合同講義のまとめについて
- (5) 来年度の講義予定について
- (6) 学生との懇談会について
- (7) 第 2 回総長との懇談会について
- (8) 歓送迎会について
- (9) その他

第 18 回

日時：平成 27 年 3 月 9 日（月）13：30～14：20

議題

- (1) 第 17 回定例会議事記録の確認
- (2) 平成 27 年度「教養教育特別セミナー」について
- (3) 平成 26 年度版『年報』について
- (4) 平成 26 年度合同講義のまとめについて
- (5) 第 2 回総長との懇談会について
- (6) 『読書の年輪』の図書館配布について
- (7) 第 9 回「全学教育 FD」について
- (8) 新年度の定例会開催日程について
- (9) 新年度の役割分担について
- (10) 歓送迎会について
- (11) その他

12. 教養教育院活動（平成26年度）の自己評価と今後の課題

本年度で教養教育院が発足して7年目になり、里見進東北大学総長と花輪公雄教養教育院院長の下では3年目となった。前年度の総長特命教授7名のうち4名が退職、残った3名が今年度も再度雇用され、そこに4月から2名が新たに加わって、総長特命教授は5名となった。また、前年度の教養教育特任教員5名が全員継続となった。その他、総長特命教授の研究室のある国際文化研究科の建物が改修になり、平成25年10月に総長特命教授のうち4名はプレバブ棟に引っ越ししたが、これに合わせて「東北大学教養教育院」の看板が取り付けられた。教養教育院の看板については、諸般の事情で実現していなかったが、漸く念願がかなった。

これまで教養教育院の発展にご尽力いただいた4名の総長特命教授が退職されたことは惜しまれておりあることではあるが、新たなメンバー2名が加わり、里見総長と花輪院長が教養教育特別セミナーに参加されるなど、教養教育充実の方針がより明確になった。教養教育院自体の制度および学内における運営の上で特筆すべきこととして、本年4月から新たに「高度教養教育・学生支援機構」が発足し、教養教育院がその中に位置づけられたことが挙げられる。ただし、教養教育院の設置目的と活動方針については大きな変化はなく、前年度までに開始したこととを継承し、充実・発展させることができた。

本院の設置目的としては、教養教育の実施と支援を通じて東北大学の優れた人材輩出に貢献することが定められているものの、これを遂行するための具体的な方法を書いた規程は存在しない。教養教育の実施にあたっては、総長特命教授は学務審議会教務委員会の管理の下で全学教育の授業担当を行い、特任教員はそれぞれに全学教育の充実に資する活動を行ってきたが、これらに関しては本年報の別の章に記した。

教養教育の支援に関わる活動としては、学務審議会の実施するFDや授業担当教員会議への参加と報告ならびに意見提出、および大学教員準備プログラム(PFFP)と新任教員プログラム(NFP)への先達教員としての支援活動などが挙げられる。ただし、これらは特に教養教育院であるために行っている業務とは言い難い。これら以外にも、教養教育院の組織としての活動を6年間にわたって模索し試行し、徐々に広げてきた。それらのうち実施されたものについては本報告書の章としても取り上げたが、以下でも簡単に俯瞰し、改めて評価と課題を述べる。その上で未だに着手されていないものについては、まとめて課題として記述することとする。

1. 教養講義の充実への試み：合同講義とカリキュラム

これらについては、本報告書のそれぞれの章にどの様に始まり、本年度はどうしたかを記したが、ここではその評価や検討課題などについて記述する。

合同講義には総長特命教授の総合科目を受講する学生が出席することになっており、総長特命教授の数が増えたこともあって、合同講義は充実したものとなった。総合科目受講者でない学生の参加が増えることが望ましいが、総合科目の時間帯が5講時でなく、もっと便利な時間帯に設定できれば参加者数の増加が期待できる。

合同講義での討論の活発さから学生の積極的な姿勢が窺えるが、更に進めて、学生の代表者をパネリストとして参加させることもできるのではないか？

その他、教養教育のさらなる充実のため、合同講義の他にも従来とは異なる形式の授業を行うことを検討しても良い時期であろう。

2. 教養教育への意識普及のための活動：読書の年輪・教養教育特別セミナー・合同講義

読書の年輪・教養教育特別セミナー・総長特命教授合同講義については、本報告書の別章にどの様に始まりどの様に実施したかを記した。合同講義については、本章の1に評価と課題を記した。

さて、昔から教養と関連付けられてきたものに読書がある。よく本を読む学生がいることも確かだが、一般に現在の学生たちは余り読書をしない。『読書の年輪』については、学生に本を読ませることがポイントだと思われる。学生への配布時期を早めたことにより、学生はかなり『読書の年輪』に目を通したようであるが、入学前後という学生にとって忙しい時期でもあり、さらなる充実は簡単ではないよう思われる。今後もオリエンテーションや担当する授業での宣伝などにより、学生が『読書の年輪』を読むよう働きかけて行きたい。

今年度の教養教育特別セミナーは、多数の学生の参加を期待して川内萩ホールを使って行った。里見総長が挨拶をされ、工学部のオリエンテーションと時間的に連動していたため、セミナーへの参加者は前年度に比べ大幅に増加した。今年度は工学部オリエンテーションという援軍（？）があったため、多数の参加者が得られたが、来年度についてもより多くの学生が参加できるよう努めたい。教養教育特別セミナーは学生の反応が良いので、今後セミナー参加が当たり前のことになることを期待している。

3. ホームページ（Web サイト）

教養教育院ホームページ（Web サイト）は平成 24 年度に全面的なリニューアルが行われ、平成 25 年度・26 年度は掲載するコンテンツの充実を図った。今年度新たに掲載された主なコンテンツは、「ニュース」以外には以下のとおりである。

①教養教育院院長花輪教授挨拶

②行事・イベント

平成 26 年度教養教育特別セミナー「東北大学のチャレンジ～グローバル時代の教養教育改革」

平成 26 年度総長特命教授合同講義「環境と人間」

③刊行物

『読書の年輪—研究と講義への案内—2015』

『平成 25 年度東北大学教養教育院年報』

『平成 25 年度教養教育院セミナー報告』

④教員の語る「教養教育」とは

平成 26 年度総長特命教授合同講義「環境と人間」事前・当日配付資料

⑤学生の声

教養教育特別セミナー [質問 6] 最も興味深かったこと・[質問 7] 東北大学の教育に期待すること・その他のコメント

4. (ホームページ以外の) 広報活動：年報等

教養教育院設置初年度は中間報告を年度内に刊行、以後は年報を年度終了後に刊行してきた。なるべく忠実に記録を残すことと、学内や学外の関連する諸組織や人々に対して教養教育院の存在を広報し、出来れば今後の参考となる意見等を得ることが目的である。教養教育院は、学内の部局やセンター等のようには定例的な評価を受ける仕組みがないことから、年報は外部からコメントや批評を得るための資料でもある。今後は、広報用に別途読みやすいものを発行するとか、評価を受ける仕組みを整備するとか、考察を加えて後に役立つようなものを作成するなど、さらに充実させて行きたい。

5. 教養教育特任教員が主導する活動

外国語教育については本報告書巻末の参考資料（曙光第 37 号からの転載『二項対立的な外国語教育観を超えて』浅川照夫教授）を参照していただき、ここではスポーツ科学について記す。

スポーツ科学教育の目的は以下の通りである。

- ①生涯にわたる心身の健康を維持するための知識・技術を習得する。
- ②他者とのコミュニケーションを必然的に持たせる。
- ③リーダーシップを育成する。
- ④本学の「教養教育の理念」の重要性を「武道の理念」を通して学ぶ。
- ⑤日本古来の伝統を知ることで国際比較観点を持たせる。

東北大学ではほぼ全学部でスポーツ A が 1 単位必修であり、入学後 2 年以内に履修する。またスポーツ B も選択科目として開講され、2 年生以上が受講することができる。全学教育の中でスポーツ科学教育は共通科目に分類される。共通科目の目的は「現代人として不可欠な能力と基本技能を養う」ことであり、具体的には社会的倫理性、主体的判断力・行動力、コミュニケーション能力、国際的コミュニケーション能力、他文化理解力の獲得、心身の健康の維持・増進が目標として掲げられている。授業におけるスポーツや武道の授業によりこれらの能力が改善することが望ましいが、実際には達成することはできない。しかしスポーツや武道を続けることによって上記の目標が達成できることに気づくことができる。その教育効果は大きいと考えられる。

6. 未着手の検討課題

教養教育院発足後 1 年を経過した段階で、それまで手探りで進めてきた活動を振り返り、平成 20 年度の年報の中で様々な検討課題を提示した。提示された検討課題では、解決され

たものもあるが、教養教育院の責務であるか否か判然としないものや、その後の年報において示されたものを含めて、現在もまだ検討課題は多数存在する。

授業教材の作成と整備については、平成 21 年度に秘書が配置されたこと、授業科目ごとに配置される TA（ティーチングアシスタント）が教材作成などを行って教育効果の向上に寄与したこと、などはその成果として挙げられる。

学生の学習意欲に応える活動として、平成 22 年度に特任教員である水原克敏教授により SLA の制度が作られたが、年を経る毎に充実し、25 年度には高等教育開発推進センターに SLA サポート室が作られ、SLA サポート室から学生の自主的学習・研究活動への支援が行われた。なお、26 年度から「高度教養教育・学生支援機構」が発足したことに伴い、その中に「学習支援センター」が設けられ、SLA の活動をバックアップすることとなった。こうした学習支援活動は着実に全学教育段階の学生に定着してきている。

しかし、学生の間にある要望や意見のくみ上げと学生の意識の把握に関しては、教養教育院のなすべき役割はいまのところ明確ではない。

総長特命教授・特任教員は、その他の授業科目を担当する学内の多くの全学教育担当教員と比較して、講義室において接触する学生の数が非常に多い。学生の挙動や意識はある程度よく見えている。しかし、系統的に学生の意見を蒐集する、或いは学生に積極的に意見を発信させる、などの仕組みはない。授業後に提出させるミニッツペーパーやレポートからくみ取ることが可能であるとしても、そのために必要な時間的余裕が十分には与えられていないことは残念である。本年度の総長特命教授合同講義で集めた学生の意見は、その意味でも貴重な資料である。

全学の教養教育担当教員との連携・協力に関して未着手の課題としては、授業実施事例に基づく情報発信、インターネットなどによる授業公開、何らかの広報手段による授業関係情報の共有などが挙げられる。基幹科目担当教員のマーリングリストが学務審議会科目委員会の主導で作られているが、あまり活用されていないことは残念である。情報の交換・共有を始めるためのトリガーがかからないのが現状であろう。

以上に記した課題の解決には、教員自身が調査し検討を重ねることが必要である。それに限らず教養教育院としての活動など、授業以外に総長特命教授に期待されて良いと考えられる業務が存在するが、そのような業務に関わる時間的余裕は実際のところない。これには、担当するコマ数と受講学生数の多さが大きな要因となっている。例えば、平成 23 年度ある総長特命教授は 2 セメスターに 5 コマを担当し、合計で約 700 人の受講生を持っていた。毎回のミニッツペーパーの整理や、毎学期に加除修正する講義内容の準備など、日常の忙しさはかなりのものである。このような状況は、担当教員による授業管理の改善に加え、制度としての解決も必要ではないかと思われる。

教養教育院の活動をさらに活発化するためには出来るだけ早い時期に施設を整備し、まとまった場所に教員の研究室と共通室を設け、教員間の連携がとりやすく、学生から見て質問などに来やすい環境を実現することが望まれる。

管理運営に関しては、総長特命教授はその責務から外れるものであるが、発言や提言をす

るべき機会があれば活かすことが望まれる。院長を通じて学内に意見を述べたり、総長懇談会の席で総長に直接意見を伝えたりすることは可能であるが、大学として教養教育改革を進める場合には、貢献を求められて然るべきである。これに関して、学内規程で教養教育院について定められていることが曖昧であることが、本学としての課題になっていることを付言したい。必要な教員の確保、支援体制、施設、制度などの設計・整備が現在なお急務であることを述べて結びとする。

おわりに

平成 26 年度の教養教育院では、総長特命教授として新たに吉野博教授が加わったほか、以前総長特命教授を勤めていた海野道郎教授が総長特命教授として復帰されたが、海老澤丕道教授、前忠彦教授、福西浩教授、福地肇教授が退職され、総長特命教授は総勢 5 名となった。教養教育特任教員の 5 名は全員が留任し、教養教育院全体では計 10 名となった。教養教育院の事務は、昨年度に引き続き、鈴木かおる事務補佐員のお世話になっている。

平成 26 年 4 月には教養教育院を含む多くの組織が統合され、新たに高度教養教育・学生支援機構が設置された。これにより教養教育院のメンバーも機構の仕事を分担することになり、機構の教授会議などに出席することになった。昨年度に引き続き、野家教授を除く総長特命教授はプレハブ棟に研究室を持っているが、年度途中で国際文化研究科の人達が元の建物に戻り、その代わりに新棟工事に伴う代替措置として教務課が引っ越ししてきた。このため、プレバブ棟で学生の姿を見ることが多くなった。

教養教育院が主催する二大行事である教養教育特別セミナーと総長特命教授合同講義は例年通り成功裏に行うことができた。本年度も前年度に引き続き、教養教育特別セミナーには外部からのゲストスピーカーをお迎えし、総長の挨拶を頂くことができた。合同講義では、花輪院長と吉野教授が気候変動に関する政府間パネル (IPCC) のメンバーであったことを活かし、「環境と人間」をテーマとし、花輪院長・吉野教授・海野教授に話題提供をお願いした。これ以外の、通常の授業もとどろきなく実施された。

教養教育院が機構の一部に位置づけられたことで、教養教育院の構成員が大学の運営に関わる道ができたが、それ以外にも、総長との懇談会や教養教育院懇談会でも教養教育と学生支援のための提案を行っている。今後は教養教育院の果たす役割が更に大きく明確になることが予想される。

これまで以上に、学内外の皆様の御支援と御鞭撻をお願いしたい。

(参考資料)

講義「自然と環境：住いと人と環境」レポートより

吉野 博 大学のキャンパス・教室などの環境に対する1年生の評価

東北大学全学教育広報「曙光」からの転載

花輪 公雄	2014年4月号（第37号）
浅川 照夫	2014年4月号（第37号）
海野 道郎	2014年10月号（第38号）

大学のキャンパス・教室などの環境に対する1年生の評価

総長特命教授 吉野 博

1. 学生による評価についての経緯

「自然と環境：住まい人と環境」の講義の一環として、大学のキャンパス・教室などの環境に関する良い点、悪い点についてまとめることを宿題として課し、A4用紙で1~3枚のレポートを提出させた。2セメスターの学生約50人である。実施時期は平成26年10月である。

大学の運営においても参考となる指摘が数多く見られたので、それらを概要としてまとめ、問題点については対策案を示した。

2. 学生による評価の概要

1) 外部環境

自然に囲まれ、緑豊かであり、勉学・研究に集中できること、正門前の広場が広く憩いの場になっていること、ベンチが多いことなどが良い点として評価されている。

一方では、山中のキャンパスなので、花粉が舞い始めるとかなり酷い被害がでる、花粉症にとっては気が休まらないとの指摘もみられた。

2) 教室

窓が大きく、採光・換気が得やすいこと、照明の明るさが良く調整できる点、エアコンが設置され温湿度が調整できる、静かであることなどが良い点として評価されている。

その一方で、暖冷房時の環境についての不満が多い。暖房・冷房の効き過ぎ、場所による効き方の違い、梅雨時の蒸し暑さ、カビの臭い、乾燥するなどの指摘がみられる。特に夏期はB棟の教室が問題という指摘もある。換気が不十分との不満も多い。上の階の音、廊下の音が聞こえてくるという問題、教室の廊下の照明が点滅するときスクリーンに影響し、見えづらいことがある、スクリーン位置が悪いという具体的な指摘もある。

3) 大講義室

暖房・冷房・換気に関する問題点の指摘が多い。暖房時の効き過ぎ、冷房時でプロジェクターを使っている時の暑さ、換気が悪く空気がこもっていて不快との指摘がかなり多くみられる。

4) 自習室、談話室

自習室が静かで暖かく明るいこと、談話室が整備されていることが評価されている。冷房の効き過ぎとの指摘もある。

5) 講義棟

開放感があること、渡り廊下で一体となっていること、エレベーターがあり障害者対応がされていることが評価されている。

一方、サークルの活動音が講義の妨害となっている、雨のときに床が滑る、M棟のCPによる空気の汚れや夏の暑さ、トイレの汚れなどの指摘がみられる。

6) 厚生会館、食堂

窓が大きく、明るく換気がしやすい、照明が明るい、食堂が沢山あり、メニューも豊富である、メガネ屋、床屋があることなどが評価されている。

問題点として最も多かった指摘は、会館前で水たまりができる、排水設備が機能しないといった水はけが悪いことである。また、入り口近くや奥の席での暖冷房の利きが不十分であること、トイレの汚れ、狭さの指摘がみられる。昼食時の待ち時間についての指摘も多かった。購買の搬入出のトラックが、学生の往来の多い時間とぶつかるときは危険との指摘もみられた。

7) 体育館

体育館の環境問題についての具体的な指摘が見られた。バレー場のときに天井照明がまぶしい、床の仕上げがすべりこんだときに摩擦でやけどしてしまう材質となっていること、また、片平体育館の方が、ラインが消えかかっている、寒いなど悪い点がめだつとの指摘があった。体育館の更衣室のロッカーの鍵がかからないことがあり、貴重品の盗難があったことを教員から聞いたという指摘もあった。

8) 図書館

図書館は静かで空調があり快適である、特に自習室は集中できるとの良い評価がある一方で、夏の暑さの指摘もみられた。

9) 萩ホール

音響の良い点が評価されている。

10) 全般、その他

サークル棟が民家から離れていて壁で囲まれているので夜でも練習ができる、屋根つきの駐輪スペースがある、パソコンが豊富に用意されている、全面禁煙、分別できるゴミ箱が用意されている、人感センサーで照明が制御されている、などが良い点として評価されている。

問題点としては、大雨のときの水たまりの問題の指摘が多い。街灯が少ないために夜が暗いとの指摘もある。駐輪場の不足、トイレの汚れ、外壁のカビ、坂や段差が多いこと、生活に必要な施設が周囲に少ないことの不満、バス通学の不便さなども悪い点として指摘された。

3. 対策案

1) 教室における空調時の環境問題

暖房時の快適性に対する不満が多いが、原因は次の通りである。建物の断熱・気密性能が必ずしも十分でないために熱損失が大きく、そのことから上下温度分布が形成されやすくなり、冷輻射^注による不快感が生じる。また、天井から温風が吹き出されるシステムであるため、暖房時は上下温度分布が生じやすく水平方向にも分布ができやすい。更に、運転開始の直後は、建物が冷えているのでやはり温度分布や冷輻射が生じやすい。

ただし、全く同じ環境の下でも人によって快適感は異なるので、不満をゼロにすることは不可能である。

対策としては現在の空調システムの特徴を把握して、最高の状態で運転することが必要である。現在の空調システムは、暖房・冷房の機能の他に、換気の機能、湿度調整の機能、天井付近の空気を床に向けて吹き付ける循環機能が設置されている。これらを適切に利用することが大切である。冷房の場合には、温度の分布は生じにくいので、冷房の効きすぎに注意することが第一であろう。

具体的な制御の方法に関しては専門技術者からのアドバイスが望ましいが、基本的なこととしては、換気は朝から夜まで連続的に運転する。暖房・冷房運転は教室が使用される 30 分前から適正な温度で運転を開始する。建物が温まるまでは上下の温度分布が大きいことや冷輻射があつて寒いなどの問題が生じるからである。

また、廊下の温度が外気に影響受けやすいので、玄関の扉が開放されたままにならないような対策を検討する。

注：冷輻射とは、窓ガラス、壁、床、天井の表面の温度が低いときに、人体から輻射による熱損失が大きくなることをいう。その場合には、熱的に不快感が生ずる。

2) 教室のカビ臭さ

教室のカビの臭いは、空調換気設備のフィルターの汚れが原因である。空調換気設備の維持管理は徹底的に実施することが必要である。

3) トイレの汚れ・臭い、床の汚れなど

トイレの汚れなどは、メンテナンスを徹底することで解決できるであろう。ただし、トイレの臭いについては、換気設備について点検の必要がある。

4) 隣室などからの騒音

隣の教室からの音の問題、上の階からの音の問題、サークル室からの音などについては、それが問題となっていることを関係者に周知し、使い方などに配慮することで問題は軽減できる。

5) 厚生会館前などの水たまり

大雨のときに水たまりができる問題は、排水に能力が不足しているからであり、早急に設備の改修が必要であろう。

6) 購買のトラック搬入時の安全確保

トラック搬入が学生の往来の多い時間とぶつかるときは危険であるとの指摘に対しては、搬入時間を制限することで対応が可能であろう。

7) 維持管理のための組織の必要性

施設・設備を利用して快適なキャンパス環境を実現するためには、それらの機能を正しく知った上で適切に使用すること、必要な維持管理は徹底して実施すること、問題がないかどうか常にチェックし、問題があればその解決に当たることが必要である。



新しい教養教育の構築と学生支援の充実に向けて —「高度教養教育・学生支援機構」の設置—

東北大学理事（教育・学生支援・教育国際交流担当）花 輪 公 雄

2014年4月、本学は分散設置されていた五つの教育組織を統廃合し、新たに「高度教養教育・学生支援機構」を発足させました。本機構を中心に「高度教養教育」を構築実践するとともに、学生支援の一層の充実を図るためです。さらにこの組織整備により、教養教育のみならず学部や大学院で行っている専門教育をも含む、本学の教育全体の改革まで導くことを目指しています。

はじめに

本学は1993年3月をもって教養部を廃止しました。教養部は、本学の学士課程に入学した学生全員が2年間所属する組織であり、「一般教養科目」を学ぶところでした。この教養部の廃止により、専門科目が初年次まで楔形に降りてくることとなりましたが、やはり教養を涵養する授業科目は必要であるということで、「全学教育（『全学』部生を対象とした『教育』という意味）」が開始されることとなりました。

この全学教育を世話する組織として、本学は1993年4月に「大学教育研究センター」を設置しました。そして2004年10月には、このセンターを拡充・改組し、「高等教育開発推進センター」（高教センター）を設置しました。高教センターでは発足以来、他大学に先駆けてユニークな授業科目開発を行ってきました。例えば、現在の「基礎ゼミ」や「自然科学総合実験」、あるいは「文系のための自然科学総合実験」などはその成果の一部です。

一方でこの間、本学は文部科学省などによる教育に関する競争的資金や独自の経費で、幾つかの新しい教育組織を整備してきました。例えば、通称グローバル30と呼ばれる事業では「国際教育院」を、イノベーション創出若手研究人材養成事業では「高度イノベーション博士人財育成センター」を設置しました。さらに、本学独自の経費で、教育と研究に実績のある名誉教授の先生方を総長特別教授として任用し、全学教育を担ってもらうための「教養教育院」も設置してきました。

このような中で、現代に相応しい教養教育と学生支援のあり方、さらには実施体制をどのようにするのかの検討を、正式には2013年5月に「全学的教育・学生支援体制検討ワーキング・グループ」を設置して行ってきました。その結果、上記の組織や「国際交流センター」を統廃合し、「高度教養教育・学生支援機構」（以下、新機構と略記）を発足することといたしました。本稿では新機構設立の背景とその狙いについて、概要を述べることにします。新機構の組織形態やその中に設置した多くのセンター群の所掌、さらには新たな学生支援の具体的な紹介は、本稿の字数の制限のこともあり、別の機会に行うことといたします。

強まる大学教育改革への期待

人材育成への期待

中国や韓国を含む国々が急速に経済発展を遂げる一方で、日本の経済は長く低迷してきました。このような中、資源小国の日本が国際社会の中で一定レベルの経済活動を維持し、また存在感を示して敬意を払われる国となるためには、人材こそが日本の資源であるとの考え方で、今まで以上に大学には、多数の優れた人材を輩出することが期待されています。ここで優れた人材とは、閉塞した状況に革新をもたらして欲しい人材と言う意味で「イノベーション人材」、あるいは、多くの企業が生産活動を海外で展開する中、国際社会で活躍して欲しい人材という意味で「グローバル人材」などと称されています。

教育から学習へ

従来の大学では、教員が一方的に知識伝授する形式の授業が多く行われていました。しかしながら、現在は過半の若者が大学に進学するようになり、社会も高度化・複雑化し、さらにグローバルな課題を抱えるようになりました。このような状況の中、学生に受動的な学びを強いる知識伝授型の旧いやり方では、社会を変革・打破する人材は育たないと反省の下で、学生自らが能動的かつ主体的に学ぶ授業の開発が行われてきました。対話型授業やディベート型授業などはそのようなものの例です。さらに、設定された課題の解決方策を検討する授業（課題解決型学習：Project-Based Learning : PBL）や、課題そのものの設定から行う課題探求型学習（Inquiry-Based Learning : IBL）なども開発され、実装されるようになってきました。実際、英国や米国などでは、既に国を挙げて IBL 型授業の導入が進められています。本学でも基礎ゼミなどで PBL 型の授業が実践されていますが、さらにこれを加速する必要があります。

里見ビジョンの制定

「全学的教育・学生支援体制検討ワーキング・グループ」の検討と同時並行的に、里見総長の下、今後 5 年間で本学が目指す「里見ビジョン」策定作業も行われてきました。そして 2013 年 8 月 7 日に、7 つの柱からなる「里見ビジョン」が公表されました。その第 1 のビジョンが教育に関するもので、「学生が国際社会で力強く活躍できる人材へと成長していく場を創出します」と謳っておりまます。そしてこれを実現するための 3 つの重点戦略が立てられました。重点戦略 1 は「グローバルリーダーを育成するための教養教育の充実を核とする教育改革」、重点戦略 2 は「グローバルな就学環境の整備」、重点戦略 3 は「学生支援の充実強化」であります。これらの重点施策のそれぞれに、3 つから 4 つの主要施策が立てられています。新機構は、このビジョンを達成するものとして位置付けられているのです。

グローバルリーダー育成と高度教養教育

さて、里見ビジョンでいうところの「グローバルリーダー」が持つべき能力とはなんでしょうか。私たちは次の 6 つのキイコンピテンシー（能力）を掲げました。すなわち、1)専門力、2)鳥瞰力、3)問題発見・解決力、4)異文化・国際理解力、5)コミュニケーション力、6)リーダーシッ

プ力です。端的に言えば、新しい教育組織ではこれらのキイコンピテンシーを身に付けさせる教育を行うことになります。

そのため、私たちは、従来の教養教育を一步進めた「高度教養教育」を構築することいたしました。ここで「高度教養教育」とは、「高度化された内容と方法で、高年次まで提唱される教養教育」のことです。具体的には、1)現代的課題に挑戦する精選された授業科目群の開発・提供する、2)高大接続から、学士課程・大学院課程9年間を見据えた授業科目の配置する、3)専門教育と連携して専門分野の壁を越えた素養と「鳥瞰力」を育成する、4)国際共修や異文化理解プログラム・海外研鑽プログラムを通じてグローバルな視点と理解力を育成する、そして、5)行動力とリーダーシップを備えたグローバルリーダーを育成することです。

「高度教養教育・学生支援機構」について

以上述べてきましたように、「高度教養教育・学生支援機構」は、グローバルリーダーを養成する教育を行うために設置したと言うこともできます。新機構には専任教員と兼務教員を合わせて100名を超える教員が所属することになります。新機構は、部門・室からなる教員組織と、実際に業務を行う11のセンターチームのマトリックス構造となっています。

ここで11のセンターのうち、2つのセンターを紹介しましょう。新設の「教育評価分析センター」は、各部局と連携を図り、全学的な教育情報を収集・分析し、課題を抽出する、いわゆるIR(Institutional Research)機能を持つセンターと位置づけられております。また、統合拡充する「キャリア支援センター」は、学部や大学院におけるキャリア開発プログラムを実施するとともに、就職活動の支援を行います。現在の高度イノベーション博士人財育成センターの機能も統合し、学士卒から大学院卒、さらにはポスドクの就職までワンストップサービスを行う予定です。また、社会人基礎力を付けるための「高度技術経営塾」も継続・強化するつもりです。

おわりに

本稿では、主に新機構設置の背景や狙いを述べてきました。言うまでもありませんが、いくら組織を整備しても、教育内容の高度化とその実践が伴わなければ何の意味もありません。その意味で今回の教育改革は、ひとえに教員一人ひとりの教育実践の如何にかかっているといつても過言ではありません。今回の改革へのご理解とご協力をお願いします。

<参考資料>

全学的教育・学生支援体制検討ワーキング・グループ、2013：教養教育および学生支援のための新しい体制の整備について－高度教養教育・学生支援機構の設置－、2013年11月19日、部局長連絡会議・教育研究評議会承認、20ページ。



二項対立的な外国語教育観を超えて

(平成 25 年度総長教育賞・全学教育貢献賞受賞)

高度教養教育・学生支援機構 教授 浅川 照夫

競争が激しい世界で、手強い相手を心理的に追いつめることを英語で psych out という。日本の英語教育界では今、書き言葉と話し言葉の psych out 合戦が華々しく繰り広げられている。書き言葉の寡占状態が続いていたこの世界で、グローバル化の波と共に、話し言葉がだんだんと勢力を伸ばし、その地位を脅かすようになってきたからである。母語なら滅多に意識されることのない話し言葉と書き言葉の区別なのに、外国语教育になると、こっちが大事だという議論が必ず噴出するのも妙な話である。ある著名な英語の先生が、対談集の中で、書き言葉をしっかりとやっておけば話し言葉に降りていくのはたやすいことだという趣旨の発言をしていた。話し言葉にはいつも難渋している身だけに、この「降りる」という意識のベクトルに目を奪われてしまった。もし言う通りだとしたら、文法訳読大国の日本で、どうして小学校英語とか英語で授業、TOEFL で大学入試といった英語狂騒曲が毎年恒例のように奏でられるのかと怪訝に思ったりもする。

不幸なことに、私たちは話し言葉と書き言葉を対立軸として捉えがちである。このため、文法訳読嫌い派とコミュニケーション軽蔑派がただただ相手を揶揄するばかりの論争が生まれる。外国语学習に王道はないから、あれかこれかでなく、あれもこれもみんな大事の精神でストイックに努力するしかないのに、何と不毛なことかと残念である。話し言葉を知らなければ人とつながれないし、書き言葉を知らなければ世界の大きさを知ることはできない。知恵比べみたいなりふれたナンセンスを言葉の学びに持ち込んではいけない。

この点、かの夏目漱石は大変正直な人だと思う。イギリス留学の終わる頃、明治 34 年 2 月 9 日付の狩野亨吉等宛の手紙で「二年間居つたつて到底話す事一杯は満足には出来ないよ第一先方の言う事が確と分からぬから情けない有様さ（略）元来日本人は六づかしい書物を読んだり六づかしい語を知つ〔て〕居るが口と耳ははるかに発達して居らん（略）斯いふ訳で語学其物は到底僕には卒業が出来ないから書物読の方に時間を使用する事にして仕舞た従って交際一杯は時間を損するから可成やらない」と自分の英会話力の不足を吐露している。軽妙洒脱な書きぶりなので、どれだけ深刻に受け止めていたかは分からない。会話なんて屁の河童、一流の学者と丁々発止議論しまくったなどと豪語しないところがうれしい。こういうのを読むと却って頑張ろうという気になるから、また面白い。

いまさら言うまでもないが、外国语ができるとは 4 技能に満遍なく優れていることを言う。多文化理解能力を追加してもよい。だから、外国语教育は、十分な文法力と豊富な語彙知識を基盤に 4 技能全般の習得を目標にしている。読解力が重要だからと言って会話運用能力を軽視してはならないし、コミュニケーション主体の教育だからと言って文法教育をないがしろにしてもいけない。漱石のように一芸の方に逃げの一手もあるが、残念ながら、今の外国语能力は 4 技能の四輪駆動走行が理想であって、話せても書けなかったり、読めても話せなかったりでは不十分で、

要求される水準はかなり高いのである。

流暢さ (fluency) も正確さ (accuracy) の対極型 (antithesis) として捉えられがちである。例えば、「読む」・「書く」を、数十年前の本学教養部時代に遡って見ると、週 2 回の英語授業は「読解」と「作文」に分かれ、ほとんどの教員がテキストを用いた文法訳読式の教授法をとっていた。教室では専ら正確さのみが追及され、精読と和文英訳による、どちらかと言うと日本語との格闘が授業の中心だったと思う。すばやく読むスキルとか、まとまった英文エッセイを書くなどといった流暢さはあまり顧みられなかった。

今では和文英訳の授業は消滅してしまった感があるが、英文精読の授業は綿々と続けられている。賛否はあるけれども、外国語学習で書き言葉と正確さが求められる限り、文法訳読式の授業が廃れることはないだろう。一文一文を徹底的に分析し解釈することは高等教育では欠かすことのできない立派な学習法である。だからと言って、数十ページを一気に読んで大意を把握する読書を雑な読み方だといって軽くあしらったり、無視してもらっては困るのである。読解は「すばやくかつ正確に」を理想とする。「読む」と訳読式は切り離せないと思われがちだが、今、流暢さを求める動きも出ている。「多読」授業がそれで、自分のレベルにあった本を辞書を引かずにどんどん読み進めていく授業形態である。構文分析や語彙を細かく指導するのも大切だが、併せて、英語を英語として読むための訓練、英語でストーリーを楽しむ読書体験への転換も必要なのである。

米国務省の外国研修機関 (FSI) が調査した外国語習得難易度によると、英語母語話者にとって最も難しい言語はアラビア語、中国語、韓国語、日本語となっていて、仕事に支障をきたさないレベルに達するのに 2200 時間 (88 週) かかるという。フランス語 600 時間、ドイツ語 750 時間に比べると格段の差である。6 名以下の少人数クラスで週 25 時間授業、これに自学自習を毎日 3, 4 時間プラスするという学習条件がついているから、実際は 88 週で 4000 時間近い学習という計算になる。この逆も真だとすれば、日本語母語話者が英語を習得するのに同じ時間かかることになる。途方もない勉強量である。

ところで、東北大生の英語学習時間はどれくらいかというと、中学校 350 時間、高校 437 時間、大学 2 年間で 135 時間の合計 922 時間で、これに予備校や自宅での学習時間を含めれば、数字的には 2200 の 3 分 2 はこなしているようか。しかし、期待するほどの能力が身についていない。原因はいろいろあっても、やはり 8 年間もだらだらと書き言葉教育に時間をかける「五月雨方式の教育 (Drip-Feed Education)」が一番問題なのかもしれない。

TOEFL 成績を他のアジア諸国と比べた場合、日本人が総合力としての英語力に劣ることは明らかである。受験者数の違いとか言語文化的な背景とかの自己弁解を見つけるより、これを素直に認めて弱点強化に努めるべきである。大事なのは、psych out 合戦に費やす時間があるなら、「聞く」・「話す」能力に少しでも自信を持てるような英語教育を開拓することであろう。ただし、4 技能に優劣をつけず、正確さも流暢さも尊重しつつ。



基礎ゼミを通して教養教育を考える

教養教育院 総長特命教授 海野道郎

教養については、これまで、数多のことが語られてきた。しかし、その多くは、二千五百年前の孔子の言葉、「学びて思わざればすなわちくらし、思いて学ばざればすなわちあやうし」に集約されるように思われる。詰め込み教育を脱して「考える力を育てよう」との意図のもとに行われた総合学習は、探求の精神と技術を伴わない担当者によってなされるとき、「ジャンク情報集め」に墮してしまう。思考の基礎となる知識教育の削減と早期の進路分化の結果、脆弱で偏った知識しか持たない若者を大学が迎えることになる。大学において、個別の専門分野を超えた知的基盤を強化することの重要性が、年ごとに大きくなっている。それに対応することは全学教育全体の課題だが、なかでも、その中核を担うのは基礎ゼミにおける訓練である。

東北大学の全学教育の中に基礎ゼミが開設されたとき、専門教育を担ってきた教員の中には消極的な人が少なくなかったが、私自身は、むしろ積極的だった。東北大学に赴任する前、関西学院大学社会学部（1976年度—83年度に在籍）当時の経験があったからである。

関学における基礎演習は、当時、1年生を対象とした通年4単位の必修科目だった。学生の希望を踏まえて20人規模の小集団クラス編成を行い、学生の主体的な参加による小グループでの研究発表や討論を行い、相互啓発を重視しているなど、枠組みは東北大学とほとんど同じである（ちなみに、「展開ゼミ」の制度を作ったことによって、本学においても、実質的に通年の基礎ゼミを持つことが可能となった。私自身は、本学を離れていた間に生み出されたこの変化を認知しておらず、活用しそこなってしまった。残念である）。

関学にいた最終年度に開講した私自身の基礎ゼミは、次のようなものだった。

研究テーマ 模索・探索・思索—知的練達を目指して¹—

使用テキスト 加藤英俊『取材学』（中央公論社）、梅棹忠夫『知的生産の技術』（岩波書店）、本多勝一『日本語の作文技術』（朝日新聞社）、佃実夫『文献探策法入門』（思想の科学社）、野崎昭弘『詭弁論理学』（中央公論社）、大塚久雄『社会科学における人間』（岩波書店）、竹内敏晴『ことがひらかれるとき』（思想の科学社）、真木悠介『気流の鳴る音』（筑摩書房）、その他

概要 混迷を深める現代社会の中で自覚的に生きようとする人間に必要とされる基礎技術—それを訓練するのが、このゼミの第一の目標である。臨機応変な情報探索、鋭い理性としなやかな感性に裏づけられた思索と推論、明確な日本語による的確な表現—このような技術は、諸君が将来いかなる道を選びとろうとも、かならずや必要とされるに違いない、

このゼミの第二の目標は、意味のある小研究を行うことによって、知的活動の醍醐味を体

¹関学のスクールモットーは“奉仕のための練達(Mastery for Service)”である。

験することにある。そのためにわれわれは、第二次世界大戦後における種々の時系列データの分析（前期）、および正当化のメカニズムの事例分析（後期）を行いたい。前者によって、われわれの生きている社会の位置付けを明らかにし、後者によって、現代社会を支える論理と倫理を解明しようとするのである。「楽しい」大学生活を拒否し、自らに＜何事か＞を課そうとする諸君とともに学ぶことを期待したい²。

その 30 年後、教養教育院のメンバーとして今年度に私が行った基礎ゼミは、二つである。それぞれのゼミの目的と概要を示そう。

基礎ゼミ 7 文学作品に見る「社会と思想」

われわれは、現実が発するさまざまな情報に囲まれて、日々の生活を送っている。しかし、日常生活の中でわれわれが見る社会の現実は、極めて限られた一面的なものである。その限界を突破する手がかりの一つに文学作品（特に小説）がある。そこに描かれている事実の多くは、われわれに未知の世界の存在を気づかせてくれる。優れた文学作品を読むことにより、われわれ自身の視野を拡大し、人間や社会に対する理解を深めることができる。優れた文学作品は、また一般に、平易な表現の内に深い思想を秘めている。この授業では、担当教員が示したいつかの分析を踏まえて、受講者が自ら作品を探索・選定し、その中に秘められている思想や葛藤、その作品の社会的背景を分析する。

諸君がそのような課題に取り組む中で、これまでに見えなかつた社会的事実や思想に遭遇することによって知的脱皮を図り、自立した知的人間として自己形成することを期待する。

基礎ゼミ 8 人に会う：生きる意味と世の中の仕組み

大学に入学した諸君が、自立した知的人間として自己形成するための刺激を与えるのが、このゼミの目的である。そのための一方法として、このゼミでは、人間の生きざまに学ぶ。社会の中で過ごす人が、何を拠り所に生きているのか。どのような困難に直面し、どのように克服しようとしているのか。このゼミでは、何人かの人々との出会いを通して、諸君が自らの進路を選択するための可能性を拡充するとともに、自らの人生を積極的に切り拓くための対人技術を習得する。

このゼミでは、数こそ少ないものの、諸君にとっては未知の書物や人と出会うことになろう。それを手がかりに、諸君は、これまでの自らの生を対象化し、知的・精神的に脱皮してほしい。

今年度の 1 セメスターも終わろうとしている。基礎ゼミ 7 では、井上ひさし『吉里吉里人』と木下順二『風浪』について私が範例を示した後、学生が自ら文学作品を選び、その中に見出した「社会と思想」について文章を作り、小冊子に纏めた。基礎ゼミ 8 では、私が選定した先人 3 名（仙台市職員 OB、NPO 代表者、キリスト教会牧師）にゼミ全体で訪問した後、受講生各人が開

² このようなシラバスを踏まえて行ったゼミ活動の一部は、海野道郎.1985.『知的練達をめざして—ゼミ活動の記録—』（関西学院大学総合教育研究室）に記録されている。

心を持つ人を選び単独でインタビューを行った。その記録は、いま作成中である。この冊子が、同じゼミで互いに励まし合った活動の記録として、学生諸君が自らの知的・精神的成长を測る原点となることを願っている。(2014年7月18日)

東北大学教養教育院年報（平成 26 年度）

発 行 平成 27 年 7 月
発 行 所 東北大学教養教育院
(高度教養教育・学生支援機構)
〒980-8576 仙台市青葉区川内 41
電話 022(795)4723
e-mail: info@las.tohoku.ac.jp
<http://www.las.tohoku.ac.jp>